キョーハク少女

ヒロセ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
キョーハク少女

【Ｎコード】
Ｎ８７２２Ｘ

【作者名】
ヒロセ

【あらすじ】
佐藤優大（さとうゆうた）は普通の高校生。特に変わったところのない普通の、それでいて少しさみしい毎日を過ごしていた。そんな優大の楽しみは幼いころ遊んだ山へ行くこと。その日もただ単に暇だったので山へ遊びに行っただけだった。しかしそこで妙な人間に出会ってしまう。それがきっかけで優大の脅迫（される）生活が始まってしまった。ある意味幸せ。

僕と秘密基地と変質者

突然だけど、僕は親友がいない。
友達呼べる人はいると思う。
親友の定義はよく知らないけど、心の底から信用できる友達はいないし、暇だったら一緒に遊ぶような仲のいい友達もいない。そもそも友達と思っている人も厳密に言えば友達ではないのかもしれない。でもそう考えたら悲しくなるから厳密に言わない。
暇な時に一緒に遊ぶ友達がいないと言ったけど、当然日曜日に遊ぶ友達もいないので毎日が暇だったりする。時々、極稀にお声がかかることもあるけれど、大抵の休日は一人家でパソコンと向かい合っている。ニヤニヤ動画はいつみても暇しないなぁ。でもニヤニヤ動画だけを見て休日が終わっているととても虚しい気持ちになる。でもしょうがないよね。
お姉ちゃんと弟がいるが二人とも忙しそうに遊びに出ている。
僕だけ一人、家にいる。
今日も一人だ。寂しいなぁ。
だからそんな時、僕は山へ行く。
何故かと言えば、山は楽しいから。
山には、親友はいないけど親友との思い出ならある。
子供のころに作った秘密基地。
何にも考えないで遊べていた小学生時代。
友達三人で山に秘密基地を作った。その友達も中学校に上がったら突然疎遠になってしまった。同じ中学校なのに疎遠って不思議。
多分、僕が悪いのだと思う。
まあそんなこともういいや。終わったことだしね。とにもかくにも、そう言うわけで僕は山に行った。
家からそう遠くない山。
誰もいない、思い出だけが生きる山。

僕は秘密基地へ向かって山を登った。
少し歩いて山の中腹あたり。標高がそれほど高くない山なので山登りの時間は少し。だけど木が多く雑草も茂っているので足場が悪くて普通には登れない。でも楽しみが先に待っている僕としては全然苦ではない。
僕はすぐに秘密基地にたどり着いた。
基地って言ってもそんなに大層なものではない。ただ木の棒を地面に突き刺してそこにビニールシートをかけただけの簡素な秘密基地。秘密基地と言うより秘密テント。でもあのころの僕らにとっては自分の家よりも居心地のいいところだった。
思い出が詰まった大切なところ。
僕はそれが風化しないように大切に守ってきた。
いつ行っても秘密基地は変わらずに僕を迎えてくれた。
目を瞑ればあのころの笑い声が聞こえてきそうな気がする。でも気のせいだった。
あの日を留めたままの秘密基地。眺める度にとってもノスタルジー。
……でも、今日は少し様子が違った。
秘密基地は壊れていない。いつもの通り汚いままだ。いつもと違うのは、その周り。秘密基地の周辺の地面に妙なものを見つけてしまった。
足跡が、あった。
秘密基地を探るようにぐるぐると足跡がついていた。
正直、怖い。
なんでこんなところに来ているのだろう。この付近に変わった物なんてないのに……。
僕は恐怖に駆られながらも、秘密基地を守るために足跡をたどって行った。

足跡は山の奥深くへ進んでいた。
出来るだけ音を立てずに足跡を追う。
でもすぐに見失った。土から草むらに地面が変わっていた。
見失いはしたが土の上の足跡はまっすぐ進んでいたので、僕は足跡の方向に真っ直ぐ森を進んだ。
そして僕は人を見つけた。
多分、女の人だ。
草の生えていない土が見えているスペースに一人立っているその人は、山に似つかわしくない格好をしていた。
黒いミニスカートから伸びる白くて長い脚。足元はミュールを履いており、よくそれで山が登れたなぁと感心してしまう。上半身はノースリーブシャツにネクタイをつけたこれまた山登りには似合わない格好。露出が多くて虫に刺されちゃうよ。真っ白で綺麗な肌なんだから虫なんかに刺されたらダメだと思います。
周りを囲む大自然とその人の格好はとてもミスマッチだったが、それ以上にその人のモデル体型が山と不釣り合いだった。
しかし。
ミスマッチだろうが不釣り合いだろうが僕にとってそんなことは些細なこと。さらにその人が何かをつぶやいているが今の僕には全く気にならない。

「……ぶつ……ぶつ」

……色んな意味で怖かった。
森の中で不似合いなおかしな格好、でもそれは別にいいと思う。どんな格好で山に登ろうがその人の勝手だからね。モデルのような体型も恐怖とは程遠いもの。
なら僕はいったい何に恐怖しているのかと言うと。
主にその人の頭部。それとその人がとっている行動。
その人は顔に白馬のお面をつけた状態で、青いおもちゃのプラス

チックのバットを握り全力で素振りをしていた。
空を切る軽い音。振っては構え、振っては構える。
野球のことはよく知らないけれど、とても綺麗なフォームだと思った。
バットを振る度にスカートがギリギリまでめくれていて、大変目のやり場に困ってしまう。
馬のお面で視界が狭くなっているせいか、様子を見ている僕の姿に全く気付いていない。さっきから草むらを踏みしめる音を鳴らしているのだけれど、それにも気づいていない。お面の中で自分のつぶやきが反響して周りの音が聞こえづらくなっているのだろうか。
被ったことがないのでよく分からない。
女の人はひたすらプラスチックのバットを振っていた。終いには素振りをやめて地面にバットを叩きつけ体全体で怒りを表現するようになっていた。
地面をぼこぼこにする姿はスタイルの良さも帳消しになる位みっともなかった。
モデルさん並みなのに……何か残念だ。いやぁ、変な人だなぁ。
地面を殴ったり地団太を踏んだり傍にある木を思いっきり叩いて手を痛がったり。
しばらくぶつぶつ言いながらバットを振り回し続ける女の人。不安定な山の地面の上でミュールなんかを履いてあれだけ暴れまわれるなんて運動神経がいいんだなぁなどとどうでもいいことを考えてみる。
そんなことを考えながら僕がその光景に目を奪われていると、突然その人の動きが止まった。
そして、ゆっくりとこちらを振り向き――
「う、うぁあああああああああああ！」
僕は白馬と目が合う前にその場から全力で逃げ出した。本当に怖

かったんだもん。
全力、必死に、何度も転びそうになりながら秘密基地まで止まることなく振り返ることなく逃げてきた。
深呼吸をして息を整える。僕はあまり運動が得意ではないからすぐに息が切れてしまう。膝に手をついて走ってきた草むらを振り返る。

「うわっ！　追ってきてるーーーーーーーー！」

白馬がバットを振りながら猛スピードでこちらに迫ってきていた。

「おわわわわわ」

まだ息が上がっている、走れない！
逃げることができない僕は地面にへたり込むことしかできなかった。
白馬が迫ってくる。ミュールなのに物凄く軽快なステップ。やっぱり僕と違って運動ができるみたい。
ってそんなことよりも……。
僕はどうなってしまうのだろう。あのプラスチックのバットで殴られるのだろうか。痛いのかな？　痛いよね……。
無駄なことだとは分かっていても、僕は後ずさりをして少しでも白馬から距離をとろうと試みた。
当然、無意味。
僕と二足歩行の馬との距離はあと五メートルも無い。ああ、おしまいだ。痛い目にあっちゃう。
諦めた僕。
でも神様は僕を見捨てていなかったようだ。

「！！！」

馬のお面が枝に引っかかり頭からそれが取れた。
女の人の頭が大きく後ろにのけぞり、すぐに前のめりになる。お面の下に隠れていていて見えなかった長く黒い髪が頭を越え顔の方に流れた。艶やかな黒髪一本一本が意志を持っているかのように木漏れ日の光を反射していた。
それに目を奪われていたが、すぐに女の人は恥ずかしそうに顔を隠し逃げるように森の奥へと走り去った。

「な、何だったんだろう……」

ユウ：ってことがあったんだ

まりも：にわかには信じられない話だね

ユウ：でも本当なんだ！　本当に変な人がいたんだよ！？

まりも：もちろん信じているさ。その馬の後を追ったのかい？

ユウ：まさか！　追うわけないよ！　殴られたら痛いでしょ！

まりも：それはそうだけど、気にならないのかい？　そんな変質者滅多にお目にかかれないよ。私なら後を追って正体を突き止めるね

ユウ：でも、怖いし……

まりも：まあそうだろうね。でも今度会ったら是非その姿を激写してほしいね

ユウ：もう会わないよ！

まりも：まあ会わないならそれがいいだろうけどねｗ　それじゃあ、私はもう寝るよ

ユウ：うん

まりも：お疲れ様

僕はスカイペからログアウトしてパソコンを切った。

僕が唯一自信を持って友達だと呼べる人は、ディスプレイの向こうの顔も知らない女の人。女の人かどうかも分からないけれど、自分でそう言っていたので僕は信じている。

その人と毎晩のようにスカイペで話をして、一日を終える。相手の声を聞いたことは無いけれど、きっと優しくって柔らかい人なのだと思う。

実際に会って話してみたいけれど、今の関係で充分満足しているのも確か。

僕は踏み出せずに今日もスカイペでその日遭った事の話をするだけにとどまっているのだった。

僕の学校生活

馬と出会った日曜日から四日が経ち今日は木曜日。僕の馬に対する恐怖心とは裏腹に平和な日々が流れていた。

馬が通学路で待ち伏せしているとか、人込みで知らない人に話しかけられるとかそういった妄想に囚われていたけれど、日常を逸脱するようなものは片鱗すら覗かせることは無かった。

このまま何事もなく馬のことを記憶から追いやることができるのかなと思い始めていた今日この頃。朝学校に来た僕は、人の少ない教室に入り真っ直ぐに教室の一番隅、最後方の自分の席へ向かった。座ってすぐに本を引っ張り出し文字の世界に没頭する。

本は良いよね。文字を読むだけで誰にも迷惑かからないから。

僕の好きなライトノベル。ライトだもんね。ファンタジーや学園モノをよく読んでいる。憧れちゃうよね、こういう世界。

僕の名前は佐藤優大（さとうゆうた）。普通の高校一年生。友達のいない僕を普通と称していいものかどうか悩むところだけれども、普通だと自覚しているので普通って言う。身長も低いし勉強もできない。顔もかっこよくないし性格だってよくない。特殊な能力がないどころか普通の能力すらも無い僕は漫画や小説の主人公にはなれない。

よし、自己紹介の練習もばっちりだ。これでいつ小説の世界に飛ばされても自己紹介に困らないね。……自分で主人公にはなれないって言ってるのにそれを知りながら主人公になることを望んでいる僕ってなんなんだろう……。

でも万が一に備えるのはいいことだよね。うん。

誰とも朝の挨拶を交わすことなく本を読み続ける。寂しい朝だけど、もう慣れた。別にいじめられているわけじゃないよ？　挨拶を交わすほど仲のいい人がいないだけ。

どんどんクラスメイトが登校してきて、教室に人が増えてくる。

本に目を落とし騒がしい教室から視線をそらす、ふりをする。

実は僕の趣味は人間観察だったりする。
誰も僕のことを気にしていないけれど、僕はみんなのことを気にしている。
高校一年生の六月下旬。友達はいないけれど日頃の人間観察のおかげで、大体の性格と人間関係が分かった。
このクラスは、大きく分けて三つの派閥に分かれているらしい。
一つ目はかっこよくて運動神経抜群な沼田君が率いる男子連盟（連盟名は適当）。沼田君は本当にかっこいいしユーモアのセンスもあるしクラスの男子の中で一番信頼されている人。僕も沼田君みたいになれたらなぁっていつも思っている。
二つ目の派閥は女子の中心人物、有野さんが中心となっているチーム有野（やっぱりチーム名は適当）。有野さんははきはきとした物言いで、好き嫌いをはっきりと言うタイプの人。このクラスの女子どころか一年生女子のリーダー格みたいだ。
そして、三つ目――
僕はその三つ目の中心人物に目をやった。
黒くて長い髪。雪のようにふわふわした白い肌。すらりと伸びる細くて長い脚と母性を感じさせる大きな胸。
このクラスの委員長、楠若菜さん。
驚くほど整った顔立ちをしている楠さん。一番美人だと思う人を一人思い浮かべろと言われたら、多分この学校にいる人はアイドルより誰より先に楠さんを思い浮かべると思う。きっと、これからの人生で楠さん以上の美少女には出会えないだろう。
運動神経がよくって、当然のように勉強もできる。
美少女で、勉強ができて、運動神経ができて、おまけに性格までいいと来てる。僕が読んでいるライトノベルの主人公みたいでかっこいい。
三つ目の派閥はその楠さんを慕って集まる楠ファンクラブ（ファンクラブ名はもちろん適当だ。ファンクラブなんて存在しない、仮のものだよ）。クラスの半分の女子を有田さんと取り合っている状

態（楠さんにはそんな気ないみたいだけど）。多分、僕の勘だけど近い将来楠さんが女子の中心になると思う。楠さんはとっても親切で、欠点が見つからない。それに比べて有野さんは少し我が強く、魅かれる人も多いけど敵も多いみたい。僕は惹かれる人間もいないし敵もいないけど……。

沼田君と、有野さんと、楠さんの三人がこのクラスの中心人物。楠ファンクラブとチーム有野は覇権を争って対立しているけれど、楠ファンクラブと男子連盟は男女連合を作るほどとても良好な関係を築けている。男女連合の総長は、当然楠さん。

つまり、実質的にこのクラスのトップは楠若菜さんなのだ。委員長だし、当然と言えば当然かも。

トップの人間が素晴らしい人物なので対立していようがクラスの雰囲気は穏やかだ。楠さんは凄いと思う。

……でも最近、その平穏が脅かされて、不穏な空気が流れだしている……。

有野さんは楠さんがトップなことが本当に面白くないみたいでよく楠さんに突っかかっている。楠さんはと言えば全く気にしていない様子で、相手にしない分不穏な空気は広がらない。でも最近は別の要因も発生してそのせいでクラスの空気が不穏になってきているんだ。

別の要因が発生したのは楠さんが委員長なことが関係している。

委員長は二か月前に決めたのだけれども、副委員長は必要ないということで長らく空席だった。しかし夏休み明けにある文化祭に向けてやっぱり副委員長を決めようという男子の総意でこのたびその一つの席を巡って男子たちが争い始めたのだ。

当然、楠さんと一緒に仕事がしたいっていう下心全開な考えだ。

男子たちは選ばれしものだけが就けるその役職を目指して日々楠さんにアピールしまくっているのだ。さすがに有野さん以外の女子もそれは面白くないみたいで、楠さん……と言うより男子たちに冷たい目線を送っているのだった。

当然、僕は蚊帳の外。
いじめられているわけじゃないよ？
ただ僕なんかがそれに混ざったらもっと不穏な空気になっちゃうからね。僕は見ているだけでいいんだ。
そう、見ているだけで。
そう言うわけで僕はその様子、主に楠さんを眺めていたのだけれども、あ、しまった。
楠さんと視線が合ってしまった。
怒られる。じろじろ見ていたことを咎められちゃう。
うわあああああ。楠さんがにっこり笑って近づいてきた！
慌てて本に目を落とす僕に、楠さんが黒くて長い髪を掻き上げながら話しかけてきた。

「佐藤君」

名前を呼ばれた。でも緊張して顔が上げられない。
寂しい朝に慣れてしまったせいか、誰かに話しかけられる朝が来ると焦ってしまう。

「おーい。佐藤優大君」

反応したいけれどちらりと視線を送ることしかできない。なんて言えばいいんだろう……。
困っていると、楠さんが質問してくれた。

「何読んでいるの？」

質問なら、答えを返せる。

「あ、えっと、これは、ライトノベル……」

「ライトノベル？」

上目遣いで楠さんを見てみると、とても素敵な笑顔で首をかしげ僕の目を見ていた。

「ライトノベルって何？」

「……えっと……、ライトな、小説……」

なんと説明していいものか分からなかったので曖昧な説明になった。

「へぇ！　そうなんだ！」

僕の適当な説明にも明るい笑顔を返してくれる楠さん。みんな副委員長の座を狙うのもよく分かる。

「おもしろい？」

「う、うん」

でも、何故だろう。今までほとんど話したことが無かったのに、一昨日あたりから妙に話しかけてこられる。にこにこ眩しい笑顔を見せてくれるけど、それと同時にクラスの男子全員から熱い怒りの視線も受けることになるので少し居心地が悪い。僕悪くないのに……。

「どうしたの？」

僕の晴れない顔を見て、楠さんが心配そうに聞いてくれた。

「悩み事があるなら私に言ってね？」

「あ、うん。ありがとう。でも何もないから大丈夫だよ」

「本当？　ならいいんだけど」

「うん、大丈夫」

最後まで優しい空気を作りながら、楠さんが女子たちの輪に戻って行った。

あー、緊張した。何と言ってもこのクラスのトップだからね。緊張しちゃうよ。

……。楠さんが離れて行ったのに男子たちの目は依然鋭い。僕悪くないのに……。

僕は逃げるように本の世界に飛び込んだ。

今日も一日何事もなく終わった。

残すはホームルームだけ。

変わらない日常。これがいいことかどうかは僕にはわからないけれど、僕は満足している。日常が変化してどうなるのか分からないのなら、平和な今が続けばいいと思う。

だから早く帰ってお姉ちゃんと弟のご飯作ろう。

机の上で教科書をトントンしてカバンの中にしまう。あとは席について先生を待つだけだ。

先生はすぐに来た。そういえば小学校時代に「先生が来た！」って言ったら「いらっしゃったでしょう！」って本気で怒られたっけ。そこまで怒ることないのにって思ったけどあのころから言葉づかいを教えておけば将来困らないもんね。さすがは先生。

そういうわけで先生はすぐにいらっしゃった。

「席に着けー」

先生の声にみんなが従い席に座る。静かになった教室を見渡しホームルームを始める。

「特に連絡事項はないからさっさと終わろうか」

面倒くさい話をしない先生だからいいね。

「あーそうだ」

あれ？　珍しく話があるのかな？

「えーっと……」

誰かを探すように教室を見渡す先生。僕じゃないよね。僕に用事なんかあるわけないもん。しかし先生僕を見て、

「佐藤、放課後暇か？」

ぼぼぼ僕ですか？！

「えっと、その、……一体なんでしょうか」

「ああ、ちょっとこの後資料の整理があってな。男手が必要なんだが、このクラスで部活をしていないのは佐藤だけだからな」

なるほど……。何もできないからこその僕なんだ。

「あ、あの、でもっ」

「え？　暇じゃないのか？」

「……いえ、暇です……」

「そうか。じゃあよろしく頼む」

……今日の晩御飯は送れそうです、お姉ちゃん。

先生の言いつけどおり放課後残る。

「じゃあ佐藤、ちょっと来てくれるか？」

「あ、はい」

先生に連れてこられたのは三階にある資料室と言う名前のよく分からない教室。本棚の中には沢山の資料が詰め込まれている。これを整理するのかな？

「とりあえずこの本棚を空にしてくれ」

「はい。……はい？」

この本棚っていうと、目の前にある本棚だよね？　幅三メートル高さ二メートル。約。そこにぎっしりと詰まった謎の資料。これを空にするのかな？　本棚から出すだけでいいのかな。

「これを焼却炉に持って行ってくれ」

「え、ええ……」

さっきも言ったけどここは三階。そして本棚はぎっしり。これじゃあいつ帰れるのか分からないよ。

「じゃあ、後は頼んだ」

「え？！　先生は……？」

「俺は仕事があるからな。良いだろう佐藤。どうせお前暇だろう」

「い、いえ、そんなに言うほどは暇じゃないです……」

「なんだ。用事があるのか？」

「は、はい。早く帰らないとお兄ちゃんご飯って言って泣かれるんです」

「あれ？　お前の弟はそんなに幼かったか？」

「あ、いえ、姉です」

「……じゃあ佐藤頼んだぞ」

「え、いや、本当の話で――」

先生は僕の話を最後まで聞かずに資料室を出て行った。

こ、困ったなぁ。本当にお姉ちゃんに怒られてしまう……。

ううん。悩んでいても仕方がない。早く終わらせる以外に帰れる方法がないんだから余計なことを考えずに資料を持って行こう。

僕は本棚の上の方から資料を取り出した。……重い。とりあえず持って行こう。

そして僕は二度の階段の上り下りで腕の筋力が無くなってしまった。本って重たい。どうしよう、これ時間がかかるよ……。

困ったなぁ、どうしよう……。

ああ、いや、そんなことやりながら考えればいいんだ。

僕は本を持った。

ひぃひぃ言いながら階段を下りる。重たいよ。しかもいい方法が思いつかない。

「早く帰らなきゃいけないのに……。遅くなっちゃうよ」

つぶやいてみても何も解決しない。足を動かさなきゃ。

愚痴りながら一階へ続く階段を下りた先に。

「佐藤君？」

まさかの楠さんがいた。

「楠さん。さようなら」

忙しいしどうせまともに話せないから僕は軽く頭を下げて先へ進

んだ。けど、引き止められてしまった。

「ちょっと待って、佐藤君。それもしかして先生に頼まれた仕事？」

「あ、うん。そう」

「大変そうだね。時間かかりそうなの？」

「ううん。そんなことも無いよ」

「でも今遅くなっちゃうって言ってたよね？」

「え、聞いてたの？」

「あ、うん。たまたま、たまたまね？　偶然耳にね？」

なんだろう？　三日前から楠さんに僕のつぶやきをよく聞かれてしまう。僕の声が大きいのかな？

「私も手伝うよ」

「え」

手伝ってくれるって！　さすがだなぁ！

「一人でできるからいいよ？」

でも僕はありがたい申し出を僕は断っていた。だって人に迷惑かけちゃいけないからね。

「でも早く帰りたいんでしょ？　手伝うよっ」

作り物のような完璧な笑顔。みんなこの笑顔に癒されているのだろう。でも僕は困る。直視できないしなんて言えばいいか分からないから。褒めることもできないよ。恥ずかしいもん。

「で、でも……重いから……大丈夫だよ」

「重いからこそ手伝うんでしょ」

「でも、先生だってわざわざ男の僕に言ってきたし、その、楠さんに手伝わせるのは、あの」

「……え」

長いまつげをぱちぱちと動かしとても驚いていた。なんでだろう。まるで断られることが予想外だとでも言うような顔だ。

「……そんなに大変じゃないとか？」

「あ、うん。そう。そう」

「……へぇ、そうなんだ。なら、他に手伝うことないかなっ！」

う、眩しすぎる笑顔だ。目がくらんじゃうよ。

「だ、大丈夫だよ。もうこれで終わりだし？」

全然終わりそうにもないけれど疑問形にしたから嘘にはならないよね。……ならないのかな？

僕の言葉を聞き楠さんがしばらく考え、

「……なら、頑張ってね」

何故だか不満そうに帰って行った。

ずっと資料を持ちっぱなしだったから腕が痛いよ。とにかく早く終わらせよう。

七時。結局三時間かけてやっと終わった。まさかこんなにかかるとは思わなかった。腕はもう使い物にならないね。

全部運び終わったころ、先生が様子を見に来た。

「ありがとう佐藤。もう帰っていいぞ」

ううう……淡白だなぁ。でもいいや。

やっと帰れる……。お姉ちゃんに怒られるよ。

夕日の沈む直前の空。赤い街の中疲れ切った腕を揉みほぐしながら帰路につく僕。途中で、あの馬に会った山へ続く道を通りがかったので少しを眺めてみる。あの馬が待ち伏せしているのではないかとドキドキしながら見ていたら、山の方から人が降りてくるのが見えた。あの時の馬だ！　と慌てて電信柱の陰に隠れた。

緊張する。

また襲われたらどうしよう。プラスチックのバットで殴られてしまう！

そう考えたら怖くていつの間にか向かってくる人に背を向けていた。恐怖で見ることができなかった。

足音が近づいてくる。このまま気づかずにどこかへ行ってくださ

い！
どきどきどきどき。
願い虚しく足音は僕のすぐ後ろで止まった。
「佐藤君？」
その人はとても優しい声で僕の名前を呼んだ。
「え？」
名前を知っているということは僕の知り合いと言うことだ。安心して声の主を確認してみた。
違う意味でピンチだった。
「く、楠さん……」
ああ、今日はよくこの人の顔を見るなぁ。
緊張してなにを話せばいいのか分からないよ。
「佐藤君、もしかして今帰り？」
「あ、うん。そう」
「こんなに時間かかったの？　仕事大変だったんじゃない！」
可愛い声と顔で怒られた。
「え、ま、まぁ……」
「手伝ってあげるって言ったのにっ」

頬を膨らませ可愛く怒る。

「でも、終わったからいいよね」

「……まあ、いいけど。でもなんで助けを求めなかったの？」

「え？　申し訳ないから……」

一瞬とても楠さんに似合わない顔が見えたけどすぐにいつもの穏やかで明るくって親しみやすくって素敵でふわふわでとにかく地上の物とは思えない笑顔を作ってくれた。あれ？　僕ヘンタイかな……。

「今度は私も手伝うからね」

「あ、うん。ありがとう」

やっぱりいい人だなぁ。夕日が山に隠れ始め、赤から黒に変わり始めた街の中、楠さんが笑顔で立っている。僕なんかが正面に立つことは許されることではないのに、ましてや言葉を交わすなんてみんなに申し訳ない。って、あれ？

「あの」

「なにかな？」

首をかしげ、長く夜のように深い色の髪の毛を鳴らす。

「何か聞きたいことでもあるの？」

美人過ぎて自分の存在が情けなくなる。生きているのが申し訳ないよ。僕なんかが一緒の空気を吸ってもいいのかな。

「どうしたの？」

しまった。ついつい自己嫌悪に陥ってしまい楠さんに話しかけたことを忘れていた。話しかけておいて無視するとか失礼にもほどがある。僕は慌てて気になることを聞いてみた。

「こんな時間に山に何の用事かなって思って……。もう暗くなるし、危ないんじゃないかなーって」

あれ？　こんなプライベートなこと聞いてもよかったのかな！　もしかしたら僕はものすごく失礼なことをしているのではないでしょうか！

「ええ、まあ、色々と」

やはりプライベートなことだった。聞いちゃいけないいみたいだ。

「でもこの辺りは変な人が出るみたいだから……。気を付けた方がいいよ？」

僕の言葉を聞いて笑顔が冷たくなる。

「変な人と言うと、たとえばどんな人？」

「え、変って……変な人だけど……」

「だから、どんな人かって聞いてんの」

う、怖い。

「あ、ごめんね」

すぐに暖かい笑みに作り直す。あーびっくりした。怒られるのかと思った。

「それで、変な人ってどんな人？」

何故だか妙に変な人にこだわる楠さん。なんでだか僕には全く分からないや。

「変な人は変な人だよ」

変な人だもんね。

「ヘェソウナンダ」

最終的に妙にぎこちない笑みを作って山の方へ向かっていった。

「く、楠さん？　もう暗くなるよ？」

「ハハハハハ」

笑いながら手を振って木々の中に消えて行った。

危なくないかなぁ……。追った方がいいのかなぁ……。でも怖いし……。……ぷ、プライベートなことだし、追わない方がいいよね。うん。なんで山に行くのか分からないし。

僕は後ろ髪を引かれる思いをしながら家路を急いだ。

家についた僕。

お姉ちゃんに泣かれたり弟にフォローしてもらったり色々あったけど無事に自室のパソコンをつけられた。これが毎日のお楽しみ。

僕はすぐにスカイペにログインし、顔も知らない友人を待つ。しかしいくら待っても友人・まりもさんはログインすることは無かった。

仕方がないので一人ニヤニヤ動画を見てにこにこしておこう。

ニヤニヤ動画かぁ。僕も何か投稿してみたいなぁ。でも僕面白くないしなぁ。何か面白い動画撮れないかなぁ。

……。

あ、そうだ。そう言えば昨日まりもさん（スカイペの相手）に変質者がいた証拠を撮ってきてくれって言われてたっけ。どうせなら動画を撮ろう。あ、別に投稿しようっていうわけじゃないよ？　あの変な人は写真なんかよりも動画の方がその凄さが伝わると思ったから動画を撮ろうって思っただけだよ。

馬の中の人

いよいよ放課後。僕はあの日であった馬の動画を撮りたいがために、先生に捕まらないうちに早めに教室を出で真っ直ぐに秘密基地へ向かった。

やっぱり秘密基地はいつも通りの顔で僕を迎えてくれる。一応念のために、何の念のためにかは自分でも分からないけれど、一応念のために秘密基地もとい秘密テントに首を突っ込んで中を確認してみた。

異常なし。

秘密テントから顔を引き抜き僕は森の奥に視線を向けた。

……。

ここまで来て少し怖くなってきた。やっぱりやめようかな……。

……。

……うん。そうだよね。盗撮になるし、いけないことだよね。やめよう。

と、引き返そうとしたとき。

「！」

僕が登ってきた道から誰かが登ってきた！

逃げる必要はないのかもしれないけれど、馬に対する恐怖がすべての物に作用し僕は思わず森の奥へと逃げてしまった。

逃げて逃げて何故かあの馬が暴れていたところまでやってきてしまった。辺りを見渡してもあの馬はいない。でも後ろを振り返ってみると登ってきた人がこっちにやってきている。も、もしかしたら、あの時の馬本人なのかもしれない……。

恐ろしいので僕は少し戻って木の陰に隠れてやり過ごすことにした。

……怖い。また馬を被っているのかな……。

その人をやり過ごし、その後ろ姿を覗き見る。

背の高い後姿。後頭部から垂れる黒く長い髪が規則正しく揺れていた。しかもその人は僕と同じ高校の制服を着ている。だ、誰なんだ！　顔を見なければ全然わからないよ！

何かを探すようにきょろきょろと視線を動かしている。もしかして僕の存在が見つかったのかもしれない。ど、どうしよう……。やっぱりあの青いバットで殴られるのかな……。で、でも今は何も持ってないし、そもそも馬の人かどうかも分からないし……。

僕が恐怖に支配された精神でがくがくとその人の観察を続けていると、とうとうその人の顔を拝むチャンスがやってきた。

ゆっくりと、その人が振り向く。い、一体……誰なんだ……！

全然想像もつかないよ！

「あれ？」

そこにいたのは馬であるはずのない人だった。

「く、楠さん……？」

完璧少女の楠さん。まさかこんな娘を疑ってしまうなんて。僕はダメだなぁ。

僕は安心して木の影から出た。

「……そこに隠れてたんだ」

ふらりと僕を見る。

「え、う、うん。僕がこの山にいるって知ってたの？」

「当たり前でしょう。追ってきたんだから」

え、誰？　本当に楠さん？　その前に、追ってきたってなんで？

「どうしてここにいるの？」

と楠さん。

「あ、この前ここで変な人に会ったから写真でも撮ろうかなって思って……」

「ふーん。いい趣味してるね」

これは褒められていないと僕でも分かる。

「で、写真はもう撮ったの？」

「え、いや、変な人いないみたいだから……まだ撮ってない……」

「へぇ～……」

楠さんとは思えない顔ですね。

「え、え、え？　も、もしかして僕悪い事した？」

「……分かってるんでしょう？」

いつものような暖かい笑顔じゃない。っていうか、笑顔がないね。ものすごーく怖い無表情。とりあえず怒っているみたいだから謝ろう。僕が悪いんだから。

「ごめんなさい」

頭を下げた。

「やっぱり分かってたんだ」

ゴミでも見るかのような目。怖い。分かってたって、いったい何のことだろう……。でも怖いから聞けない。

「それで、気になることは無い？」

「え、えっと……」

しいて言うならばなんで怒っているのかを聞いてみたい。けど怖いから聞けない。

「聞く必要がないって？　へぇ、それはそれは」

何も言ってないけど。

あの優しい楠さんがここまで怒るなんて……。僕はそれだけのことをしたんだ……。ああ、償いたい。でも罪を自覚していないのでどう償えばいいのか分からない。聞けばいいのだろうけれど、怖いから聞けない。

「ご、ごめんなさい……」

謝ることしかできない僕を誰が責められようか。

「見ちゃってごめんなさい？　ムカつくね」

む、むかつく?!　あの楠さんが今ムカつくって言った?!　やっぱり偽物?!　怖いから怒っている理由聞けないと思ったけど、聞かないで怒られている方が怖いことに今気づいたよ!

「あの、その、な、なんで怒っているのかわかりません!」

思わず敬語になるほどに怖い!

「いい加減分からないフリやめてよ。私だってもう隠さないで本音で話してるんだからさ、君も本音で話そうよ」

「ほ、本音です……。本当に分からないよ……」

「嘘ばっかり。ずっと私の事監視してたじゃん。あの時顔見たんでしょ」

あ、なるほど。ここ最近目が合う機会が多かったから監視されてると思われちゃったんだ!　でもあのときっていつのこと?!

「ごめんなさい!　その、あの、えっと」

言い訳のしようがないよ!

「ごめんなさい……」

学校生活を諦めよう……。楠さんに嫌われるのは一年生全員に嫌われるのと同義だから。

「謝らなくていいから。とりあえずあの時落とした私のお面返して

よ」

怒った顔で手を差し出してきた。

「お面……？　って、何？」

はぁあああああああと大きくため息をつく楠さん。

「い　い　か　げ　ん　に　し　て　く　れ　な　い　か　な」

一文字一文字間にスペースが入るほどにキレていらっしゃる！

「あの時の馬のことに決まってんでしょ。持って帰ったの？　捨てたの？」

……。

「え、なんで馬のこと知ってるの？　あれ？　楠さんも見てたの？」

どこにいたんだろう。木の陰に隠れてたのかな？

「見てたって……そんなの知ってて当たり前じゃん」

眉根を寄せて怒っていることを教えてくれる。

「ど、どうして？」

僕は首をかしげて聞いてみる。

「ああ、なるほどね。私の口から言わせたいわけ」

な、何のことだろう。
何かに納得したように頷いて楠さんが言った。
「あの時の馬は私です。これで満足ですか？」
……。
……。
……。
……ええええええええ？！
それ初耳なんですけども！　全然わからなかったよ！　うん！
「それで」
楠さんがこっちに近づいてきた。
「そ、それで……？」
僕の目の前で止まる。
「この事実を知った君はどうするつもり？」
「ど、どうするもこうするも……」
今初めて聞いたし、まだ何も考えられない……。
「まあ、どうせ君も他の男みたいに私をいやらしい目で見てるんでしょ。私は可愛いからね」
うん。自分で言っても許される可愛さだと思うよ。

「そういう人間が何をするのかは大体想像がつくよ」

何をするって……、黙ってるつもりだけど……。言いふらしたりしないよ？

「どうせ君はこのネタを使って脅すつもりなんでしょ」

「えええええ？！」

そんなことしないよ！　って言いたいけど楠さんの顔が近すぎで緊張して言葉が出ない。

「あーいやらしいいやらしい。人間なんてみんなそう。特に男はクズばかり。女みたいな顔してる君だって例には漏れないでしょう」

と言って顔をぐいっと近づけてきた。

うわー！　近い！　綺麗な顔が近いよ！　思わず目をそらしちゃうよ！

「でも私はそんなことさせないよ」

楠さんが片手で僕の頬を挟み込み、無理やり自分と向かい合わせる。僕の方が背が低いから少し見上げる形になってしまう。僕は直視することができずに固く目を瞑った。

「君は私を脅せない」

「う、ううう」

い、痛いです。痛いです楠さん。

「だって、脅すのは私の方だから」

「え？」

どういう意味か分からず目を開ける僕。いや、もう開けない方がよかったとすぐに後悔したよ……。

目の前に広がる楠さんの綺麗な顔。眩しいよ。

いや、そんなことよりも。

僕は、

何故だか分からないけれど、

楠さんに、

キスをされていた。

「！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

……。

ぎゃあああああああああああああああ！　意味が分かりませんんんん！

僕は完全に思考が停止してしまい指先一つ動かすことができなくなっていた！

直立不動の僕の横で、携帯のシャッターの音が鳴った。それと同時に楠さんが離れる。

「な、なななななにを？　なななんで？！」

ぼ、僕の純潔が！　何が起きているのでしょうか！　これ地球終るんじゃないの？！　ぼ、僕のような下賤な人間が楠さんとせせせ接吻を交わすなどと世間様にももも申し訳が立ちません！

「……」

楠さんは慌てる僕を無視して、満足そうな表情で携帯を眺めていた。

「くくくくく楠さん?!　せせ説明をお願いしてもいいですか?!」

とりあえず僕は無視される。

「ああ、なんて哀れな私……」

よよよと泣きまねを見せる楠さん。な、何が起きているのかさっぱり分かりません!

「い、いったい、どういうことでしょうか……」

少し落ち着いてきた。でもドキドキは一向に収まる気配を見せてくれません……。多分今日はもう無理です……。

「君は今私に無理やりキスをしたの。そう言うこと」

無理やりって何?!　意味が分かりません!

「あ、あの、詳しい話を教えてほしいんだけど……」

「そんなことよりさっさと携帯出してって言ってるの。赤外線送信」

「え、あ、はい」

同じこと言わせないでみたいなことを言われたけれど初めて聞いたよ。でも僕は言うとおりに携帯をだし、楠さんの携帯と向かい合わせる。そして言われるがままにプロフィールを送信した。

楠さんが送られてきた僕のアドレスにメールを送ってきた。僕はそれを開封。何やら添付されている。開いてみた。

「うぎゃあああああああああああああああああああああ！」

楠さんと僕のキスシーンだった！　なんの羞恥拷問ですか！

「なななななんですかこれは！」

「そんなの決まっているでしょう。私が、君に、無理やり、キスを、されているシーン」

「そんなに単語分けしなくても分かります！」

でも結局なにを言っているのか分からないので慌てて写真を見てみる。恥ずかしい！　恥ずかしすぎるよ！　けど我慢してよく見てみる……。

自分のファーストキスを客観的に見てみる。異次元の美貌を持つクラスメイトと唇を合わせている僕。……。うばばばばばばば。……いや、もう現実に起こったことを認めて前へ進もう。僕は取り返しのつかないことをしてしまったんだ。罪を背おって生きなければ。

とにかく今は楠さんの言葉の意味を知ろう。

何となく薄目でディスプレイを見る。

楠さんはなんて言ったっけ。

無理やり、僕が、きききき、キスを、しているシーンって、言ってたっけ。

ディスプレイに映し出されていた楠さんの表情は苦しみに満ちたもので、確かに、どう見ても、僕が無理やりしているようにしか見えなかった。

「あーあ。私のファーストキスが君みたいなもやし野郎に奪われちゃったのか。人生何が起きるか分からないね」

「……も、もやし……」

口が悪い……。楠さんだとは思えない……。

って、ファーストキスだったんだ……。……。……。……。

それってこんなところで散らしていいものなのですか?!

「とりあえず、君は無理やり私にキスをした。その事実はオッケー?」

「……。……いやいやいやいやいやいやいや! おっけーじゃないよ! ちょっとぼーっとしてたけどオッケーじゃないよ! アウトです!」

「うるさいね。君は今私に口答えできる立場じゃないの」

そう言って携帯を開いて僕に写真を見せてきた。

さっと視線を外す。自分で見るのより楠さん本人に見せつけられたほうがなんだか恥ずかしい。

「そ、そんな。く、楠さんが……じぶんで……」

「あーはいはいはい。別に君がどう思っててもいいよ。こっちには証拠があるんだから」

「証拠って……。それは楠さんが僕に無理やりキ、キスした証拠じゃあ……」

「何言ってるの？　この写真が全てを物語っているじゃない」

「確かに、この写真だけ見たら僕がその、無理やりしているように見えるかもしれないけど……ちゃんとみんなに説明すれば……」

「私と君の言葉、みんなはどっちを信じるかな」

う。当然楠さんの言葉を信じるね……。僕だってそうだもん。僕みたいな芋虫なんかより楠さんのような蝶の話を信じちゃうよ。

「ご理解いただけましたかね。君のこれからは私が握っているの。脅す立場から脅される立場になっちゃったの。オッケー？」

おっけーと言わざるを得ないよ……。

「ううう……僕脅すとか考えたことなかったのに……」

そもそも知らなかったんだから。

「嘘ばっかり。人間はみんなクズ。どうやって上に立つ人間を蹴落とすかしか考えてないんだから。完璧美少女である私の欠点を見つけた君はそれをネタに私を脅してエッチな命令を下してそれを眺めながら下卑た笑みを浮かべるつもりだったんでしょう気持ち悪い」

酷い妄想だよ本当に。

「でも残念。君はこれから私の言うことを聞かねばならない立場になりました。とりあえず手始めに馬返して」

ずいと手を差し出してくるけど僕は何も渡せない。

「ほ、本当に知らないよ……」

あの後すぐ帰ったもん。

楠さんがゴミを見る目で僕を見た後、ため息をつき言った。

「……まあいいや。じゃあひとまず今日は解散。明日君の家に行くからそのつもりで」

え、僕の家に来るの？　あの超絶美少女が？　すごいことだよこれは。でも全然嬉しくないや！　不思議だね！

「今は混乱しているだろうから、一晩よく考えていいよ。でも一晩だけしか時間あげないから」

そう言いながら僕とすれ違いこの場を去る楠さん。

僕はがっくりとうなだれた。何が何だか分からない……。

「佐藤君」

後ろから聞こえてくる声が僕の耳をくすぐる。先ほどまでの声じゃない。僕は思わず振り返っていた。

そこにいたのは、いつもの、僕が知っていた、誰もが憧れる優しい楠さんだった。

「ばいばい佐藤君。これから、仲良くしようねっ」

その表情を見て、不覚にも僕はドキドキしてしまった。

楠さんとキ、キスをした次の日。
土曜日だよ。
ドキドキを収めてやっとのことで眠りについた金曜日。眠るのが遅かったから、いつもより深い眠りについていたらしい。
起きた時にはいつも起きている時間、朝八時を一時間も過ぎていた。
つまり今は九時。
寝坊したこともそれなりに驚いたのだけれども、今はそんなことはどうでもいいと思える状況だった。

「あわわわわ」

どんどんと。
僕の部屋の窓が叩かれていた。
物凄く怒った顔をした美少女に。

「な、何してるの楠さん！」

僕の部屋は二階。楠さんが立っているのは屋根。もちろん斜めの屋根。
僕は慌ててカギを開け屋根の上にいた楠さんを部屋に迎え入れた。
ベッドに降り立ち僕を睨み付ける楠さん。ジーンズにTシャツ。動きやすい格好だ。初めから屋根の上に登るつもりできたのだろうか。

「起きるのが遅いよ。私がどれだけ待ったと思ってるの」

そう言って肩にかけていたカバンを僕に投げつけてきた。
どれだけ待っていたかは、楠さんの髪がぼさぼさだから長時間風にさらされていたのだろうと想像できる。
僕はカバンを地面に置き聞いてみた。

「な、な、なんで屋根から?!　危ないよ!」

ぼさぼさの髪の毛を撫でつけながら楠さんが言う。

「何言ってるの。昨日君が無理やり部屋に連れ込んだんでしょう。だから君の家族は私がここにいることを知らない。私がここで助けてと叫んだら君は自宅でさえ居場所がなくなってしまう。叫んでいい?」

「そ、そんな理不尽な……。僕は何もしてないのに……」

「寝ぼけてるの?　佐藤君、君は昨日私に無理やりキスをして無理やり部屋に連れ込んでいやらしいことをしたでしょう。覚えてないの?」

「そんなことしてないよ!　特に後半身に覚えがないどころの騒ぎじゃないよ!」

「なに?　口答えするの?」

ジト目で僕を見下ろす。でも感情はこもっていない。

「ここで叫んでもいいの?」

「よ、よくないです……」

「なら認めて。君は、私を、無理やりここに連れ込んだ。はい、復唱」

「うぅ……。僕は、楠さんを、無理やり部屋に連れ込みました……」

「はいご苦労様」

そう言いながら何かを機械を取り出す。そしてそれをごそごそといじると。

『僕は、楠さんを、無理やり部屋に連れ込みました』

機械が僕の声を再生していた。

「って、録音してたの?!」

「そうだけど。それほど驚くことでもないでしょ？　初めて見た？　ＩＣレコーダー」

「ＩＣレコーダー初めて見たけど、その前になんで録音なんかするのっ！」

「脅すネタを増やすためだけど。そんな当たり前の事聞かないでくれる？」

な、なんていう美少女なんだ……。僕達は今までとんでもない勢いで騙され続けていたみたいだ……。猫被ってたとか、そんな言葉じゃあ足りないよ。でもいい表現が思いつかないから猫をかぶってたとしか言いようがないんだけど……。

まあいいや。
撫で続けられた楠さんの髪はセットしたばかりのように整っていた。すごい潤いヘアーだなぁ。
ベッドにへたり込み楠さんの黒い髪に見とれていると、ずずいと顔を寄せられ至近距離で見つめられた。くりくりとした大きな瞳に僕の顔が映し出されている。映し出されたその顔は何とも情けない男らしさとは無縁の顔だった。っていうか、綺麗な肌が近すぎて僕の顔が真っ赤だよ！

「ねえ」

「な、なんですか……」

また怒られるのかな……。

「とりあえず、着替えようか」

「え、あ、うん……」

パジャマじゃダメなのかな……。
僕はベッドから降りてタンスを開ける。服を取り出し気付いた。振り向き楠さんを見てみる。ベッドの上にアヒル座りをしてばっちりこちらを見ていた。

「……あ、その、楠さん……、その、見ない方が、いいんじゃないかな……」

「ああ、そう。恥ずかしいんだ。顔もそうだけど性格も女の子みたいだね」

そう言って僕に背を向けてくれた。
そ、そんなの、可愛い子に見られてたら恥ずかしいに決まってるよ……。僕も背を向けて着替えを始める。
ささっと下を着替えて、上を脱いだ。が、その時、
ぱしゃ。
と、聞きたくない音が聞こえてきた。
上を着ないまま振り向いてみる。そこには当然携帯のカメラを構えた楠さんが……。
急いでシャツを着て猛然と抗議をする僕！　当然だよ！　今回ばっかりはちょっと強めに言っちゃうよ！

「そ、その、な、なんで、写真なんか……」

「部屋に連れ込んだ君が服を脱いで私を襲おうとしている証拠」

「そ、そんな……！」

「君サイテー。か弱い女の子を部屋に連れ込んでこんなことをしようとしているだなんて」

「してないよ！　する気も無いよ！」

「する気も無いって、それ失礼でしょう。ふざけてんの？」

「う……」

確かに失礼だった……。

「訂正して」

「え、え？」

「いやらしいいことする気はありましたと、訂正して。さあ、ほら早く」

「う、うぅ……」

た、確かに、今のは楠さんを傷つけてしまったかもしれない……。ここは素直に訂正しよう。

「……そ、その、僕はいやらしいことする気がありました……」

え？　あれ？　そんな気はもともと持ってなかったから訂正する必要なかったような……。

「はい録音」

「え？！」

「当然でしょう。君頭悪いの？」

う、うううううううううう！

諦めよう。僕はもう社会的に死ぬんだ。

「はぁ……」

「怒らないんだね」

「うん。僕が悪いし……」

「……」

「僕が気を付けておけば防げたことだから楠さんに文句を言うのは間違っている……のかな？」

「知らないよ」

だよね……。

うなだれる僕に楠さん。

「ねえ佐藤君」

「な、なに？」

「なんで君はそんなに遠慮してるの？　私はこんなに心を開いているのに君はずっと閉じたまま。なんかムカつくんだけど君の愚行をみんなにばらしていいの？」

「そ、そんな……。そんなこと言われても……。僕なんかが楠さんになれなれしく話すなんて許されることじゃないし……」

「何それ。脅してくる奴相手にへりくだるって君どれだけマゾなの」

「ま、マゾじゃないけど……。本当のことだし……」

「……私が心を開いているんだから佐藤君も心を開くべき」

「え、で、でも」

「でももしかしもない。ばらすよ」

……本当に僕は脅されています……。

「わ、分かったよ。本音で、接します」

「約束だから。じゃあそう言うわけで、佐藤君朝ご飯まだでしょう。食べてきていいよ」

「え、楠さんは？」

「私は食べたよ。そもそも忍び込んだんだからご家族の方と一緒にご飯は食べられないでしょ。さっさと一階へ行ってご飯食べてきて。そのついでに何か飲み物を持ってきて。君と私の分二つね。できればお茶」

「う、うん。じゃあ、僕は、ご飯を食べてくるね」

「はいはい」

僕を脅していると言っても、やっぱり楠さんは優しいなぁ。

朝の食卓は平和で幸せだった。家族みんなで食べるごはん。おいしいよね。

ご飯を食べ終え、お盆の上にお茶を二杯乗せて二階へ上がる。なんで二杯持っていくのかお姉ちゃんに怪しまれたけど僕の部屋にお

茶好きの幽霊がいるんだと言ったら納得してくれた。
自分の部屋だけれども、楠さんがいるのでノックをしてから入る。
「入るよ？」
ゆっくりと扉を開いて中を覗くと楠さんが堂々と部屋をあさっていた。
「あれ？　探し物？」
何も隠していないけれど。
「……その反応を見ると、別にエロ本とか隠していないみたいだね……」
「え、エロっ……！　そんなのないよ！　そんなの探さないでよー！」
「……本当に男なのかな……。情けない声出してみっともない」
ぶつぶつと言いながら楠さんが勉強机から椅子を引っ張ってきて座る。
「うう……。よく言われるよ……」
僕はお茶の乗ったお盆をテーブルの上に置いてそのまま床に正座をする。テーブルの上に空のタッパが置いてあるけどなんだろう？
「佐藤君本好きなんだね」

「え？　あ、うん。好き」
「漫画本とかが多いね」
「うん」
「アニメも見るんだ」
「うん」
「オタク？」
「う、うーん、オタクの人から見たらオタクじゃないと思うけど……」
「じゃあオタクだ」
「……サブカルチャーに全然興味がない人から見たらオタクかも」
「オタクなんだ」
「あ、その、楠さんよりは……」
「オタクなんでしょう？　言い切ってよ。ウザい」
「は、はい。僕はオタクです……」
ウザいって言われちゃった……。あの楠さんにウザいって言われちゃった……。

「今度からはすぐに答えてよね。何度も聞き返すの面倒くさいから」

「あ、うん……」

怒られちゃったよ。

「なにかおすすめとかある？」

「おすすめ？」

「面白いアニメとか、漫画とか」

「あ、えーっと……。楠木さんは、その、どんなのが、好み……なのかな」

「うーん。平和なの」

「平和なの、なら……。そこにある、とある女子高の軽音楽部っていうのが平和で面白いよ」

ふーん、と興味なさげに呟いて椅子をくるくる回す。興味ないのなら何で聞いたんだろう……。

椅子の回転をピタッと止めて僕を見る。

「それで、君は男の情事やらをどうしているのかな？」

情事？　情事ってそういうことかな……？　……はぁ？！

「な、なな何を突然言っているの？！　何を言っているの？！」

「繰り返さなくても聞こえているから。で、どうしてるの？」

「ししし知らないよ！」

「……まあ、いっか。ただの興味本位だし」

「う、ううう……」

なんか強いよ、この人……。

「ああ、そうだ」

「な、なに？」

声をかけられる度に怖いよ……。なんだか調教されている気分だ……。

「色々と部屋を調べさせてもらったんだけど、タダで探すのは申し訳ないと思ったから調べた個所に代金としておはぎを置いといたから」

「おはぎ？！」

「ほら、ベッドも調べさせてもらったからそこに」

楠さんが指さす方、僕のベッドの上を見るとおはぎがその肌を剥き出しのまま銀紙の上に鎮座していた。

「や、やめてよー……。蟻が来ちゃうよー……」

「嬉しくないの？」

「嬉しくないよー……」

「あれそれは残念。合計九個おはぎを隠したのに喜んでもらえないなんて」

「九個！？　結構多いよそれ？！」

「まあいいや」

「僕はよくないよ！」

「なら探しておはぎたちを助け出せばいいと思います。その間私はここにある君のパソコンをいじらせてもらうから」

「う、うぅ……」

どうやらおはぎの生息地は教えてくれそうにないね……。仕方がないので、僕は一人おはぎ探しをすることになった……。机の上のタッパはおはぎを持ってきた入れ物だったんだね……。

そして僕は無事に全九個のおはぎの救出に成功した。タンスの中、押し入れの中、引き出しの中、カバンの中……。色んなところにちりばめられたおはぎを探し終えたとき、僕はまるでドゴランボールをそろえたかのような気分になった。願い事が一つ叶うのかな？

そうだとしたら何を願おうかな！　身長も伸びてほしいしおいしいものも食べたいし。でもやっぱり一番欲しいのはパソコンソフトの終音ミコが欲しいかな。歌を作ってニヤニヤ動画に投稿したいな。

おはぎを見つけ終え楠さんの後ろで正座をする僕。

「ねえ佐藤君」

おはぎ事件に対して特に反応も見せずディスプレイを見つめたまま楠さんが聞いてくる。

「どうしたの？」

「エロ画像はどこにあるの」

「エロっ……！　そ、そんなのないよ！」

「君は聖人ですか。三大欲求の一角を担っている性欲が佐藤君には無いの？」

「そん、そんなの気にしないでよ！」

「……まあ、脅せば済むことだけど、別に処理の仕方が気になっているわけじゃないからいいや」

なら聞かないでよ……。

「それで佐藤君」

「な、なに？」

「このパソコンは何のために使ってるの？　Ｄドライブの中身が空っぽなんだけど、エロ画像もエロ動画も見ないなんてパソコンとしての役割が果たせていないでしょ。これじゃあただの暖房器具じゃない」

「僕パソコンを駆使しているわけじゃないからパソコンの事全然詳しくないけど、パソコンってそんなえっちなものじゃないと思うよ……」

「パソコンを個人で所有している人の９９パーセントはエロ目的でパソコンを買っているの。君が残りの１パーセントだとは思えないから君はエロス。うちの兄もエロス」

「お兄さんがいるんだね」

楠さんが大きな瞳で僕を睨み付けてきた。

「ちょっと。なんで私の個人情報を知ってるの。もしかして私のこと調べてたの？」

「え、い、今自分で……」

「録音するから調べてましたって言って」

「とうとうオープンに録音しだした！　これじゃあどんな言葉でも人質に取られちゃうよ！」

「そうだね。なら『楠さんに酷いことをしました』って言って」

「い、言わないよ！」

「……自棄になられても困るし、無理な注文はやめておこうか」

「そ、そうしてくれると嬉しいよ……」

「感謝してね」

「う、うん」

感謝しなきゃね。

「それで、この暖房器具は他にどういう機能がついているの？　エロ画像を見る機能はつけていないみたいだけど」

暖房器具扱い……。

「僕の場合はニヤニヤ動画とか見たり、２・１ちゃんねるを見たりしてるよ。だから用途としては暇つぶしかな？」

「ふーん。暇つぶしね」

カリカリとホイールを回す楠さん。

「私さ、思うんだけど」

「うん」

「インターネットしてたらよく見る、（※ただしイケメンに限る）ってあるでしょ？」

「うん」

「あれさ、逆バージョンの方が該当ケース多い気がするんだよね」

「逆バージョンってどういうこと？」

「（※ただし美少女に限る）っていうこと」

「？」

やっぱりよく分からなかった。

「もしかしたら私の勝手なイメージなのかもしれないけどさ、デブで暗い男と、デブで暗い女を比較した場合、デブで暗い男の方がポイント高い気がするの」

「……ご、ゴメン。よく分からない……」

「たとえばね、デブ男がカラオケに行きました。歌がうまい。デブ夫のくせにやるじゃんってなるでしょ？」

「う、うん」

「でもね、デブ美がカラオケに行って歌がうまくても、それはただ気持ち悪いだけなんだよ」

「え〝……。そ、そうかな……。すごいと思うけど……」

「歌がうまい（※ただしイケメンに限る）は無いけど、歌がうまい（※ただし美少女に限る）はあると思うの。ブ男には適用されない

けど、ブ女には適用されるケースが多い。そう思うのは私だけかな」

……多分、楠さんだけだと思う。

「女性歌手の殆どはビジュアルがいいでしょ。でも男性歌手はそうでもないのもいるでしょ？」

う、うーん……。なんて言うか、同意しづらい……。

「その、あの……」

「言いたいことがあるならはっきり言ってよもやし太郎」

も、もやし太郎……。キャベツ〇郎みたい。

「心を開くって言ったでしょ。もう約束破るの？　なんだ、君、無理やりキスしたことみんなにばらしたいんだ」

「そ、そんなことないよ！」

「なら言ってよ」

怖いです……。言うよ、言いますよ……。

「う、うん。あのね、人を見た目で判断するってよくないと思う……」

「へー。君は見た目で判断しないの？」

「し、しないよ」

「なら私を特別視してない？　クラスで一番可愛い私を少し高い位置においてない？」

う。それは、ちょっとあったかも……。

「で、でも、楠さんは本当に何でもできるし親切だから尊敬するのは当然だよ」

「ビジュアルが論外でも？」

「う、うん。それは、そうだよ。関係ないよ」

「……へぇー。まあ、そう言えば君はその他大勢の男子と違って私にまとわりついてこないもんね。」

「う、うん」

「本当に男なのかな」

「一応……」

「男ならシャキッとしなよ。どうでもいいけど」

どうでもいいんだ……。まあ、そうだよね……。

「……あ、そう言えば……」

聞きたいことがあったんだった。

「なに？　何か気になることでもあるの？」

「そ、その、聞いてもいいかな」

「内容を言わないでそんなことを聞かれても」

「そ、そうだよね。あの、あの山での出来事について聞きたいことがあるんだけど、聞いてもいいかな」

「脅すネタを増やそうっていうんだね。別にいいよ、かかってきなさい」

そんなつもりじゃないのに……。

「あの、あそこで何をやっていたの？　怒っているように見えたけど……」

「何言ってるの。私の言葉を聞いていたでしょ。ああ、また私の口から言わせたいんだね。すごく陰険。ますます君のことが嫌いになっちゃった」

う、ううう……。もっと嫌われちゃった……。でもしょうがないよね……。僕が悪いんだから。

「私はいつもあそこでみんなの悪口を言ってるの。人と話すだけでストレスたまるからさ。あの日は一緒にデートした井上先輩のことについてイライラしてた」

「あ、井上先輩って言ったらかっこいいことで有名な先輩だよね。さすが楠さん。井上先輩にデート誘われるなんてすごいよ」

「何それ嫌味？　イライラしたって言ってるじゃんか。あいつ触るなって言ったのに私の体べたべた触ってきやがって……！　今思い出してもイライラしてくる！」

ここに来て初めて感情を見せてくれた。けどそれが怒りなのが少しいやかなり悲しい。

「あああああああああ……！　気持ち悪い……！」

キーボードをガンガン叩く楠さん。

「あ、その、やめてほしい……んだけど……」

「何が？！　何を！」

「いや、えっと、キーボードを、壊すのを……」

「……ならこんなところに置いておかないでよ」

「で、でも、キーボードなんだからパソコンにつないでおかないと……」

「すぐそれ。触られたくないのなら人目につかないところに置いておけっていうの」

う、ううう……。そんなの間違ってるよ！

「ううう……」

「喘がないでよ気持ち悪い。もしかして私の後ろ姿で情事を済ませたの？　気持ち悪いから学校やめて」

「そんなことしてないよ！」

「あっそう。疑ってごめんね。お詫びにエロ動画ダウンロードしておいたから」

「ええ？！　いらないよっ！」

「いらないの？　ふんどしの男たちがぶつかり合う動画いらないの？」

「ますますいらないよ？！」

「あれ。一応異性に興味があるんだ。男色かと思ったのに違うんだね」

「違うよ！　勘違いも甚だしいよ！」

甚だしいっていう言葉を初めて使ったよ！

「なら私は女の子が大好きですって言ってよ」

「ＩＣレコーダーを構えながら言わないでよ……」

「ばれたんだ。ばれないかと思った。佐藤君だから」

「僕目悪くないけど……」

「察しは悪いでしょ」

う、そうかも。

「あーあ。今日の収穫は少なかったよ」

「しゅ、収穫って、何？」

「もちろん君を脅すための材料に決まってるでしょう。致命的なものがまだないからね。エロ画像でも見て佐藤君の趣味を把握しておこうかと思ったんだけどどうやら君は聖人君子みたいだからうまく行かなかったよ」

そんな理由で僕の部屋に来たんだ……。

「まあいいや。とりあえず君のパソコンの中にガチムチ動画が入っているのを写真に収めさせてもらったから」

「そんな！　それ楠さんが自分でダウンロードした動画だよ！？僕の趣味じゃないよ！」

「そんなの関係ない。現に君のパソコンの中に動画が入っているんだから。言い逃れはできないよ」

ひどすぎる……。

僕はぐったりうなだれた。僕はどうやらいじめられるみたいです。

「あ、お茶貰うね」

椅子を回し手振り返り、お茶に手を伸ばした楠さん。

「……」

だけれども、お茶を握って動きを止めた。

「どうしたの？　楠さん」

「……君、このお茶の中に何か薬入れたでしょ」

「そんなことしないよ……。そもそも薬なんか持ってないよ……」

とても心外だ。でも疑われる僕が悪いんだろう。

「なら、僕が先に飲めばいいよね？」

「そうだね」

すごく警戒しているなぁ。でもしょうがないよね。初めて訪れる部屋なんだから。

僕は傍にあったコップを手に取り、口へ近づけた。が、

「ちょっと待って。そっちじゃなくてこっちを飲んで」

「え？」

「そっちには何も入ってないかもしれないし」

「う、うん……」

すごく警戒しているよ……。

楠さんに近い方のコップに持ち替えて僕は一口飲んだ。

「……問題ないみたいだね。じゃああありがたくいただくよ」

お茶とおはぎを持つ楠さん。

「うん。おいしい。佐藤君も食べていいよ」

「え？　ありがとう。じゃあ……」

「あ、旗が刺さっている奴を食べてね」

「うん」

残り八個のうち旗が刺さっているおはぎは一つ。僕はそれを手に取り一口食べた。驚くほどおいしかった。

「……」

何故だかその様子をじっと見つめている楠さん。なんだろう？

あ、そっか。

「おいしいおはぎだね」

きっとこう言うことなんだよね。

「そんなことはどうでもいい」

……どうでもいいんだって。でもおいしいのは本当だからすぐにペロリだよ。

「……くふ」

楠さんが笑った。暖かくない笑みだった。

「ど、どうしたの？」

「それには下剤が入っています」

「……え？！」

なんてこった！

「ひ、酷いよ！　なんでこんなことするの……？」

「言うことを聞かせる為に」

ど、どういうことだろう……。

「う……早速お腹が痛くなってきた気がする……」

下剤の効きが早い気がするけど、多分これは僕のメンタルが弱いことによる思い込みだと思う。

「ちょ、ちょっとトイレに行ってくるね」

立ち上がり、ドアへ向かうが、

「待って。待たないと大声で泣くから」

「え……？　ま、待つから、待つからやめてね」

ドアの近くに腰を下ろす。そんな僕を椅子に座った楠さんがにやにやと眺める。

「さて、佐藤君のお腹がエマージェンシーモードなわけですが、君がトイレに行けるかどうかは私にかかっています」

「うん……」

「トイレに行きたければ私の言うことを聞きなさい」

「うん」

自分の命の為だからしょうがないよね。

「とりあえず馬を返して。この部屋にあるんでしょ？」

「え、ないよ？　その、さっき部屋を探したときに……その、無かったよね」

「無かったけど。どこかに隠しているんでしょ？」

「隠してないよ。僕本当に知らないんだ」

「……本当かな……。怪しいね」

「ほ、本当だよ……」

「あとで嘘がばれたらひどいことになるからね。馬を隠すメリット

はないよ」

「う、うん。僕、馬持って帰ってないよ」

「……信じましょう」

「あ、ありがとう！　じゃあ、ちょっと……」

「まだ用事は終わってないからその上げた腰を下ろして」

「え、あ、はい」

「とりあえず次は誓約書にサインをしてもらおうかな」

「誓約書？」

カバンに手を突っ込み一枚紙を取り出した。

「これに目を通さずサインして」

「め、目は通させてもらうよ……」

紙を受け取り、手書きの誓約書の内容を確認してみる。

えっと？

その一・あの日見たことを口外しないこと。

その二・私、楠若菜の言うことに逆らわないこと。

その三・人前では自然に接すること。
その四・ってゆーか転校して。

「四つ目は無理だよ！」

「え？　漏らしたいの？　それとも家族からの信用を無くしたいの？」

「どっちも嫌だけど転校するのも嫌だよ……。あの、他の三つは絶対に守るから最後の一つは許してくれないかな……。お願いします……」

「……そんな悲痛な表情で頭下げられたらまるで私が嫌なことしているみたいじゃない。やめてよ」

「ご、ごめんね」

「……」

何故だか分からないけれども楠さんの目に不快の色が映った。

「え、ど、どうしたの？」

「……なんでもない。分かった。じゃあ四つ目は勘弁してあげる。でも消すのが面倒くさいからとりあえずそのままサインしちゃって」

「うん」

ペンをとり紙に名前を書く。さとう、ゆうた……と。

「はい」

「……ありがとう」

受け取る時にも不快の色が見えた。僕、何か悪い事したのかな。
受け取った誓約書を眺め、一度溜息をつく楠さん。僕にはその溜息の理由が分からなかった。

「……お腹の具合はどう、佐藤君」

「うん……あんまりよくない」

ごろごろと警報が鳴っているよ。

「行ってきていいよ」

「あ、うん。じゃあちょっと行かせてもらうね」

やっとスッキリできるね！
僕はちょっと失礼してトイレに行かせてもらった。

十分後か十五分後かはよく分からないけれど、トイレにこもり用を済ませ部屋に戻ってきたとき、楠さんは一枚の手紙を残して部屋からいなくなっていた。

「えっと……」

残された手紙を読んでみる。

「『帰る。おはぎ食べていいから。下剤入りは旗が刺さった一つだけ。おじゃましました。』」

……。

激動の朝だったね。

学校の屋上は聖地

激動の土曜日を終え日曜日は何事もなく過ぎてゆきいつも通りの月曜日がやってきた。

あ、いつも通りじゃなかった……。

僕が教室に入ったら、黒髪ロングの美少女が笑顔で挨拶をしてくれた。

「佐藤君！　おはよう！　今日も一日頑張ろうねっ！」

男子数名と話していた楠さんが僕に向かって手を挙げてくれた。

「あ、お、おはようございます」

「あははは。やだなぁ、なんで敬語なの。クラスメイトなんだから親しくしようよ、ねぇ？　さ　と　う　く　ん？」

「う、うん……」

いつも素敵だと思っていた笑顔が今は裏にある感情を想像してしまって素直に見惚れることができない。残念でなりません。

僕はぎこちない笑顔を作って楠さんをやり過ごし自分の席へ向かった。

席へついて一度辺りを見渡してみた。男子数名が「なんでお前なんかに若菜ちゃんが挨拶してるんだよ死ね」というような目で僕を見ていた。僕は気付かないふりをして文字の世界に飛び込んだ。

しばらくして教室に先生がやってきた。僕は本をカバンの中にしまって姿勢を正した。

「みんなおはよう」

先生の声が静かな教室に響く。

「あー、今日の放課後暇な奴いるか？」

先生が教室を見渡す。でも誰も反応しない。

「……じゃあ、佐藤」

「え、ぼ、僕ですか？」

「佐藤部活してないしな。佐藤しかいないんだ」

この前もそんな理由だったよ……。

「草むしりの人間を一人出さなきゃいけないんだが、佐藤やってくれないか」

「あ、は、はい……」

今日も晩御飯作れないのかな……。

うなだれる僕に関係なく朝のホームルームが続けられる。連絡事項を伝え終えた先生が教室を出て行った。

草むしりか……。この前より早く帰れればいいな。

「佐藤」

「え？　あ、有野さん。おはよう」

金髪セミロング、女子のリーダー有野さん。

「お前嫌なこと押し付けられすぎじゃね？　嫌なら断ればいいじゃねえか」

「え、で、でも、僕にしかできないし……」

「んなもん適当に断っとけば若菜か誰かが買って出てくれるだろ。佐藤何度も嫌な仕事押しつけられてんじゃんか。あいつ絶対お前の事便利な奴だと思ってんぞ。嫌だろ？」

「え、ううん？　その、僕がやればみんな困らないし、全然かまわないよ」

「あんた……優しすぎだろ」

有野さんが僕のほっぺたを軽く抓って引っ張ってきた。

「ご、ゴメンなさいぃ」

「悪くねえのに謝んなよ」

怒った顔をして、うにうにと僕のほっぺたを引っ張たあと自分の席に戻って行った。よかった。殴られるのかと思った。

お昼。

「佐藤君」

お弁当を食べようとカバンをあさっているところに、いい匂いとともに黒い髪が視界に入ってきた。お弁当を持ってその人を見てみる。

う……。楠さんだ……。

「佐藤君？」

「な、何？」

「あはは。そんなに怯えないでよ。クラスメイトでしょ」

「うん……」

確かに何もされていないのに怯えるのは失礼だよね。気をつけなきゃ。

「それで、何か用かな……」

「一緒にご飯食べようかと思って」

「えっ」

と僕が驚くのと同時に教室内がざわめきに包まれた。

当然だよ。僕のようななよなよした人間が楠さんのような凛々しい人間と昼餉をともにするなどと恐れ多いにもほどがあるよ。

さらにそんなことよりも重要なことで、そんなことをしたら男子全員から冷たい目で見られてしまうと思うんだ。

「えっと、その、あの、僕」

「え？　もしかして、私とご飯食べるのが嫌なのかな……」

とても悲しそうな声だった。でも顔は無表情に怒っていた。

楠さんは教室にいるみんなに背を向けているので、みんなは楠さんが怒っているとは思わない。僕が悲しませているように見えているはずだ。その証拠にクラスの大部分から熱い視線をもらっているよ。

「なにか嫌な理由でもあるのかな……」

顔と声が全然合ってません……。怖いですよ……。

「佐藤君が嫌ならいいんだけど……残念だな」

楠さんの後ろからとても重量感のある視線をびしびしもらっているわけだけどそれは僕には耐えられるようなものじゃないんだ。だから楠さんの言うことに従うことにするよ。

「う、うん。ご一緒させていただきます」

「え、いいの？　ありがとう！」

ちなみにまだ無表情です。怖いです。

敵意のこもった視線を体中に感じながら僕は楠さんについて教室を出て屋上へ向かった。

屋上へ着くなり僕の胸ぐらをつかんで顔を近づけてくる楠さん。

「……誰かに言ったでしょ」

「い、言ってません」

「嘘つかないでよ。こんな楽しいこと誰にも話さないわけない。話す友達がいないなら別だけど」

「う……」

あれ……。今日、まだ男子の誰とも話してないや……。親友はいないけど友達くらいいるよって思ってたけど、友達もいないのかな……。

「……もしかして佐藤君、君友達いないの。……ま、しょうがないか」

しょうがないみたいです……。

「よかった君に友達がいなくて」

「うう……」

悲しいです。

「ねぇ、孤独な人生を送っている佐藤君」

「そ、そんな呼び方やめてよ……」

「そう言えば今までずっと一人でご飯食べていたね。よかったね、今日はこの私とお昼一緒できて」

「うん。本当だね」

「……」

イラッとされた。

「ご、ごめん」

「……別に怒ってないから謝らなくてもいい。それで、君、今日はいつも通り過ごすことができた？」

「うん。大丈夫だよ。楠さんのことも誰にも言ってないよ」

「当たり前でしょう。恩着せがましいこと言わないでよ」

そんなつもり無かったのに怒られてしまった。僕の配慮が足りないせいだ。

「じゃあさっさとお昼を食べて佐藤君と別れよう」

早く僕と別れたいみたいだ。急いでご飯を食べよう。

屋上の端に座る楠さんを追って、僕も屋上の端に座った。楠木さんとの距離は人三人分。近すぎたら馴れ馴れしいと思われるし、離れすぎても失礼な気がする。だからこれくらい。

「佐藤君のごはんおいしそうだね」

「え？　あ、ありがとう。楠さんのもおいしそうだね」

「おいしいよ。あげないから」

「う、うん……。あ、そうだ。おはぎありがとう。おいしかったよ」

「あたりまえでしょ。私が作ったんだから」

「え、手作りだったんだ。すごいね！　あんなにおいしいおはぎを作れるなんて羨ましいよ！　どうやって作ったの？」

「興味もないのに作り方聞いたり無理して褒めたりしなくてもいいよ。おいしいのは分かってるし」

「あ、ごめん……。で、でも、全部本当だよ……」

「へぇ。料理もしないくせに作り方が気になるって？」

「あ、ぼ、僕、その、時々、料理とか、するんだ。このお弁当も手作り」

「へえ……。それ結構すごいね。多分自分でご飯作っている男子はこの学校で佐藤君くらいだよ。それは誇っていいと思う」

「そ、そんなこともないんじゃないかな……」

「あっそう。そう思うんならそうなんだろうね」

う、ちょっと不快に思われたみたいだ。ごめんね。

「もしかして佐藤君お母さんがいないの？」

「え？　ううん。両親とも健在だよ」

「ならどうしてご飯なんか作ってるの？　作ってもらえないの？」

「両親とも、共働きだから。できる事は自分でやろうと思って」

「へぇ。それは偉いね」

「そんなこともないんじゃないかな……」

「あっそ」

しまった。また怒らせてしまった。どうやら楠さんは褒め言葉を素直に受け取らない僕にイライラしているみたいだ。気をつけよう。

「あ、そう言えば。佐藤君が言ってた、とある女子高の軽音楽部、私の兄も持ってたから見てみたよ」

「え？　あ、うん。面白かった？」

「面白いかどうかは別として、商売上手だと思った」

「商売上手？」

「私がそれを見ているときに兄が暑苦しく説明してきたんだけど、とある女子高の軽音楽部を制作している郷土アニメーション、だっけ？　そこってエンディングに踊るアニメを手掛けたらしいね」

「うん。春宮スズヒの爽快だね」

「それそれ。キャラクターソングとかもたくさん出して、アニメか

ら作られる副産物で結構稼いでいるみたいだね」

「へぇー。そうなんだね」

「そうらしいね。それで、その時に副産物で稼げると分かった郷土アニメーション。だから今度はその副産物自体を物語に組み込んだというわけだよ。たくさんＣＤ出しているんでしょ？」

「う、うん」

「あーあ。つまり君はまんまと騙されているんだよ。郷土アニメーションが副産物を作るのに適した漫画を見つけて、それをアニメにして、歌を作って、君が買う。完璧にやられているね」

「そ、そうなのかな……」

「そうなの。あれは企業の策略の元に作られたものなんだよ。どう？　面白いと思っていたアニメにこんな裏があると分かった気分は。残念？」

「え？　う、ううん……。別に、そんなことも……」

いきいきと話していた楠さんが、途端に不機嫌そうな顔を作った。

「……なんで」

「え、だ、だって、面白いのは本当だし……。そもそも、面白いものじゃなきゃ、誰もＣＤとか買わないんじゃないかな」

「……まんまと騙されやがって、って思われていてもいいの？

嫌じゃないの？」

「うん……。面白いから、買ったんだもん」

「……なにそれ。がっかり」

「え、え？」

「君をがっかりさせるためにわざわざ聞きたくもない話を兄から聞いたのに、何それ。佐藤君面白くない」

「え……。ごめんね……」

「……」

う。謝ったらさらに楠さんの怒りゲージが溜まったみたいだ。よく分からないけれどもう謝るのはやめよう。

「話は変わるけど」

「あ、うん」

「ずっと疑問に思っているんだけど、なんで電車の中で電話しちゃいけないのかな」

「え？　それは、他の人に迷惑がかかるからじゃないのかな……」

「迷惑って、話すことが迷惑なら会話自体を禁止すべきでしょ」

「あ、僕聞いたことがあるよ。誰かが電話をしているとき、他の人

はその電話の向こうの相手の声が聞こえないからそれを想像してしまって、そのせいでストレスを感じてしまうんだって」

「それは私も知ってる。偉そうに言わないでよ」

「あ、ごめん……」

「……。で、そのことなんだけど、そんなの禁止にする理由にならないと思うんだよね。その程度のことを迷惑と言うんだったらさ、そんなものよりももっと迷惑なことだってあるんだから、そっちを禁止にしてよ。でもそれらを一々禁止していったら人間はまともな生活できなくなっちゃうんだけどね。例えば、お風呂に入らない人は臭いがきついので人のいるところに行かないでくださいとか、挙動不審な人は目障りなので人目につかないように歩いてくださいとか。そんなルールがあったら困るでしょ？　携帯電話なんかよりも、臭いのきつい人の方が迷惑でしょ？　だからと言ってそれを禁止にはしないでしょ？　だったら、なんで携帯電話は禁止にするの」

「うん……」

そうなのかな……？

「なに？　言いたいことがあるなら言ってよ。心を隠さないって約束でしょう」

「あ、うん。その、大勢の他人と空間を共有する電車の中だから、えっと、逃げ場がないというか、自分ではどうすることもできないというか……。お風呂に入らない人がいるのなら近づかなければいいし、動きが気になる人を見かけて嫌だなと思ったのなら目をそらせばいいし……。でも電車の中で電話をされたら防ぎようがないと

いうか……」

「じゃあ電車の中に臭い人がいたらどうするの」

「う。……移動する」

「なら電話も移動すればいい」

「……そうだね……」

「臭い人は電車に乗っちゃいけない？　ワキガのお客様は乗車ご遠慮願いますとでもいうの？」

「……そんなこと、言えないね……」

「でしょう。それに比べて電話なんて軽いものだよ。だから、不快にならないように、聞こえないくらいの小声で話してくださいってことにすればいいんじゃないの？」

「えっと……それは、どうなのかな……よく分からないけど……」

「『車内での通話は他のお客様の迷惑になりますので電源を切るかマナーモードにしてください』って言うけど、小声で話すなら別にかまわないんじゃないの？」

「えっと……、あ、そうだ。ペースメーカーとか、そういう大切な機械に影響が出ちゃうんじゃないかな」

「ならその人は街を歩くだけで死ぬよ。電波で溢れているんだから」

「あ、そ、そうかも……」

「つまり、電車内で携帯を使ってはいけない理由はよく分からないのにみんなマナーだマナーだ言ってるんでしょ。おかしいよそれ」

「そう、なのかな……」

「そもそも会話の一方だけが聞こえてくることが不快だなんていうけど、盗み聞きするのもよくないと思うし、その会話を理解しようとするのも意味が分からない。聞き流せないの？」

「……ごめんなさい」

「謝らないでよムカつくから。で、他の国がどうだからっていうわけじゃないけれど、参考までに、禁止しているのは日本くらいなんだよ？」

「え、そうなの？」

「そうなの。変だね」

「うん。それは、ちょっと変」

「流されやすい日本人が、なんでこんなところで独自のルールを作っちゃってるんだろうね」

「不思議だね」

深く考えたことないや。すごいなぁ、楠さんは。

「さて」

楠さんが立ち上がった。

「ご飯も食べ終わったし、私はもう行くから」

「え、あ」

いつの間に。僕のお弁当箱の中にはまだたくさんご飯が残っていた。話に夢中で箸が止まっていたみたいだ。

「ごゆっくり」

さっさと屋上を出て行った。

少しの間だけでも、楠さんとご飯を一緒できたのは嬉しいことだね。

青空の元、僕は一人笑顔でお弁当を食べた。

金髪なだけで怖い

放課後になった。帰りのホームルームが終われば草むしりだ。早く終わらせよう。

「席につけー」

いつも通りにホームルームが始まり、いつも通りに進む。

「えーっと、じゃあ、佐藤。この後草むしり忘れるなよ」

「あ、はい」

「誰か暇な奴がいたら手伝ってもいいからな」

暇な人がいないから僕になったんじゃないのかな……。

「はい。私が手伝います」

誰かの、綺麗で、嘘みたいに透き通った、とても聞き取りやすく、すぐに耳になじむ声が教室を震わせた。

その人は、背筋をぴんと伸ばした姿勢で椅子に座り、傷一つないどころか汚れ一つない真っ白な手を挙げていた。座って手を挙げているだけで他の生徒とは違う空気を醸し出せるその人は、当然、

「……いいのか？　楠。服が汚れるから男子に頼もうと思っていたんだが」

「はい。服が汚れる事なんて誰も気にしませんよ？　そんなことよ

りも、佐藤君一人に仕事をさせる方が気になります」

「おお、さすが楠だな。お礼を言っておけよ、佐藤」

「は、はい」

「じゃあ、よろしく頼んだぞ」

帰りの挨拶後、僕はすぐに楠さんに駆け寄った。

「楠さん……」

「ん？　なに？　佐藤君」

「あの、ありがとう。手伝ってくれて」

「別にいいよー。一人でやるより二人でやった方が早く終わるからねっ！」

「う、うん」

やっぱり、楠さんは一般人のレベルを軽く超越した可愛さだなぁ……。

見惚れていた僕だったけれど、誰かに突き飛ばされて正気に戻った。

「若菜ちゃん、俺も一緒にやるよ！」

僕を突き飛ばしたのはバスケ部の小嶋君だった。このクラスの男子リーダーの沼田君に続く、ナンバー2の人だと思う。

「え、そんなわるいよ。小嶋君部活があるでしょ？」

「ちょっとくらい遅れたって大丈夫だって！　すぐ終わるすぐ終わる！」

「……なら、お願いしちゃおうかな」

「任せろ！」

楠さんが立ち上がり、小嶋君と二人で楽しそうに笑いあいながら教室を出て行った。僕はと言えば突き飛ばされたことに驚き少し呆けて動けなくなってしまっていた。

尻餅をついたまま、ぼうっとしている情けない僕を、誰かが後ろから引き起こしてくれた。

「何してんだよお前」

黒髪美少女の楠さんと女子のトップを争っている金髪美少女の有野さんだった。

有野さんが怒ったような顔で僕を見ている。手間をかけさせてしまって、申し訳ないよ……。

「あ、ありがとう。ごめんね」

「何も悪くねえだろ。小嶋の奴、最悪だな」

「え？　どうして？」

「はぁ？　どうしてって、お前……。……まあ、佐藤が気にしてな

いのならいいや。……にしても、あの担任、うぜぇな」

「え？　ど、どうして……？」

同じ言葉を繰り返しちゃった……。怒られるかもしれない……。

「何が若菜にお礼いっておけよだ。別に佐藤が自分で作った仕事じゃねえんだから佐藤が若菜に礼を言うことじゃねえだろ」

「でも、僕が頼まれた仕事だし、一人でやらなきゃいけないことだし……、手伝ってくれるのならお礼を言わなくちゃ……」

「だぁかぁらぁ、礼を言うのは担任だろ。あいつが押し付けた仕事なんだからよ」

「そ、そう、かな……。で、でも……」

「んな顔すんなよ。別にお前にキレてるわけじゃねぇから」

そう言って、優しい笑顔を見せてくれた。

「あ、ごめんね」

「怒ってねえから謝んなっての。じゃあ、頑張れよ」

ぺちぺちと、頬を二度叩かれ教室から送り出された。

有野さんも優しいなぁ。女子が魅かれる理由がよく分かるよ。でも楠さんとはあまり仲が良くないんだよね……。悲しいことだね……。

僕ははっきりと好き嫌い言う所は好きなんだけどな。裏表のない

性格っていうのかな。凄いことだと思う。
……でも、僕は嫌われているんだよね……。悲しいね。でも、しょうがないね。
僕は少し暗い気持ちになりながら、草むしりをすべき場所へ向かった。

二人に遅れて指定された場所、校舎裏についたとき、先に向かっていた二人は既に草むしりを始めていた。

「佐藤！　お前おせえよ！　お前の仕事なんだからお前が一番働けや！」

「あ、ご、ゴメン……」

「まあまあ小嶋君。別に佐藤君は悪くないでしょ」

「ええー？　でも手伝ってやる俺たちが先に仕事を始めるってなんかおかしくね？」

「はいはい。いいから手を動かして」

「うぃーっす。おい、佐藤。お前もさっさと仕事しろよ。お前はあっちやってこい」

「う、うん。ごめんね」

「でさぁ、若菜ちゃん――」

小嶋君はもうすでに楠さんとの会話に集中していた。

あ、早く始めなきゃまた小嶋君に怒られちゃう。早く草むしりをしよう。

先生の話によれば各クラスから草むしり要因が出されていて、それぞれ草をむしる区域が違うみたい。僕たちの担当の校舎裏は結構広いから二人が手伝ってくれて助かったよ。

地面の上に用意されていたゴミ袋を持つ。道具はこれだけかなと思い、楠さんと小嶋君の方を見てみた。二人は軍手と熊手装備していた。どうやら道具は二人が使っているみたいだ。仕方がないから素手でやろう。

僕は小嶋君に言われた場所、二人の姿が見えなくなるところで草むしりを開始した。でもここ、指定された場所から少し離れている気がするなぁ……。でもいっか。綺麗になるんだから間違えていても問題ないよね。

……。

……。

……。

三十分くらい草をむしった。まあまあ綺麗になったと思う。あと少しだ。

「おい、佐藤」

「え？」

振り向いてみると、小嶋君が僕を見下ろしていた。

「どうしたの？」

「どうしたのじゃねえだろ。お前さぁ、俺達は手伝ってやってんだからよ、気ぃ利かせて飲み物の一つでも買ってこいや」

「あ、ご、ごめんね」

本当だ。せっかく手伝ってもらっているのに何の差し入れも持って行かないなんてありえないね。

「なにか飲み物買ってくるよ。何がいいかな」

「なんでもいいからとっとと買って来いよ！」

「あ、う……。ご、ごめん」

怒らせちゃった……。

怒られたくない僕は慌てて自動販売機へ飲み物を買いに行った。

あ、でもこんな汚い手じゃあ飲み物持てないや。まずは手を洗おう。

自動販売機へ向かう途中にある手洗い場で泥を落とし、急いで自動販売機へ。ここから一番近い自動販売機は食堂かな？

校舎に入って食堂へ向かう。

食堂の入り口付近に備え付けられた自動販売機。ラインナップを眺めてみる。

「……うーん。何がいいんだろう……」

二人の好み分からないや。でも、こう言うときって何となくポリカスエットな気がするね。うん。そうしよう。

二百四十円入れてポリカを二本買う。それを持って急いで二人のところへ戻った。

「お、お待たせ……」

走ってたどり着いた校舎裏。

「……あれ？」

二人の姿は無かった。

きょろきょろとあたりを見渡してみる。

軍手と熊手が二セットずつあったけれど、それを使っていた人たちは見当たらない。何か用事でもできたのかな？

仕方がないので、とりあえず帰ってきたのがすぐわかるように、先ほどまで二人が担当していたところの草をむしりながら待つことにした。

十分後。

誰も来ない……。おかしいなぁ。帰っちゃったのかなぁ。

不安になり、飲み物を両手に持って立ち上がる。

でも、探しに行って入れ違いになっても嫌なので結局身動きができないままきょろきょろと見渡すだけしかできない。

ど、どうしよう……。

不安がピークを迎えようとするところ、念願の土を踏みしめる音

が聞こえてきた。

「小嶋君？」

校舎の角から足音が聞こえてきたので音の方へと駆け寄った。

しかし、角から出てきたのは小嶋君でも楠さんでもなかった。

「あ、せ、先生」

「どうだ？　進んでるか？」

「あ、はい」

僕は小嶋君に言われて草をむしっていた場所に先生を案内した。

小嶋君と楠さんが草むしりをしていたところは僕の手柄じゃないからね。

「あと少しです」

「……」

先生は僕の成果を見て苦い顔をした。

「え、えっと……」

なんでだろう。

「おいおい。ここは指定した場所じゃないだろ。ここはしなくていいから道具が置いてあったところを掃除してくれよ」

「え、あ、はい……。そ、そうですよね」

「……はぁ。まったく。お前はまともに草むしりもできんのか。ほら、日が暮れる。早く終わらせろよ」

「はい……」

そう言って、先生は足早に去って行った。ううん……。そりゃそうだよね。掃除してほしいところがまだ汚いんだからいいわけないよね……。

二人が担当していたところに座って草むしりを再開する。でも、このポリカどうしよう。ぬるくなっちゃうよ……。

辺りを見渡しながら素手でむしっていく。道具を使おうかとも思ったけれど、二人が帰ってきたときに僕が使っていたら嫌な気分になるかもしれないから素手で作業を進めた。

……。

……。

しばらくして、また足音が聞こえてきた。

こ、今度こそ。

僕はポリカを持って立ち上がった。そして、足音を迎える。

けれども、その足音はまたしても違う人の物だった。

「あれ。有野さん？」

綺麗に染め上げた金色の髪。薄汚い校舎裏では浮いて見えるけれど、どうしようもないくらい有野さんに似合っているのでそんな違和感帳消しだ。

大きな瞳で僕を睨み付ける。眼光が鋭いというのはこういうことを言うのだろうか。でもそう言う人って何となく目がつり上がっている気がするけど、有野さんの目は可愛く垂れ下がっている。ほにゃんとした目だ。

どうなんだろう。

有野さんのような可愛い眼の人でも眼光鋭いって使うのかな？使わないのかな。よく分からないや。

まあ、とにかく、眼光鋭いという言葉がぴったりの目で僕を睨み付けていた。……女の子に向かって眼光鋭いっていうのはいけないことなんじゃないかな……。で、でも、怖い……。

「ど、ど、どうしたの？　楠さんに何か用事？」

有野さんは僕の言葉には答えず一度辺りを見渡し大きな舌打ちをした。

「……佐藤一人かよ……」

「あ、ご、ごめん……。楠さんだよね？」

「……あいつらどこ行ったんだよ」

ずんずんと近づいてくる有野さん。

「え、うん。多分、何か用事があるんだと思うよ。きっとすぐに帰ってくるよ。あ、探してこようか？」

僕の言葉を聞いてまた大きく舌を打った。

「え、どうしたの……？」

怒っているようで怖いけれど、恐る恐る聞いてみる。

「あいつらは帰って来ねえよ」

「え？　どうして？」

「小嶋は部活、若菜はさっき校門から出て行くのを見た。あいつら仕事放りだして帰ったんだよ」

「え……」

じゃあ、この飲み物が渡せないよ……。どうしよう、渡しに行こうかな。

「あいつら……！　佐藤に仕事押しつけて帰りやがって……ふざけてんのか……？！」

憎々しげな表情で奥歯をぎりりと鳴らす有野さん。

「う。お、落ち着いて有野さん」

「……お前は、あいつらが勝手に帰ったことムカつかねえのかよ」

「え？　う、うん、別に……。もともと僕が一人でやる仕事だったし、少しでも手伝ってもらえたんだから感謝しなくちゃ」

少し表情を緩ませた有野さん。よかった。

「……ったく、お前は……。昔から変わんねえな……」

「え？　う、うん？　そうかな……」

「……。……ん？　その飲み物は」

「あ、えっと、その、喉が渇いたから、飲もうと思って……」

「二本もか？」

「うん。それくらい喉が渇いてたから……」

……二本、飲もう。

有野さんは僕の手に握られた二本の缶を見て一瞬悲しそうな顔を見せた。

「……そうかよ」

そう言ったのとほぼ同時に有野さんが僕の手からポリカスエットを奪い取った。

「あ」

と思ったときにはもうすでにプルタブを開けごくごくと飲まれていた。

「あー、うまい。ちょうど喉が渇いてたんだ」

よかった。これで無駄にならずに済んだね。

「あん？　なんか文句あんのか？」

「あ、う、ううん。全然ないよ」

「そうかよ」

そう言って、また飲みだした。

「……ふぅ。佐藤も喉が渇いてるなら飲めばいいじゃねえか」

「え？　あ、うん」

……二人とも帰っちゃったのなら、飲んでもいいよね。
僕もポリカを飲むことにした。
うん。おいしいや。アクリエアスよりも甘いよね。

「って、何だこれ！　缶が泥だらけじゃねえか！」

汗の掻いた缶は僕の手についていた泥で茶色く汚れていた。その泥が有野さんの可愛い手を汚してしまっていた。

「あっ、あ！　ご、ごめん！　そう言えばさっきまで草むしりしてたんだった！　ごめんね！」

「お前なんで軍手使わねえんだよ！　そこに用意されてるじゃねえか！」

「え、あ、うん。その、うっかりしてて……！」

「うっかりって、お前よく見たら爪の間土だらけじゃねえかよ。んな状態ならすぐ気付く……、……ちっ。そうか」

軍手を睨み付けてまた舌打ちをする有野さん。そして小声で何かをしゃべっていた。

「……初めから私が手伝っとけばよかったぜ……」

「え？　ご、ごめん、聞き取れなかったんだけど……」

「あん？　何も言ってねえよ。そんなことより、ポリカの礼だ。私も手伝ってやる」

「え、そんな、お礼なんていいよ別に」

「うっせえな。それじゃあ私の気が治まらないんだよ。いいからさっさとするぞ。今からちゃんと軍手つけてやれよ。道具もちゃんと使えよ」

「あ、うん。……ごめんね」

「悪くねえんだから謝るなって」

僕の顔に泥がついていたのか、何かを拭うようなしぐさで僕の顔を撫でてくれた。

「んじゃ、さっさと終わらせようぜ」

そう言って、かっこいい笑顔を僕なんかに向けてくれた。

「ありがとう」

――やっぱり、優しいな。

有野さんに手伝ってもらった草むしりはすぐに終わった。有野さんの豪快なむしり芸は惚れ惚れするような技だった。見習いたいね。

「ふー……」

軍手を地面に放り投げて立ち上がり腰をトントンとたたく有野さん。

「ありがとう。おかげで早く終わったよ」

「別に。飲み物の礼だし」

「あ、もう一本買ってくるよ」

あれだけじゃあ足りないはず。早く買ってこなきゃ。

立ち上がって駆け出そうとした。けれど、有野さんが引き止めてきた。

「いらねえよ」

「え、そう？　喉かわいてない？」

「全然かわいてねえよ」

と言いながら汗をぬぐった。やっぱり、何か飲んだ方がいいと思うんだけどなぁ……。
行こうかどうか迷っていると、有野さんが空を見上げ僕に話しかけてきた。

「佐藤とこれだけ話したのも久しぶりだな」

「うん」

何となく僕も向こうの空に目を向けた。
夏の手前の入道雲。
もうすぐ、あの頃のように暑くなる。

「……。あの、さ」

「うん？」

僕は有野さんに視線を戻した。有野さんはまだ空を見上げたままだった

「……。……あー、なんでもねえわ。んで、草むしり終わったけど、どうする」

急に怖い顔を作って僕を睨み付ける有野さん。

「ど、どうするって、何のこと？」

怒られるのかな？

「あいつら二人。しめるなら手伝うけど」

とんでもないことを言いだした！

「そ、そんなことしないよ。誰も悪くないんだから」

「納得できんのか？　あいつらお前を馬鹿にしてんだぞ？」

「そんな。違うよ。二人とも草むしりより大切な用事があったんだよきっと。なら、しょうがないよね」

「それでも一言声かけて行くのが礼儀ってもんだろうが」

「う、うん……。でも、僕がちょっと姿を消していたから、言えなかったんだよ。だから、その、しょうがないのかなぁ、とか……思ったり」

ど、どうしよう。ここで有野さんを納得させなければ明日二人の命が危ない……。僕の手にかかってるんだ……！

なんて気負っていたが、

「あーそんな顔すんなって。分かったから。誰も悪くねえな。うん」

すぐに有野さんが笑いかけてくれた。

「あ、ありがとう」

ふぅ、よかった。

「礼言われるようなことしてねえよ」

楽しそうに笑った。
僕も笑った。
何となく、昔を思い出した。
でもそれも先生の登場ですぐに終了する。

「終わったか」

「あ、はい。終わりました」

「ん？　有野手伝ってやったのか」

「そうだよ」

「珍しいこともあるんだな」

それはちょっと失礼だと思う。けど、僕にはそれを咎める度胸がなかった。
情けない。
有野さんは優しいのに、手伝ってくれたのに。失礼なことを言う先生に、僕はそれを訂正させることができない。
情けない。
先生が辺りを見渡す。

「へぇ、綺麗になったな。よし、ごくろうさん。あとはこのゴミを焼却炉に持って行ってくれ。そうしたら帰っていいからな」

「はい」

先生が来た道を引き返して行った。

よかった。やっと帰れるよ。何事もなく終わったなぁ……。と、思ったのだけれども、有野さんとしては何事もなく終わらせたくないみたいだ。

「おい、お前ちょっと待てよ」

う?!　先生相手にお前って！

もしかして、手伝うのが珍しいって言われたのが気に障ったのかな……。

「……お前って言うのは、俺の事か？　先生相手にお前なんて言ったのか？」

「それ以外に何があんだよ」

とても怒った顔で振り返る先生。

「……有野。もう一度聞く。お前、俺に向かってお前って言ったのか？」

「耳わりぃのか？」

う、うわあああああ！　危ないよ！　何か空気が危ないよ！

「あ、有野さん……」

有野さんの制服を軽く引っ張った。

「なんだよ」

怒り一色の顔で僕を振り返る有野さん。う、怖い……。

「そ、その、気に入らないことが会ったのかもしれないけれど、穏便に、穏便に、いこ？」

僕の情けない言葉に困った顔を見せる有野さん。

「……お前、それでいいのかよ」

「え、え？　な、どういうこと……？」

「……あーいや、いいわ」

本当に分からない……。僕のせいで怒ったのかな……。

「そんな悲しそうな顔すんなよ。別にお前には怒ってねえんだからさ」

「え、あ、うん」

先ほどの表情からは考えられない素敵な笑顔。そんな笑顔見せられたらドキッとしちゃうよ。

……でも先生はご立腹していらっしゃる。恐ろしい表情で僕らを睨み付けていた。

「おい、有野。お前、教師に向かってその口のきき方はなんだ」

な、何とかしなきゃ怖いよ！

「ち、違います先生！　今、有野さんは僕に向かって言ったんです

！」

「お前には聞いてない。有野に聞いてるんだ」

「う、ごめんなさい……」

そうですよね……。

「有野、お前、教師に対しての言葉遣いじゃないよな」

「はぁ？　佐藤の事呼んだんだんだけど」

「……。……それでも、お前の口調は教師に対する言葉遣いじゃないだろう？」

「あーはいはい。すみませんでした。どうぞお帰りください」

先生の、とても疑いのこもった視線。

「……まあいい。早く帰れよ」

「は、はい……」

よかった……。何事もなく済んだね……。

先生の背中を見送り、完全に視界から消えたところで有野さんが僕に困ったような顔を見せて言った。ううん、言ってくれた。

「お前さ、ガツンと言わないからあいつに舐められるんだぜ？　ブッ飛ばすつもりで何か言ってやれよ。そうしなきゃまた嫌なこと押し付けられるぞ」

「え、そ、その……」

「見ただろ？　あいつの舐めきった態度。『ごくろうさま』だけだぜ。舐めんなって話だろ。佐藤はあいつの奴隷じゃねえんだ。もっと佐藤に感謝しろよな……！」

徐々に顔が修羅の者になっていった。怖いよ……。

……女の子の怒った顔を見て怖いなんて思う僕はとても失礼な人間ではないだろうか……。

「あいつ、絶対に佐藤の事見下してるぜ。ふざけてるよな」

「で、でも……」

「お前、今度からはあいつの頼みごと断れよ。別に佐藤じゃなきゃいけねえ理由はないんだ。メリットだってないんだし、言うこと聞く必要ねえだろ」

「でも」

「でもでもうるせえな。なんだ？　あいつの言うこと聞いていいことあるのか？　ねえだろ？」

「う、ううん。誰もできないから僕が指名されているわけだし、僕がやらなかったら違う人が困るし……。その、だから、僕でいいというか……」

「誰かが困る位なら自分が困るって？」

「まぁ、うん、そんな感じ、かな？」

大きな大きなため息をつく有野さん。

「お前は……。本当にどうしようもねえな」

「う、ごめん」

「褒めてんだよ」

え、分からなかった。

有野さんがにっこりと笑った。

「まあお前がいいならそれでいいや。でも困ったら私に言えよ。助けてやる」

「あ、うん。ありがとう」

「きにすんな。んじゃ、さっさとそれ焼却炉にぶち込んで帰ろうぜ」

「あ、う、うん。ありがとう。本当にありがとう」

「そんな大げさなお礼いらねえよ」

気持ちのいい笑いを見せてくれた。

今日の仕事は、いつもと違ってとっても楽しかった。

虫よけスプレーの信頼度

「佐藤君」

僕は、草むしりを終えたあと、教室へカバンを取りに行き、「今何時かな？」と携帯を開き、ついでに未読メールを見たと思ったら、いつの間にか秘密基地の前で正座をしていた。ここまでの道のりを覚えていない……。

まだ日が沈むには時間があるけれど森の中は薄暗い。涼しい位だよ。

でもそれどころじゃありません……。

「舐められたものだね。まさかこんな仕打ちを受けるなんて……」

「そ、その……」

メールの差出人は楠さんだった。『今すぐ君の秘密基地へ来ること。遅刻厳禁』という内容のメールが一時間ほど前に僕の携帯に入っていた。草むしり中携帯は教室のカバンの中だったので当然気付かなかった。僕は慌てて秘密基地へ向かい、今に至る。

「しかも、これだけ待たせるなんて。一時間私はここで待ちました。一時間蚊に刺されるためにこの林の中で突っ立っていました。これはあれだね。君の愚行をばらすしかないね」

「え？！　ご、ごめんなさい！　そ、それだけは許してください！」

僕は潔く土下座をした。だって、楠さんが蚊に刺されたなんて重大事件じゃないか！　時代が時代なら僕は打ち首だよ！

「みっともないね」

楠さんの声と同時にカメラのシャッター音が聞こえた。でも、これは仕方がないよ……。

「顔を上げて。早く」

「はい……」

顔を上げ、楠さんを見上げてみる。依然として、無表情で怒っている。

「で？　言い訳は？」

遅れた言い訳かな……。

「あの、僕、」

「くだらない言い訳だったら問答無用でばらすから。君がそう言うふざけた態度を取るのなら、話し合いも何もしない。謝っても許さない。君のしたことをみんなにばらして、学校にいられなくしてやるから」

ううう……。僕のしたことって、僕何もしてないよ……。

「さあ、納得のできる遅刻の言い訳を是非。よく考えてね。これで君の人生が終わるかもしれないんだから。面白かったら許さないことも無いよ」

「お、面白い、言い訳……」

「まあでも君面白くない人間みたいだし、ギャグに逃げるのはやめておいた方がいいと思うよ。ちゃんと私が納得できる言い訳をするんだね」

「う、うん」

でも、言い訳って……。

「その、草むしりに手間取って……」

「はぁあああ？」

どうやらこの言い訳は楠さん的に気に入らないみたいだ！

大変だ大変だ！　楠さんの顔が大変だ！　どう大変って……表現したくないくらい歪んでいるよ！

その、色々な意味で怖い顔をグイッと近づけ言う。

「君、先に帰ったでしょ？」

……。

「え？」

「君、私たちに仕事押しつけて先に帰ったでしょう？」

「え、え、え？」

「えーえーうるさいね。それ以外に言う言葉がないの？　よし、ば

らそう」

僕から顔を離し携帯電話を操作しだした楠さん。

「あ、ちょ、ちょっと待って！」

僕は正座をしたまま両手を突き出して待ったをかけた。

「なに？　遺言？　まあ聞いてあげないことも無いよ。友達に電話がつながるまでの数コールだけ時間をあげる」

短っ！

「その、僕飲み物を買いに行ってたの！　多分それで校舎裏にいなかったんだと思う！」

「……あ、丸山さん？　その、ね……少し、話があるんだ……」

電話が繋がっていらっしゃる！　死んじゃうよ！

「ごめんなさいごめんなさい！」

両手をバタバタ振って何とか通話を辞めてもらおうとした、けど……、

「え？　ううん？　違う違う。ただの鶏じゃないのかな？　うん、チキン野郎」

楠さんが左手で僕の頬を挟み込みうるさいと睨み付けてくる。でも僕にとってもそれどころじゃないよ！　腰を浮かせたままパタパ

タと手を振って必死に校舎裏にいなかった理由を言う。

「ほ、本当に許してください！　小嶋君に言われるまで気付かなかった、気を利かせて早く飲み物を買いに行かなかった僕が悪いんですけど、タイミングが悪かっただけなんですー！　もう少し早く気づければこんなことにならなかったんだよね！　ごめんねごめんね！　今度からはまずお礼を買ってから仕事を始めます！　だから許してください！」

一瞬沈黙した後、楠さんが手を離し僕を地面に落とす。そして僕をいぶかしげな表情で見つめてきた。

「……。え？　あ、ごめんね。話っていうのはおすすめの喫茶店とかないかなってね。ほら、丸山さんの行くお店ってとってもセンスがいいでしょ？　だから、どこかいいところ教えてもらおうかなーって思って！　うん、うん。あ、あそこかー！　うん、分かった。うん、うん。ありがとう！　じゃあ、また明日！」

よ、よかった。助かったみたいだ……。

通話を切り、楠さんがしゃがんで僕と視線を合わす。

「……小嶋君と話したの？」

「う、うん。その、小嶋君にマナーのことを指摘されて、なるほどと思って慌てて飲み物を買いに行ったんだけど、その、タイミングが悪かったみたいで、その、帰ったと思わせちゃったね……」

「……私は小嶋君から君が帰ったって聞いたんだけど。小嶋君が様子を見に行ったときにはもう帰った後だったって」

「え、え？　僕、帰ってないよ？　今まで草むしりしてたよ？」

「……。……ちょっとタンマ」

そう言って立ち上がり僕から少し離れた。いったい何事だろう？　ぼけっと眺めていると、楠さんがカバンの中に手を突っ込みタオルを取り出し始めた。

汗でも拭くのかな？　と思ったけれど違うようだ。グローブのように手にタオルを巻き、一本の木に近づいて行った。

？

……！？　え、え？　え？　な、何してるの？！

僕は驚きで全身の力が抜けてしまっていた！

「……！　……！　……！」

何かをつぶやきながら、思いっきり木を殴りつけだした！　手が痛いよ！　僕の手は痛くないけど！　楠さんの手が痛いよ！　せっかくの綺麗な手に傷がついちゃうよ！

つぶやきが、少しだけ聞こえてくる。

「あいつ……！　嘘ついて……！　これじゃあ、私が、さぼった、みたいじゃない！」

う、ううう……。一体何のことだかわからないけれど、とても怒っているみたいだよ……。あの木には、もしかしたら僕が重なって見えているのかもしれない……。ううう、ごめんね……。何に怒っているのか分からないけれど……。

「……。ふぅ……」

拳を木にめり込ませたまま、大きく息を吐いた。すぐに全身から力を抜き、腕をだらんとたらす。もう一度息をはいたあと手からタオルを取って綺麗に畳み、カバンにしまった。そして、無表情の顔を僕に向けてくる。

本当に失礼だと思うけれど、僕はびくっと畏縮してしまった。ずんずん近づいてきて、へたり込んでいる僕に頭を下げた。

「……今回は、完璧に私が悪い。ごめんね佐藤君。疑っちゃった」

「え、え？」

何のことを謝っているのだろう……。

「ズボンが汚れるから正座やめて」

「あ、うん」

立ち上がりズボンを払う僕。

「ごめんね一人置いて帰っちゃって」

「う、うん……」

謝るようなことなのかな……？

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……？」

な、何だろう。なんで僕はじっと見つめられているんだろう。何か僕の言葉を待っているような……。ぼ、僕は何を言えばいいだろう……。

「そ、その……」

分からないけど、とりあえず。

「ご、ごめんね……？」

謝っておこう。

「……なんで謝るの。私が悪いって言ってるのに」

「う、い、いや……その、何言えばいいのか分からなくって……」

「叱責すればいいでしょう。気のすむまで言葉責めすればいいよ。好きなだけ責めて興奮すればいいよ気持ち悪い。どんな言葉で罵るんだろうね。楽しみだよ。それも録音するけど」

「そ、そんなことしないよ！　なんで僕がそんなことするの？！」

「私が佐藤君を呼び出して土下座までさせてでもそれは私の勘違い

だったんだから君が怒っても仕方がないでしょう」

「よく、分からないけど……。でも勘違いは誰にでもあるし、そんなのを怒っていたら過ごしにくい世の中になっちゃうよ」

勘違いは怒っちゃだめだと思うよ。

「……。何なの君？　それで私に恩を売っているつもり？　気分悪いよ」

「そ、そんなつもりじゃあ……」

うわ、怒らせてしまった……。

「ずっと気になっていたんだけどさ、佐藤君、悪くないのにとりあえず謝るよね。結構不快だよそれ。自分が謝っておけば済むだろうって思ってるの？　私が悪いのになんで謝られなきゃいけないの？　おかしくない？」

「お、おかしいです……」

「だから謝って」

「え！」

なんだかおかしくないかな？！

「とりあえず謝ってよ」

「ご、ごめんなさい……？」

少し理不尽さを感じながらも一応謝ってみた。

「……まあいいや。今日はごめんね。言い訳のしようがないよ」

「う、ううん。その、こちらこそ、手伝ってくれてありがとう」

「……嫌味？」

「う、ううん！　そんなつもりはないよ！」

「……。じゃあ今日のことは本当に申し訳なかったということで、お詫びに佐藤君が部屋で服を脱いで私を襲おうとしている写真を消しておいてあげる」

「あ、ありがとう！」

「どういたしまして。別にお礼を言われるようなことではないけど」

まあ、確かに僕はそんなことしていないのだからね。

「じゃあ、私は帰るね。ごゆっくり」

「あ、ばいばい」

楠さんが山を下りて行った。

放課後ごたごたしたけど、よかったー。色々と解決したみたいだね。これで何のわだかまりもなく明日を過ごせるね！

僕は意気揚々と家に帰った。

悪いのは全部男

何事もなく過ごせるね！　なんて思っていた昨日の僕。それは間違いみたいだよ。
僕が朝学校にたどり着いたときそこはすでに修羅場だった。

「…………」

「…………」

有野さんが楠さんを睨み付け、楠さんがシュンとうなだれていた。教室内はその風景に飲まれて誰も言葉を発せなくなっていた。
な、何事ですか……？　この不穏な空気を作り出していらっしゃるお二人を見るにどうも昨日のことが関係しているような気がしないでもないよ……。

「若菜お前なんで昨日佐藤を置いて帰ったんだよ」

「ごめんなさい……」

「理由を聞いてんだよ。謝るのはそれからにしろよ」

う、うわあああ！　有野さんが楠さんを怒ってるよおおおおおおおおおおおおお！　有野さんに説明しておけばよかったああああああああああああああああああああああああああああああああ！

「大切な用事があったのかなんか知らねえけど、なら初めから手伝

うとかいうなよ！」

「うう……ごめんなさい……」

あの楠さんをこんなにも落ち込ませることができるのは多分有野さんだけだと思う。って、そんなことより！

「あ、あ、有野さん……」

僕は二人に駆け寄った。というか有野さんに駆け寄った。

有野さんが僕に気づき、申し訳なさそうな顔で言った。

「……佐藤。お前は別に怒ってねえみたいだったけど、やっぱり私は納得できねえみたいだわ」

「……」

楠さんが本当に悲しそうな顔で有野さんを見上げた。

「本当にごめんなさい……。全面的に私が悪いです……」

それを睨みで返す有野さん。

「私に謝るんじゃなくて佐藤に謝れよ」

あ……。僕の為に怒ってくれているんだ……。優しい人だなぁ。

……で、でも……、僕、すでに謝罪してもらっているからね……。

説明しなきゃ。

「あ、有野さん、その、僕昨日謝ってもらったんだ」

「……。……はぁああ？」

僕の発言が何やら有野さんの気に障ったようです。

「お前、なんで校外で若菜と会ってるんだよ」

「あ、その、用事があるからって呼び出されて……」

「ちげえよ。どうやって呼び出されたのかって聞いてんだよ」

「え、え？　その、携帯電話で……」

「……」

な、ななんでそんな顔で睨んでくるんですか？！

「……若菜のアドレス知ってんだ……」

「え？　うん」

……。

……。

……え？！

「あ！　僕楠さんのアドレス知ってる！　すごい！」

いつの間に！　あ、そう言えばメール送られてきてたっけ！　なんだかうれしいね！　今まで気付かなかったよ！　うわー。なんか感激だなぁ。クラスの女の子のアドレス教えてもらったの初めてだ

よ。しかもそれがあの楠さんのだからね。すごいことだよこれは。

「……んだよ……」

有野さんが不機嫌そうに教室を出て行った。

「え？　あれ？」

怒らせちゃったのかな……。僕が悪いことしちゃったんだ。でも、楠さんとの言い合いが止まったね。僕が泥をかぶって解決したのなら、まだいいよね。

と思っていた時期が僕にもありました。

「ごめんね……佐藤君……うぅ……ごめんね……！」

「え！」

今度は楠さんが目を拭いながら教室を出て行った！　これはよくないね！

有野さん、楠さんが出て行った後の教室。僕は一度教室を見渡してみた。とてもクラスメイトを見るための物ではない視線を僕に送っていた。

「……ま、まってー」

僕はとりあえず教室から逃げることにした。……だって、さぁ……。

有野さんも楠さんもどこに行ったか分からないけれど、何となく、僕は屋上へ行ってみた。

運よく、楠さんが腕を組んで立っていてくれた。

「く、楠さん……、ご、ごめんね」

「別に悪くない。責められて当然の事したんだから。有野さんから聞いたけど有野さんに手伝ってもらったんでしょ。なら有野さんに責められても仕方がない」

う……。なんだか僕は何も言えない……。楠さんの言葉を肯定すれば楠さんを責めてしまうし、否定すれば責めた有野さんを悪く言っているようにとられちゃうかもしれない……。どうすればいいんだろう？

「またそんな顔をして。素直に私を責めればいいのにごちゃごちゃ考えて。あぁ、本当に面倒くさい」

「ご、ごめんなさ――」

「ああ、そうそう」

「――え？」

僕の言葉を遮る楠さん。

「クラスの男子で、と言うか家族以外の男で私のアドレス知ってるの君だけだからあんな大きな声で言わない方がいいよ。っていうか言わないでよ」

「え、そ、そうだったの？　ごめん……」

「そうだったのって、私がアドレスばらまいてるとでも思ってたの

？　すごく失礼。ちょっと転校して」

「う、うん、わかった……って、転校なんてできるわけないよ！」

危なくノリで転校させられるところだった！

「……女々しい人……」

「そ、そう言う問題かな……」

「そう言う問題なの。だから、転校が嫌だったら私のアドレス知っているって言いふらさないでよ」

「わ、わかった。転校は嫌だもんね……」

「ま、もう手遅れかもしれないけど」

「手遅れ？」

「あれだけ大勢にばれちゃったらね。まあ、どうでもいいけど……」

どうでもよくなさそうだった……。

「ところで、佐藤君」

「はい」

「君、あの有野さんに気に入られているみたいだけど、何かしたの？」

「え？　僕が有野さんに気に入られてる？」

「……そう言ったんだけど、なんで聞き返すの？」

「う、ご、ごめんなさい……。で、でも、それは違うよ」

「違うって、どの角度から見てもそうとしか思えないんだけど。もしかして君は鈍い人種なの？　まあ、見た目は完全に鈍いというか要領の悪そうな見た目をしているけど」

　要領の悪そうな見た目って、初めて言われた……。でも実際そうだからそう言う見た目をしているんだろう。悲しいけど……。

「落ち込もうがどうしようが君の勝手だけど、その前に有野さんとの関係を説明してよ」

「あ、う、うん。あのね、僕と有野さんは、小さいころからずっと同じ学校に通っているんだ」

「……なんでそんな面倒くさい言い回しするの？　それ幼馴染ってことでしょ？　幼馴染って言えばいいじゃない」

「……」

　僕と有野さんは幼馴染だ。正確には、僕と有野さんと有野さんのお兄さんは幼馴染だ。

　でも、今の僕には幼馴染だって胸を張って言えない。

　……僕は、有野さんを怒らせているのだから。

「なんだ。幼馴染って言わなかったのは何か理由があったからなん

だ。幼馴染って言えないんだ」

「う、うん……。その、僕、小学校の頃有野さんを怒らせちゃって、それからずっと疎遠だったんだ……。だから、幼馴染って言ってもいいのかなって」

「ふーん。なんで怒らせたの？」

「その……それが分からなくて……」

分からないけれど、私を下の名前を呼ぶなって怒られた。もちろん謝った。でも許してくれなかった。当然だよ。理由も知らずに謝って、許してくれるはずがないよ。

今も僕は分かっていない。だから、有野さんも許してくれていないんだ。

今日も怒らせてしまったみたいだし、いい機会だ。あの時のことも謝ろう。許してもらえないかもしれないけれど、もう一度謝ろう。

「……教えてくれなきゃ、ばらすよ？」

う！　楠さんは僕が理由を隠そうとしていると思っているんだ！違うよ？！

「ほ、本当に分からないんだ……」

「……本当かな……」

とても怪しんだ視線。でも僕にはどうしようもない……。本当の本当に分からないから。

「……まあ、いいや」

納得してくれた。よかった。

楠さんが僕に「先に教室に帰って」と言ってきたので、僕は一人先に教室へ帰ることになった。教室に入ると、すぐにみんなから冷たい視線をもらったので、僕はうつむき顔を隠しながら自分の席へ向かった。教室の端っこにある自分の席がこんなにも遠いとは思わなかった。一番角っこでいい席だなと喜んでいたけれど、まさかそれをうっとおしく思う日が来るとは思いもしなかった。席へつき、急いで本を取り出す。僕は無事に幻想世界への逃避することができた。でも、没頭する前に、一度教室内の様子を見る。相変わらずみんな冷たい視線を僕にくれていた。……有野さんの姿は見えなかった。

それからしばらくして、楠さんが教室に帰ってきた。みんなに囲まれ、事情を聞かれたり慰められたりしていたけれど、楠さんは気丈な笑顔で「大丈夫」と答えるだけで深く説明することはしなかった。でもそれが余計に僕への視線を強めていたけれど、誰も責められないよ……。

一方有野さんは、朝のホームルームが始まっても教室に入ってこなかった……。

僕のせいだ。

きょうはくっ！

楠若菜さん。
黒髪ロングにスタイル抜群のモデル体型。パッチリお目目にまぶしく瑞々しいお肌。
世界中のだれが見ても褒める事しかできないほど完成された容姿。
美人で、勉強ができて、運動もできる。人望もあるしそれに応える力も持っている。いわゆる完璧な美少女。悪くとらえられたら困るけれど、八方美人と言う言葉がよく似合う。楠さんのことを軽んじているわけではないし、僕は当然尊敬もしているけれども、裏にある感情を知ってしまった僕はついついそう言う目で見てしまう……。

みんなに分け隔てなく優しさを振りまき、差別なく人と接する楠さん。
多分、誰も楠さんの真の姿を知らない。もしかしたら、僕に見せているのも真の姿ではないのかもしれない。
言うなれば、完璧な八方美人。
八方美人を演じきれる素質を持った人。
八方美人でありながら、誰にもそれを悟られない。
それは、とてもすごいことだと思う。ぼろを出さない、と言うのは少しはばかられる気もするけども、欠点の一つも見せないのはそれなりの才能がなければできないことだろう。
誰にもばれていない楠さんの裏の顔。
当然だけれども、裏の顔が誰にもばれていないのであれば、見えている表の顔、完璧な姿が、みんなにとっての楠さんなのだ。
完璧すぎる人。
皆の共通の認識。
でも。
それでも、全ての人間に好かれるということは難しいらしい。

楠さんのことが気に入らない人が何人かいるみたいで、衝突している姿を度々見る。
多分それは嫉妬で、楠さん本人に非があるわけではない。
欠点がない事が欠点、とでも言えばいいのかな……。
嫉妬することでやっと悪く言える。
でも結局それも、嫉妬する側が自分で自分の徳を下げる行為でしかなく、楠さんは何ら困らない。誰も楠さんを貶めることはできない。
唯一有野さんだけが楠さんに文句を言ったりしているが、その内容も嫉妬以外の何物でもないように思う。
有野さんと楠さんの仲がよくないのは、個人的にとっても悲しい……。

「あの、楠さん」

「なに？」

楠さんと一緒に屋上で食べるお弁当。
何故だかわからないけれど、今日も一緒にお弁当を食べることになっていた。

「有野さんの事、どう思ってるの？」

「なんでそんなこと聞くの？」

「え。あ、いや、その……。……仲良くしたらいいのになって思うから……」

「ふーん。そんなこと心配するなんて、一応幼馴染なんだね」

「お、幼馴染とか、そう言うんじゃなくて、その、みんな仲良くできたらいいのになって思って……」

「残念でした。仲良くするとかしないとかは、人に言われて出来るようなものじゃありません」

「あ、そう、だよね」

「君がいくら心配しようが私と有野さんの関係がどうにかなるわけじゃないから余計なこと考えない方がいいと思うよ」

「う、うん」

そうだよね……。僕みたいなちっぽけな人間が他の人の関係に介入できるわけないよ。僕はどうしようとしていたんだろう……。自分でもよく分からないや。

「でも」

と、楠さん。

「別に私は有野さんのことを嫌ってないし、嫌な人だとか、うるさい人間だとか、そんなマイナスなイメージは持っていないんだよね」

「え？」

そうだったんだ。

「でも、有野さん、よく楠さんに言いがかりみたいなこと言ってる、よね？」

「君は幼馴染なのに何にも分かってないんだね」

「え？」

「君の知っている有野さんはそう言うことを言うような人間だったんだ？」

「えっと、うーん……。好き嫌いははっきり言うけど、人の才能に嫉妬したり、人がちやほやされるのを見て嫌な気持ちになったりするような人ではなかったと思うけど、でも実際に楠さんにそう言うことを言っているから、その、変わったんだなぁって思ってた」

「ま、しばらく関係が断たれていたみたいだし、そう思っても仕方がないかもね。でも可哀想。まさか佐藤君にそう思われているなんてね。あぁ、表面でしか人を見れない佐藤君最低。人の心の奥底なんて見ようとしないんだろうね」

「う……。ご、ごめんなさい……。……え？　えっと、つまり、それは、有野さんは何か理由があって楠さんに突っかかっているの？」

「自分で有野さんに聞けば？」

「あ、そうだよね。ごめんね」

「あーはいはい。どうでもいいよ」

う……。どうやら僕が謝る度に不快になるみたいだ……。謝れないのかな、僕。

「お昼時にこんな面白くない話したくない」

「あ、うん。そうだね」

「何か面白い話してよ」

「む、無茶ぶりだね……」

「無いのならいいよ。佐藤君の犯した罪をみんなにばらして楽しむとするから」

「え！　ま、待って！　面白い話するから！」

「自分で面白い話をするって言ってから話しだすなんて、Mだね。ハードル上がりまくり」

最初にハードルを上げたのは楠さんだけどね……。

「えーっと、うーんと……」

面白くない人間の僕には難しいよ……。

面白い話、おもしろい話……。……。

「……あ！　そうだ！　そう言えば――」

「ちょっと聞いてもいいかな」

僕が勇気を振り絞って面白いと思う話を始めようと思っていたけれど、その前に楠さんは何か聞きたいことがあるみたい。

「――え？　うん」

なんだろう。

「例えばさ、本で『マイナスイオンは科学的根拠のない疑似科学だ』っていう知識を得たとします。それを次の日人に話すとき、『昨日本で読んだんだけど』って前置きするでしょ」

「うん」

「じゃあ、二年後話すときもそう言うのかな。『二年前に本で読んだんだけど』って前置きする？」

「う、うーん。多分、前置きしないと思う」

「そうだよね。きっとその知識をどこで得たのか忘れているよね。どこで得た知識かは知らないけれど、それを知っているから人に話す」

「うん」

「それで、ちょっと気になるんだけど、それはいつから自分の知識になったのかな。どれくらい時間が経てば『本で読んだ知識』じゃなくて『自分の知識』になるのかな」

「え、う、うーん……」

いつからだろう……。

「その、本で読んだっていうことを忘れるまで、とか？」

「情報元を忘れたら自分の知識になるの？　それおかしいでしょ。情報じゃなくて情報元に左右されるっていうのはどうなのかな」

「えっと……。あ、じゃあ、その情報が本当だって、自分の中で確証が得られたらじゃないかな。そうしたら自信を持って自分の知識と言えるね」

「どうやって確証を得るの。マイナスイオンが科学的に証明されていないなんてどうやって自分で調べるの」

「え、えっと、どこかで教えてもらうとか、本とか読んで自分で深く調べるとか……」

「教えてもらたのが本当かどうかはどうやって調べるの。読んだ本が本当かどうかなんてどうやって調べるの」

「う……」

そうだよね……。

「でも、そう掘り下げて行ったら何も信じられなくなっちゃうよ……」

「そうだね。テレビ、新聞、インターネット、本。もっと言えば、教科書、身近な人の体験談。何も信じられなくなっちゃうね」

「そうだね……」

「自分で体験したこと以外は真の知識とは言えないと」

「そう、なるのかな？」

「そうなるでしょ。自分体験したこと、自分で実際に実験して調べたこと以外は知識とは言えないと。究極を言えば今まで実証されてきた科学や、証明された数々の数学の公式なんかも、それが本当かどうかを自分で調べなければ真かどうかは分からないってことなんだよ」

「う、うん」

「つまり、君の言う知識と言うものは、前提自体を証明することから始めなきゃいけないんだね」

「そ、そう、なるの、かな？」

そんなに大それたことを言ったつもりはないけれど……。でも、そういうことなのかな。

「私たちが教えてこられた歴史、情報、常識は嘘である可能性がある。これは洗脳されている可能性があるね……」

「う、うん」

そう考えたら怖いよ……。

「昨日楠さんが言ってた電車内でのマナーもそれに通じるものがあるね」

「そうだね。みんながダメダメ言ってるから何となくダメなんだっ

て思ってたけど、本当のところはどうなのか分からない。洗脳だよ洗脳」

「うん。怖いね」

「だから、これからは電車内で通話してもいいってことなんだよ」

「うん」

「いや、そんなわけないでしょ」

「……え?!」

まさかの裏切りだった!

「郷に入っては郷に従え。訳が分からなくてもルールなんだから従おうよそこは」

「う、うん。ごめんなさい……」

「しょうがないから許してあげる」

「ありがとう」

……なんか、少し釈然としないや。騙されている気がするよ?僕は謝る必要があったのかな?

「ところで」

「うん?」

「君は想像ついていると思うけど、私の兄は君と同じようにアニメとか漫画が好きでさ」

オタクと言わなかったところに何かしらの含みを感じるけれども触れないようにしよう。

「私、部屋に入ってその兄のコレクションを眺めたりするんだけどさ、なんでああいうのって四文字の題名が多いの？」

「う、うーん……。なんか、可愛いからかな……。言いやすいし……」

「でもさ、多すぎて混乱しちゃわない？」

「う、うん……。する……、かな？」

あまりしないけれど……。

「私は四文字にしない方がいいと思うんだよね」

「え？　どうして？　可愛いからいいと思うけど。覚えやすいしメリットが多そうだと思うけど」

「四文字が氾濫している中で、自分の四文字だけ拾ってもらえると思う？」

「う、うーん？」

「そりゃ流行ればいいと思うけどさ、流行らなかったら悲惨じゃな

い？　安易に四文字の波に乗った安っぽさが出ちゃいそう」

「あー……」

確かに、それはあるかも。無理やり省略して四文字にしているものや、よく分からない四文字の物もよく見る。『そ○○○っ』とか、『る○る○』とか。そう言うのは、ちょっと安っぽさを感じちゃうね。

でも興味が湧くのも事実。ついつい買っちゃうもん。……でも手を出して失敗したことも多々……。うう……。絵は綺麗なのに……。内容スカスカ……。『すかすかっ！』だね。

「四文字がいいっていうけどさ、それは読む人が勝手に呼びやすい略称を考えてくれるんじゃないの？　リモコンエアコンパソコン。コンばっかりになっちゃった」

「そうだね……。大体、どの漫画にも略称ってあるよね。そう言えば、すごい略し方のゲームとか本があるよ。題名のひらがな部分だけを取って略称とするゲームとか、小説とか。そう言うのってよく考えたなぁって感心しちゃう」

みんな頭がいいんだね。すごいや。

「でもまあ、四文字は四文字で無難なのかもね。もはやそのレベルまで蔓延しちゃってると思うよ」

「うん、そうだね。たくさんあるね」

「四文字ならどんなものでも題名っぽく聞こえるんじゃない？」

「そうなのかな？」

「『ごきぶりっ』とか」

「それは……全然題名にふさわしくないよ……」

「『けらちん！』とか」

「えっと、タンパク質……だよね……？　髪の毛とか、爪とかの……」

全然面白くなさそうだよ……。

「何、さっきから否定的だね。私のセンスがないっていうの？」

「そ、そうは言ってないけど……」

「なら私の本気を見せてあげる」

本気って……。

「……。……。『エビぞり！』」

「ご、ごめん、どういう内容かよく分からない、かも……」

「……、ある女の子が旅行で人生初スキーへ。そこで見たスノボをする女性。スキーすらまともにできない女の子が目を奪われたものは、太陽を背に、真っ白い雪の照り返しによって空に浮かび上がるスノボ女性の美しいエビぞりだった。それに感動した女の子のスノ

ボ人生が今始まる」

「面白そう！」

でも『エビぞり！』っていう題名は無しかな……。怒られそうだから言わないけど！

「『ふんそうっ』」

「えーっと……」

コメントに困る……。

「紛争萌え萌えマンガ」

「それは……面白くなるのかな？」

「『せんめつ！』」

「こ、怖いよ……」

「『レンズぶ！』」

「レンズ？」

「写真部の日常を描くバトル漫画」

「バトル！？」

シャッター一つ切るのにどんな戦いがっ！

「『――ログイン――』」

「ログイン？」

「死んだ彼女がいまだにログインしている……？！　この世にいないはずの女の子を中心に進むサスペンス。最後にあなたは騙される――」

「面白そう！」

でも今話している『四文字の題名』って言うのとは少し違う気がするよ！

「『びーだま』」

「びーだま、って、あのビー玉だよね」

「ビー玉が宝石のように見えていたあの頃。ビー玉の本当の価値を知った今、それはもうただのガラス球にしか見えない。

――まるで、僕らみたいだ。毎日が輝いていた小学校、何をしてもそれは宝物の思い出になった。

――でも今は汚れてくすみ、輝きも透明感も失われたつまらない日々を過ごしている。

宝物の日々を一緒に過ごしたみんなとも自然と離れ離れになり、昨日も今日も明日も『同じ一日』で、生きることに辟易していた……。

……そんなある日、部屋の掃除をしたときにあの頃みんなで分け合ったビー玉を見つけた。

――そこから再び転がり出すガラス球の僕ら。毎日は――宝物だ」

「面白そう！」

ビー玉一つですごく膨らませたね！

「お気に召しましたかね」

「うん。とっても面白そうだね」

「そうでしょう。でも全部主人公が死にます」

「台無しだよ！？」

超展開だよ！

「というわけで、帰ったら兄コレクションの中で四文字の物を捨てようと思うんだけど」

「えええええええええ！　どういうわけか分からないし、それは少し無情だと思うよ！　お兄さん悲しんじゃうよ！」

「なに？　私に意見する気？　生意気」

「う……、そ、そう言うつもりではないですけど……。その、捨てられても、お兄さん、また買っちゃうんじゃないかな？　お金の無駄だから、捨てない方が……」

「……あの兄ならばあり得る。捨てるのはやめておいてあげよう」

「ふー。よかった」

「なんで君が安堵するの」

「え？　よかった、から、だけど……」

「……まあ、いいや」

いい事だから、安心していいんだよね？

「でも、兄コレ、いい加減にしてもらわないと家の床が抜けちゃうんだよね。さすがに三部屋目がいっぱいになるのは許せない」

「うん、それは捨ててもいいかも！」

「よし、佐藤君が捨ててもいいって言ったから捨てよう」

「あ、しまった！　コレクションが三部屋分もあるところ想像して行きすぎ感を覚えてしまってついつい無責任なこと言っちゃった！　僕そこまで責任持てないや！」

「まあ、とりあえず、捨てることは確定で」

「とりあえず捨てることを確定しないで！」

「コンビニでさ」

「え？　うん」

驚くほど急に話が変わったね。

「パスタを買ったときに、勝手にお箸を入れる店員ってなんなの？　お前は所詮日本人なんだから箸でも使ってろとでも言いたいの？」

「そんなこと言いたいわけじゃないと思うけど……。でも、それは聞いた方がいいね……。お箸で食べたらミートソースとか飛んじゃうもんね」

「そもそも、流れ作業でレジをするのが気に入らない」

「流れ作業？」

「笑顔も作らない。それどころか客の顔すら見ない。パスタに箸をつけるのもそのせいだよ。さっさと客を捌きたいから聞かずに箸を放り込んで済ませようっていう考え。終いには買ったものを落とすように袋に入れるあのデブ！　ぐっ……、思い出したら腹が立ってきた……！　あいつ、コロッケのソース忘れやがって……！」

「お、落ち着いて。ミスは、誰にでもあるよ」

「仏の顔も三度までなの。四度目は死刑だよ死刑。最低でも終身刑だよ」

「そ、それは、厳しい裁定だね……」

「『最低』だけに『裁定』って？　ちょーおもしろーい」

「え、そ、そうかな……」

えへへ。褒められたよ。

「……早くご飯食べてよ」

「え？　あ、うん」

楠さんの話が興味深くてお箸が止まっていたみたいだ。
楠さんのお弁当箱を見てみる。
空っぽだった。もう食べ終わっているみたい。
……でも、昨日はすぐに帰ったのに、なんで今日は帰らないんだろう……。あ、ううん。そんなことを考えるより先にお箸を動かそう。僕を待ってくれているんだから、早く食べ終わらなくちゃ。
箸を動かす僕と、動かすべき箸が無い楠さん。
楠さんが足を伸ばし退屈そうに空を見上げた。

「あーあ。隕石振ってきてみんな死なないかなー」

「ちょ、な、何を言ってるの？！　怖いよ？！」

「どうせ死ぬなら派手に死にたいよね。隕石なんて素敵。しかもみんないっぺんに死ぬなんて、この上なく平等だね」

「理不尽な平等だよ……」

「ま、隕石が振ってきても君だけ生き残るんだけどね」

「え、僕生き残っていいの？」

「いいよ。でもそれって幸せなのかな」

「……。幸せじゃ、無いね……」

「一人じゃ寂しいから？」

「う、ううん。僕なんかが生き残っても人類復興の役には立たないから。無力な自分が情けなくて、幸せにはなれないよ」

「ふーん。じゃあ君の好きな人と、君。二人が生き残ったら？　それって幸せ？」

「それは……もう一人の人がかわいそうだよ。僕がその人を好きだとしてもその人は僕の事嫌いだもん」

「でもいやらしいことし放題だよ。喜んでもよさそうなのに」

「い、い、いやらしい、こととか、そんな、それどころじゃないよっ。他の生き残りを探したり、安全に住めるところを探したり、忙しいよ！」

「……ふーん。君らしいっちゃ君らしいね。で、生き残った相手は、誰を想像したの？」

「え？」

真っ先に思い浮かんだのは、スカイペ相手のまりもさんだった。あ、そう言えば、最近スカイペしてないや。なんだか、怒涛の日々過ぎてパソコンつけずにすぐ寝ちゃってたっけ……。今日久しぶりに話したいな。

「まさか、私とか言うんじゃないでしょうね」

「そんな！　僕がそんな想像するなんて恐れ多すぎるよ！」

「なら有野さん？」

「有野さん、でも、ないけど……」

「なら何。どこのマッチョを思い浮かべたの」

「ぼ、僕はガチムチ好きじゃないよ……」

「嘘。パソコンの中に動画保存してたじゃない」

「それは楠さんが勝手にダウンロードした奴だよ！？　僕が好き好んで保存していたみたいに言うの止めてください！」

「私を責める暇があったらお箸を動かしなさい。いい加減教室に戻りたいんだよね。ここ暑い」

「あ、すみません」

また箸が止まっていた。

楠さんと話していると話題が尽きないなぁ。

それって、とってもすごいことだよね。

楠若菜さん。

黒髪ロングにスタイル抜群のモデル体型。パッチリお目目にまぶしく瑞々しいお肌。

世界中のだれが見ても褒める事しかできないほど完成された容姿。

美人で、勉強ができて、運動もできる。

そして――おしゃべり好きみたい。

あの不思議な感覚

僕がお弁当を食べ終えたら、楠さんはすぐに屋上を去って行った。
わざわざ僕を待っていてくれたなんて、優しいね。
屋上にとどまる理由も無いので、僕も弁当箱を片付けて校舎内に戻った。
階段を下りて、下りて、下りて、教室へ向かおうと角を曲がったところで、人にぶつかってしまった。

「あ、ごめんなさい……」

もっと注意して歩けばよかった……。

「……」

誤っても相手から何の反応も無いので、ぶつかってしまった人の顔をよく見てみる。

「う、あ……。小嶋、くん……」

昨日草むしりを手伝ってくれた小嶋君が怖い顔で僕を見下ろしていた。

「ごめんね……」

「……」

「あっ」

グイッと胸ぐらをつかみ引き寄せられ間近で睨み付けられる。

「な、なに……するの……！」

「……お前最近調子のってんじゃねえか？」

「の、のってません……！　く、くるしいよ……！」

「若菜ちゃんに気に入られてるからって調子のってっとぶん殴るからな？」

「き、気に入られてなんか、いないよ……！」

むしろ嫌われているよ！

「どうやってアドレス聞いたかしんねぇけど、自分は特別だなんて思うんじゃねえぞ？」

「思って、ません……」

「ああ？」

怖いし、苦しいよ……。

誰か助けてくれないかなと思い、あたりの様子を見てみる。みんなご飯を食べているのか、驚くほど人がいなかった。

「ご、ごめん……」

とりあえず謝る僕。

「……お前前からムカついてたんだよな。一回焼き入れとくか？」
「ひっ……。や、やめてください……！」
「なんだお前。なよなよしてマジ気持ちわりぃな。俺がその根性叩き直してやるよ」
「や、やめて……！　やめて……！」
「うるせえんだよ」
左の頬に軽いびんたをもらう。
「うぅっ！」
「なあおい。お前、殴られてもしょうがねえよな？」
「そ、そんな！」
小嶋君の右手が拳を作り肩のあたりの空間に漂う。
怖い。
　怖い。

怖い。
これほどまで直接的な嫌悪は初めてだ。一切の情も含まれていない。
怖い。
夢のような、おかしな感覚。
怖い。
頭が現実として認めたくないんだ。
怖い。
僕は、固く目を瞑った。殴られたら痛いんだろうな。どこを殴られるんだろう。……どこをって、胸ぐらをつかまれた状態で顔以外のところが殴られる想像ができないね……。だから、多分顔を殴れちゃうんだろう。頬かな。鼻かな。人中を殴られるのは嫌だな。
と、諦め覚悟を決め歯を食いしばり、ドキドキしながら拳が飛んでくるのを待つ。

「お前、何ビビってんの？」

小嶋君が笑いながら言った。

「マジ情けねえ。本当に男かお前？」

「う、ううう……」

「だっせえなぁ。なんか、お前みたいなクズにこんなことしてる俺がバカみたいじゃねえか」

「や、やめてください……」

「……わぁ！」

「ひっ！」

思わず目を瞑ってしまう。

「あはははは！　こいつマジだせぇ！」

それを見て小嶋君が笑う。

「うう……」

もうやめてほしい……。

「こんな奴にかまってても仕方ねえわ」

ふ、ふぅ……。どうやら飽きてくれたみたいだね……。よかった、痛い目に遭わなくて。

「まあ、むかつくから殴るんですけど」

「え！」

そんな！

また拳を構える小嶋君。い、いやだよ……！

胸ぐらをつかまれる僕と拳を構える小嶋君。

ニヤニヤしながらぐっと力を入れ、いよいよ僕が殴られるというところで――

「小嶋ぁ！　てめえ何してんだ！」

誰かの怒声が廊下に響いた。

後ろを振り向き声の方を見る小嶋君。

「げ、有野だ……」

「え、え？」

小嶋君の後ろの方から有野さんが早歩きでこちらに近づいていた。

「優大に何する気だてめぇ！」

僕と小嶋君の間に割って入ってくれて、僕の胸ぐらをつかんでいる手を引き離してくれた。そして有野さんはそのまま小嶋君と対峙するように睨み付けた。

それを見て、「別に何もする気ねえよ」と、とぼけた様子を見せる小嶋君。

「ふざけんじゃねえぞコラ……。殴ろうとしてたじゃねえか！」

「ちげえよ！　ただ遊んでただけだし！　なぁ、佐藤？」

目の前にいる有野さんを越して僕を見る小嶋君。僕は驚き、目をそらし、

「え……、う、うん……」

頷いてしまった。

情けない。

本当に、情けない。

「ま、そういうわけ。有野がキレる意味が分かんねえ」

ニヤニヤと小嶋君が有野さんに言った。

「ふざけやがって……！　お前、優大に手を出してみろ……。……ぶっ殺すからな……」

とてもドスの効いた声に、思わず小嶋君がひるんで一歩後ずさっていた。

「う……。だ、だから何もしようとしてねえって！　ちょっと遊んでただけだっつーの！」

「遊んでただぁ？　んなもん関係ねぇだろ……。優大が泣いてんじゃねえか……！」

な、泣いてないよ？　ほんとだよ！？　……涙目では、あるかもしれないけれど……。

「……ああ、もううぜえな！」

有野さんの威圧に負けた小嶋君が踵を返し、教室へ帰って行った。よかったなと安心して、夢の中のような頭でぼうっと小嶋君の背中を眺めていると、有野さんが振り向き僕に声をかけてくれた。

「優大」

「……え、……あ！　あ、ありがとう、助けてくれて……」

情けないよ……。男なのに女の子に助けてもらうなんて……。

有野さんは困惑しているような、悲しんでいるような顔で僕を見

ていた。二つを足して二で割った顔。

「お前、もしかして日頃からこんなことされてんのか？」

「う、ううん。そんなことないよ。今のは、僕がぶつかっちゃったから怒らせたんだと思う」

「本当か？」

「うん」

「本当に本当か？」

「うん。僕、雛ちゃんに嘘つかないよ」

僕の言葉を聞き、有野さんの顔が引きつった。怒っているのとも違う、何と言えばいいのか、嫌なことを言われたのに怒れないときの顔。

「……おい、お前、今……」

「え？」

「私のことを……なんて呼んだ……」

「……雛ちゃんのことを……ああっ！」

し、ししししまった！　雛ちゃんいや有野さんは下の名前で呼ばれることを嫌うんだった！　小学校の頃、そのことで怒られてそれがきっかけで疎遠になっていたのに、それを忘れてついつい呼んで

しまった！　朝謝ろうとしていたことを繰り返してしまうなんて僕はバカだ！　これは間違いなく怒られちゃう！　小嶋君ではなく有野さんに殴られちゃうよ！

「ごごごめん！　その、あの、つい、昔を思い出しちゃって、つい、その、つい！」

言い訳すら出てこないよ！

「……あーっと……いや、何だ。私も優大って呼んじゃったし、その、まー、仕方ねえよ」

「……え？」

あれ？　許してくれるのかな。

「ご、ごめんね。もう、こう言うことないようにするから。もう名前で呼ばないから。気を付ける」

「あー……。……。まー、気を付けてくれ」

「う、うん」

でも、チャンスだから、色々謝ろう。でもその前にお礼だ。

「ありがとう、助けてくれて……」

「いいって。殴られなくてよかったな」

「う、うん……。本当にありがとう」

「気にすんなよ。……その、幼馴染じゃねえか」

僕のことを、幼馴染と呼んでくれた。

あの日、有野さんを怒らせてしまった僕を、幼馴染と言ってくれる。

とてもうれしかった。

「あの、ごめんね……」

「はぁ？　何が。今名前で呼んだことか？　いいって」

「あの、その、今のもそうなんだけど、ずっと前にも、同じことで怒られて、その、まだ許してもらってなかったから……。そのことも、ちゃんと謝りたいって思ってて……」

有野さんが呆れたような顔で僕から視線を外した。

「お前覚えてたのかよ……」

「え。う、うん。ずっと気になっていたから……。でも、忘れろって言うのなら忘れる」

「いや、別に忘れろとは言わねえけど……。そもそもあれは私が悪いんだ」

「そんな。僕が悪いんだよ」

「悪くねえよ。だってお前、私が怒った理由分かんねえだろ？」

「う……。う、うん……。ごめん……」

「いやいやいや。私が悪いって言ってんじゃねえか。謝るのは私の方だ。あの時怒って悪かったな。自分勝手な理由なんだ。気にすんな」

「でも……」

「でもじゃねーの。お前は悪くない。私が悪い。もっと言えば私の兄貴が悪い」

「え、え？　國人君が悪いの？」

有野國人（くにひと）。有野さんの三つ上のお兄さんだ。僕の幼馴染だった人。

「まあな。でもそれも結局は罪をなすりつけているだけで私が悪いんだけどな」

「う、うん？」

よく分からないや……。

「だから、謝らなくていいから」

「う、うん……」

なんだか、もやもやが残るけど……。

でもこれ以上謝っても気分を悪くするだけだよね。だからこの件にはもう触れないようにしよう。

頭を切り替え、もう一つのことについて謝ることにした。

「あの、朝も、ごめんね……。その、なんだか怒らせちゃって……」

僕が怒らせてしまったから有野さんは教室を出て行ったんだ。でも、なんで怒ったのか、分かっていないんだ……。申し訳ないよ……。

「……あー……。……いや、別に、優大は悪くないんだろうけど……」

「けど？」

「……まぁーそのーなんだ。あれは私の心が狭いというか、予想だにしない事実を突きつけられて動揺したっつーか。だから謝るな」

「えっ、う、うん」

謝れないなんて……。許してくれないってことかな……。

「そこでお前はなんでそんな悲しそうな顔をするんだよ」

「謝れないんだなぁって思って……」

「別に悪くないんだから謝るなって意味だからな？」

「う、うん……」

悪い僕を気遣って悪くないと言ってくれる有野さん。なんて優しいんだろう。やっぱり有野さんは昔から変わってないや。優しい人だ。

……でも、なんで楠さんに食って掛かるんだろう。やっぱり、女子の頂点を狙っているのかな……。

「あん？　何見てんだよ」

いつの間にか僕は有野さんの顔をじっと見ていたようだ。

「う、ごめん」

「いや、怒ってねえけど……。……やっぱりお前も私のこの髪の色怖いのか？」

自分の髪をつまみくりくりとひねる。

「え？　う、ううん。そんなことも、無いと、思う、かなー」

実は怖いです。

「……なら染めるか……」

「え！　やめちゃうの！？」

「嫌なんだろ？　この色」

「そ、そんなことないけど……。その、とっても似合ってるから、もったいないかなって」

近寄りがたい雰囲気を出しているけれど、僕はとても似合っていると思う。

「あれ、お前金髪が好きだったの？」

「う、ううん。そんなことも無いと思うけど、有野さんには似合ってるなって。あ、でも、僕が意見することじゃないよね」

「……まあ、そうかもだけど……。まあいいや。んで、じっと私の顔見てたけど、何か聞きたいことでもあんの？」

「あ、そうだった。その、聞いてもいいかな」

「別にいいぜ」

「ありがとう。えっと、その、有野さんって、その、楠さんの事、嫌い、なのかなーって」

「はぁ？　別に嫌ってねえけど」

「え？　そうなの？」

「そうなのって、意外なのかよ」

「あ、ううん。そうじゃなくて、その、ならなんで楠さんに、その、……えーっと、文句？を言ってるのかなぁって……」

どうやら、この質問はよくない質問らしい。有野さんの顔が怖くなった。

「……なんでお前がそんなこと気にすんだよ。お前もやっぱり若菜のことが好きなのか？」

「え、いや、そんなことないけど……」

「本当かよ……。まぁ？　お前が誰を好きになろうが？　私には、いっっっっっさい関係ねぇけどな！」

「うっ、ごめん……」

「別に怒ってねえよ！　なんで謝るんだよ！」

「お、怒ってるよ……」

「怒ってねえって言ってんだろうが！　ふざけんな！」

「う……。わ、分かりました」

「……ふん」

有野さんの機嫌を損ねてしまった……。

「えーっと……」

どうしよう……。

「ごめん……」

「なんで謝るんだよ」

「……色々と、情けなくって……」

きっと、僕が普通の人なら有野さんが怒っている理由がわかるは

ずだ。でも僕はダメダメ人間だから……。有野さんが怒っている理由が分からない。生きていてすみません……。

「ごめんね……」

「……別に、悪くないんだから謝んなよ」

「……うん……ごめん」

有野さんが一度ため息をついて、すぐに笑ってくれた。
とても優しい笑顔で笑ってくれた。

「優大は優しいな」

僕は優しくなんかないよ。優しいのは有野さんだよ。

「ほんと、悪かったな」

突然、謝ってきた。意味が分からなかった。

「え、え？　なんで有野さん謝るの？」

「今までのことだよ。中学あたりから、私がお前の事避けてるみたいで気分悪かっただろ」

「え、いや、その……」

「あの時、私が理不尽に怒った理由、そろそろお前に教えなきゃいけねえよな。納得できねえよな」

「気にはなるけど、言いたくないのなら、言わなくてもいいと、思うけど」

「言うよ。教える。下らねえ理由だよ。下らなすぎてお前怒るかもしれねえな」

「怒らないよ」

「そっか。んじゃまあ、教えるわ。……あーでも、ダサすぎる理由だからここじゃあ言いたくねえな……」

有野さんが周りを見渡す。人に聞かれたらよくないのかな。

「あ、そうだ」と言って、有野さんが僕の方を見る。

「お前さ、秘密基地覚えてるか？　私と、優大と、兄貴の三人で作った秘密基地」

「うん。覚えてるよ」

今も時々行ってるからね。

「今日の放課後そこに来てくれよ。あそこなら誰にも話聞かれねえだろ」

「うん。分かった」

「んじゃあ、放課後そこで待ってろよ。……まだ残ってるかなー、秘密基地。残ってたらいいな」

「うん。そうだね」

残ってるよ。秘密基地。

「ま、適当に作ったからもうなくなってるだろうけどな」

「うん」

ちゃんと、守ってきたよ。

「思い出がのこってりゃそれだけで十分だよな」

「うん」

思い出も、秘密基地も。
僕はあの日のまま、残してるよ。

「……なんだか、少し楽しみだな」

「うん」

とっても、楽しみだね。
僕は少し、ほんの少しだけ、涙が出てきてしまった。
僕が泣いていること、有野さんにばれてないかな。
すぐ泣いたら、きっと有野さんに怒られちゃうよ。
男らしくないって。
でも、あそこであの頃の友達に会えるのは、僕にとって泣くほど嬉しいことなんだよ。
だから、これくらい許してね……。
――放課後が、待ち遠しい。

幼馴染の存在も都市伝説でしょ？　え？　違うの？

有野雛さん。

金髪セミロングで背は普通。楠さんのようにスタイルがいいわけではないけれど、それは楠さんが特別いいと言うだけで有野さんのスタイルが悪いと言いたいわけではない。細くってスレンダー。

楠さんのように身長が高いわけではないし、楠さんのように胸もあるわけではないけれど、楠さんに負けないくらい可愛い。

大きくてほにゃんとした目。潤んでいるような形のいい唇。

楠さんは近寄りがたい美しさで、有野さんは親しみやすい可愛さ。女優とアイドル、と言えばいいのかな……？　なんか違う気がする。しかも今とっても失礼なこと言っているのかも……。

とにかく、有野さんは可愛い。

僕が幼馴染だなんて申し訳ないです……、と思うほど可愛い。

美少女で、勉強ができて、運動もできる。みんなを引っ張る力を持っていて、有野さんを慕って集まってくる人も多い。女子の人気で言えば、有野さんの人気が高くて、男子の人気で言えば楠さんの人気が高い。

ただ、有野さんは好き嫌いをはっきりと言うタイプだからそれを良しとしない人は有野さんと距離をとっているみたい。そう言った点で、我が強い。

この前、きゃぴきゃぴしている女の子（語尾に☆とかついちゃいそうな人）にむかって「うぜえから普通にしゃべれよ！」と言っていたのを見たことがある。あと「缶が開けられなーい☆」って言っていた驚くほど力の弱い女の子に「なら買うんじゃねえよ！」と怒っていた。ストレートだなぁって思ったね。

でもそう言った男前なところに憧れる女の子も多いみたい。

楠さんと有野さんがクラスの女子ナンバーワンとして、その一つ下の位置にいる前橋さんは有野さんを慕っているみたいだし、有野

さんの人気は凄いね。金メダルと銅メダルを一緒に取ったみたいな感じだね。

有野さんは男勝りな性格なので、男子にも人気がある。でもちやほやされるのが嫌みたいでいつもうっとおしそうに追っ払っている。もちろん気に入らない男子には強く言葉をぶつけるので、有野さんを苦手とする男子もそれなりに多い。お昼に言い合っていた小嶋君も、有野さんのことをあまり好いてはいないようだ。

有野さん。

好き嫌いをはっきり言う人。

そして。

好き嫌いがはっきり分かれる人。

好きな人は好きだし、苦手な人は苦手。

多分、そんな感じ。

……でも、楠さんと有野さんの関係ははよく分からないや……。

楠さんは有野さんのことを嫌っていないし、有野さんも楠さんのことを嫌っていないみたい。

でも有野さんは楠さんに意見することが多いし、今朝だって楠さんが強めに怒られていた。

一見嫌いあっているように見えるのに、実はそうでもないみたい……。

よく分からないや……。

「佐藤君」

「え？」

放課後、帰ろうと荷物をまとめているところに、楠さんが話しかけてきた。

「佐藤君、今から暇でしょ？」

思わず暇だと言ってしまいそうになる笑顔。暇意外に答えが無いのではないかと思う。
いやいや。
僕は頭を振ってその考えを散らす。
「あの、僕、この後用事が……」
「え？　用事があるの？」
「うん……」
楠さんが僕だけに聞こえる小声で言う。
「……あの暇でしょうがない佐藤君に用事？　それ嘘でしょ？」
「う、嘘じゃないよ……」
「……ふーん」
ジト目で僕を見た後、やれやれといった感じでおもむろに携帯電話を開いた。
「な、なんで携帯電話を操作しているの？」
「え？　私がケータイ操作したらダメかな」
「だめじゃないけど、その、なんでこのタイミングなのかなーって思って」

「あはは。別にどんなタイミングでもいいでしょー。あーそれにしても今日は暑いね。思わず汗でケータイが滑り落ちそうだよ。そのせいでうっかりデータフォルダの中の写真が見られちゃうかもしれないね。でも暑いからしょうがないよね。――あっ、おっとっと、手からケータイが……」

と言いながらボウリングの球を投げる時のように携帯電話を構えた。

「ごめんなさい僕暇でした！」

「あ、そうなんだ。ならちょっといいかな」

笑顔で携帯をしまってくれた。ふ、ふぅ……。死ぬところだった……。

なんて安心している場合じゃない。有野さんに事情を説明しておかなきゃ。

教室を見渡し有野さんの姿を探す。

……。

い、いない……。

もしかして、もう行っちゃったのかな……。

「さぁ、佐藤君、行こう」

「え、え、あの、その前に……」

「ああ……手が汗ばんで……」

「分かりました！」

「よろしい」

僕は教室中から冷たいような熱いような視線を受けながら楠さんの後ろをついて教室を出た。

……有野さんとの約束、どうしよう……。僕、連絡先知らない……。

「あの、楠さん。僕、少し急いでて……」

僕の前を歩く楠さん。背筋がピンと伸び、腰にまで届こうという美しい黒髪が歩く度に左右に揺れる。後姿がすでに美人。追い越して顔を見た時にも美人だから街中では大変だろうね。でも今は素直に見とれることができないよ。

「なに君、まだ逃げようとしてるの？　私に刃向う権利君にはないの。ばらされたいの？」

「そんなこと、無いけど……。でも、先にしていた約束だから……守らなきゃいけないし……」

「うるさいね。ばらそうかどうしようか。よしばらそう」

「えっ、いや、ごめんなさい……」

僕どうすればいいんだろう……。

「と言っても、別にそんなに時間をとらせるわけじゃないから。ただ聞きたいことがあるだけ」

「あ、そうなんだ。でも、教室じゃあだめなの？」

「みんなに聞かれたくないし」

「聞かれたくないこと？」

「そう」

な、何だろう……。怖い……。

「……ここでいいや」

通りかかった空き教室の扉を開けた楠さん。僕もそれについて教室に入った。

「あの、一体、何？」

「お昼に話したこと。兄コレを処分しようと思って、どこかいい値段で買い取ってくれるところを教えてほしくてね。君なら何でも知ってるでしょ。オタクだから。オタクだからこそ」

「え、うん、その、まあ……」

オタクと言われることにやっぱり抵抗があるなぁ。普通の人より少し本が好きっていうくらいなのに……。

「で、高く買い取ってくれるところはどこ？　何なら君が高値で買い取ってくれてもいいけど」

「ぼ、僕そんなにお金持ってないから買い取れないよ……」

「甲斐性がないね。甲斐性がないならついでにその貧乏性も無くしてよね。さっさとお財布出して」

「か、カツアゲですか……」

「む、そんな暴力的なことするわけないでしょ、失礼なこと言わないで」

「ご、ごめんなさい……」

でも……、実際、財布出せって……。

「で、買い取り値って場所によって違うの？」

「う、うーん……。僕売ったことないから……」

「へー。そうなんだ。役に立たないね。役に立たないのならせめて命断ってよね。さっさと屋上行ってきて」

「役に立たないからって別に死なないよ！？」

「はいはいはい。我儘だねホント」

我儘じゃないよ……。

「でも、なんでそれを聞くの、教室じゃあだめだったの？」

「兄がそんな人種だってばれたくないでしょう。あ、しまった。また君に弱みを握られてしまった」

「よ、弱みって、別に楠さんが悪いわけじゃないし……。そもそも全然弱みにならないし……」

「何を言っているの。オタクが家族にいるなんて恥ずかしい事この上ないでしょう。オタクは、無いよねー」

「う……」

楠さんは、僕のこともオタクっていうから、何気に僕も否定されていることになるね……。

「いいところ知らないのなら、せめて古本屋の場所を何個か教えて」

「う、うん」

これなら、すぐに秘密基地へ向かえるね。

知る限りの古本屋を紙に書き記し楠さんに渡す。

「へぇ。結構あるんだね。さすが佐藤君。この中から兄コレを売る店を探せばいいんだね」

「う、うん……。でも、お兄さんのコレクション本当に捨てちゃうの？」

「君が捨てろって言ったんでしょ」

「え、いや僕捨てろなんて言ってないよ！？」

「はいはい。じゃあ、とりあえず佐藤君の命令通り泣きながら兄コレを捨てに行ってきます」

「完全に僕のせいにしようとしてる！」

「不肖楠若菜。佐藤君の命により兄の宝物を捨てに行ってまいります。では」

「え、あっ、ちょっと……」

行っちゃった……。ぼ、僕のせいかな……。……僕のせいだよね……。ゴメンねお兄さん……。

「ううう……。また僕のせいで不幸な人が……」

ごめんなさい……。

「……はっ。落ち込んでいる場合ではない。早く秘密基地へ行かねば」

落ち込む時間はたくさんあるからね。

「よし、早く行こう」

少し急ぎ足で教室を出た。

急ごう！

と、思ったのだけれども。

う……。まずいよ……。

「おお、佐藤。ちょうどいいところに。もう帰ったかと思ってたぞ」

廊下の角で、先生に会ってしまった……。また仕事を頼まれちゃ

うのかな……。

「この前片付けた資料室に資料が山積みされて置いてあるから、それを本棚にしまっていって欲しいんだ」

「あの、その……、僕、用事があって……」

「またお前は……。すぐそうやって逃げようとするなぁ！　さっさと終わらせればすぐに帰れるんだから、文句を言う前に早く仕事をはじめろ！」

「は、はい……」

うう……。早く終わらせよう……。

・　・　・

……。

「うわぁ！　時間とられちゃったよ！」

一時間弱資料室に縛り付けられ完全に遅刻してしまった僕。まだいてくれるかな……。当然怒ってるよね……。

ごめんね……。

山を駆け上る僕。でも体力がないのですぐに息切れして足が止まる。

急ぎたいのに。
情けないよ……。
体力つけなきゃね……。

「あ、有野さんは……」

全力で歩いてやっとたどり着いた秘密基地。
そこには誰の姿も無かった。
ただ、いつもと変わらない秘密テントだけが寂しそうに僕を迎えてくれた。

「う、ご、ごめん……」

何もない。誰もいない。
木の間から漏れる陽のスポットライトが僕を寂しげに照らす。

「な、殴られる……。絶対殴られるよ……」

昔を思い出すよ……。よく殴られていたっけ。

「でも、そんなことより、早く謝りに行かなきゃ……。殴られちゃう」

僕は踵を返し来た道を引き返そうと一歩踏み出した。けど、

「まてまて」

秘密テントの中から声がした。

「帰ってねえよ」

テントから出てきたのは当然有野さん。
にこやかに手を挙げてくれた。

「あ、有野さん！　ごめんね！」

僕は駆け寄り頭を下げた。

「別に怒ってねえよ。時間決めてねえし、優大の放課後の予定聞いてなかったし。それにたった一時間じゃねえか。来なかったらムカつくけど来てんだから文句はねえよ。でも、そんなことより、殴られるってなんだよそれ。私がいつお前のことを殴ったよ」

「え、主に、小学生時代に……」

「……忘れとけよ」

体に刻み込まれていますので……。

「あの、待たせちゃってごめんね……」

「構わねえっての。どうせお前また誰かに捕まってたんだろ」

「えっと……」

「あー、言わなくていい言わなくていい。別に聞きたいわけじゃねえし」

「う、うん」

よかった。聞かれたら理由を言わなきゃいけないところだった。

「にしても、この秘密基地がまだ残ってるとはなぁ。風で吹き飛んでると思ったんだけどなぁ……」

「うん」

「あの頃を思い出すな。昔はあんなに大きく見えた秘密基地も今見れば狭くて汚ねぇぜ。それに造りが雑。ホント、よく残っててくれたな」

「うん」

「……毎日のようにここへ来て遊んだな……。懐かしい」

「そうだね」

「……でも、それも私が理不尽にキレたせいで、終わっちまった」

「……」

ここで遊んでいるときに怒られた。

『今度から私の名前を呼ぶんじゃねえぞ！』って。

その理由を、今日教えてくれるみたい。ずっと引っかかっていた胸のしこり。それが今日無くなるんだ。

「悪かったな。キレて」

「う、ううん」

「ああ、いや、そうだな。とりあえず、理由しりてえよな」

「あ、うん」

いよいよ聞ける。

「大した理由じゃねえんだけどさ、あのー、私の兄貴がさ、ああなったじゃん？」

「うん」

ああなった。

有野さんのお兄さん、國人（くにひと）君は、中学校に上がったあたりから、突然非行に走りだした。髪の毛を金色に染め、平気でタバコを吸い、毎日喧嘩に明け暮れた。もちろん、僕と遊ぶなんてことはもうなくなっていた。

この辺りでは有名だ。とても喧嘩が強くて、目が合っただけでぼこぼこに殴られる。とても恐れられていた。

みんなから怖がられていた。それは、当然僕も……。

でも、実は憧れてもいた。

強くて、かっこよくて、自分の腕だけで生きていくような、そんな僕とは正反対のアウトローな生き方に憧れを抱いていた。

しかし憧れるだけ。

僕には、そんなことできるわけがなかった……。

國人君が荒れだしてから、有野さんも徐々にその影響を受けだした。

國人君のように、非行の道を歩き出した。

それからしばらくしてだった。

僕が有野さんに怒られたのは。

『名前を呼ぶな』と怒られ、それから疎遠になってしまった。

悲しかった。幼馴染が、二人とも僕の元から離れて行ったのは。
そこから僕は一人になった。
そこからずっと、僕は一人だった。
そこから――色々と決まったんだと思う。

「だせぇことに、兄貴の影響で私もこんなんになっちまってさ」

「……う、うん……」

「まあ、なんだ。あの当時、兄貴の真似をして、調子に乗ってた私はさ、その……」

「うん」

「……あの当時の話だからな？　今は違うからな？」

「う、うん」

「……えーっと、言い辛いんだけどさ、あー……その、優大の事……だせえと思ってたんだよ」

「うん」

それは今もそうだよ？

「当時だからな！　今はそんなこと思ってねえからな！」

「え、う、うん……？」

今もかっこ悪いけど……。

「んで！　でだ！　……その、私の名前ってさ、今の私には似合わねえじゃん？」

「え？　なんで？」

「なんでって、似合わねえだろ。『ヒナ』だぜ。雛。こんな女っぽい名前、可愛い奴にしか似合わねえだろ」

「え、そうかな……。有野さんにはとっても似合ってると思うけど……」

「……。……似合ってるって、それお前……！」

突然顔を赤くして僕をべしべし叩いてきた。

「いたい！　ご、ごめん！」

「て、てめえ！　この野郎！」

「ゴメンなさい！」

僕が悪いです！

「はぁー……はぁー……」

い、息が荒いよ……。顔も赤いし、怒らせてしまったみたいだね……。

「ご、ごめんなさい……」

「……べ、別に、怒ってねえけど……」

え、怒ってないのに叩かれたの？　僕……。

「い、今はそんなのいい！　そんなことよりあの日のことだ！」

「あ、はい」

「私は、自分の名前が恥ずかしかったんだよ。こんな女っぽい名前嫌だって思ってたんだ。そんで、更に、だせぇと思ってた優大に『雛ちゃん』なんて呼ばれるのが我慢ならなかったんだ」

「そうだったんだ……」

「だから私はあの日、お前にキレたんだ。『今後名前を呼ぶな』って……。今思えば、なんて理不尽な奴なんだろうな、私。ホント悪かった」

「そ、そんな。嫌なことしたのは僕なんだから謝るのは僕だよ！」

「私が理不尽だったって言ってんだろ。それは譲れねえよ。お前は謝るなよ」

「……でも……」

「でもじゃねえの。私が悪かった。……許してくれ」

「う、うん。許すもなにも、僕怒ってないし……」

「……そっか。そう言えばお前はそういう奴だよな」

そういう奴って、どういう奴だろう……。よく分からないや。

「でさ、お前にキレてから、どうにも雛って名前が嫌いになっちまってさ。誰に呼ばれてもイライラするようになってたんだよ」

「うん……」

可愛いのに……。

「まあ、今思えばしょうもねえことなんだけどな。なんでそんなこと気にしてたんだろうって、馬鹿みたいだぜ」

今思えば馬鹿みたい、と言うことは？

「えっと、なら、今はもう名前で呼んでもいいの？」

「いやー、なんかもう恥ずかしいわ。イラつくことはねえけど、恥ずかしさは残ってるんだよ。……だって、似合ってねえもん」

「そんなことないよ。似合ってるよ」

「……そっか」

にっこりと笑ってくれた。

あの頃から何も変わってない、優しい顔だ。

と、思って懐かしんでいたのだけれども、急に恥ずかしそうに僕から顔をそむけ、もごもごと言った。

「ま、まあ、何だ。お前が、呼びたいって言うんなら、その、なぁ。別に、呼んでも、いい、かなーとか……」

「……え！　いいの？！」

「あ、いや、無理にとは言わねえけど、どうしても、呼びてえなって思うんなら、我慢してやらないことも、ない」

やったね！

「嬉しいな！　僕、あの頃みたいに呼びたいよ！」

「え、その……。……まあ……お前がそうしたいのなら……、私も、悪かったし。迷惑かけてきたし」

「迷惑なんてかけられてないよ。でも、僕、雛ちゃんって呼びたい」

あの頃にはもう戻れないのなら。
呼び方だけでも、戻したいよ。

「呼んでも……いい、かな……？」

「ぐっ……！」

完全に僕から目を背け、顔を隠した。やっぱり、嫌なのかな。
顔を背けたまま、有野さんが言う。

「……こほん……。……なら、しょうがねえな。好きに呼べばいい」

「やった！　ありがとう、雛ちゃん！」

やっぱり、少し嫌なのか、耳が真っ赤になっていた。お、怒ってるのかな？

「……くそ……そんな嬉しそうに……ふざけやがって……」

「え、ご、ごめんなさい……」

嬉しそうに呼んだらダメなのかな……。

赤い顔を僕に向ける。

「ち、ちげえよ！　ふざけてんのは私だ！　今更こんなこと、なぁ！」

「え、よ、よく分からない、けど……」

今更名前で呼び合うことがおかしいって言いたいのかな？　僕は全然おかしいとは思わないけど。

あたふたとしていた有野さん……、いや、雛ちゃんが我に返り、コホンと一度咳をつき仕切り直して僕の顔を見る。

「私も、お前の事優大って呼ぶからな」

「うん」

僕らは笑顔を見せ合った。

「あの頃に、戻ったみたいだな」

「うん。……ここに、國人君がいれば、完璧だね」

「……兄貴がここにいれば……か」

雛ちゃんの笑顔に影が落ちる。

「え、え？　國人君に、何かあったの……？」

「……あいつは、もうここへ来れねえよ……」

「それは、ここに来たくないからってこと？」

「……そうじゃねえ。そうじゃねえんだよ。来たくても……来れねえと思う」

「どう、して……？」

そう言えば、最近は全く噂を聞かない。あれだけ街で噂されていた國人君だったのに、ここ二年くらい何も聞いていない……。な、なにかあったのかな……。

「兄貴の話は今はいい。……でも、多分、近いうちに……事情を説明する……」

「う、うん……」

……なんだか、嫌なことが起きているみたいだ。でも、近いうちに教えてくれるというのであれば。これ以上僕が踏み込むのはよくないよね。

「で、だ」

改めて雛ちゃんが僕の顔を見る。

「うん？」

「その、昔に戻った私達なんだけどさ」

「うん」

また雛ちゃんの顔が赤くなった。

お、怒ったのかな？

「……もうちょっと、先へ進んでみるのも、面白いんじゃねえかなって思ったり思わなかったりしたりなんだり」

「え？　どういうこと？」

「いや、だから、幼馴染の、先……、と言えばいいのか、よく、わかんねえけど……。もうちょっと、踏み込んだ、関係……？　っていうか、なんていうか……」

「……幼馴染の先って……あっ！」

分かった！

「そ、そう言う、こと、何だよね……」

「え！　い、いや、その、なぁ！　面白いかもなぁって、思っただけだぜ！　そう、実験的に。実験的にな？　してみたら面白いかもなって！　思いつき思いつき！　お前が嫌なら別に、このままでも

いいし？　冗談、ってことでも、いいし……。……ってゆーか、冗談だし！」

「え？！　冗談なの？！　僕とっても嬉しかったのに……」

「……え？！　嬉しい！？　嬉しいって言ったのか？！　え、え？！　マジで！？　いや、なら冗談じゃなくてもいいし？！」

「えっと……僕は、冗談じゃない方がいいな……」

「冗談じゃねえよ！」

「ひっ……。じょ、冗談じゃない、よね……、ごめんね……。僕調子のってた……」

怒られた！　ごめんなさい！

「は、はぁ？！　お前何突然……あっ！　いや、今の冗談じゃねえって言うのは、ふざけんじゃねえって意味じゃなくって、その、今言った提案が本気だってことだ！　キレたんじゃねえよ？！」

「あ、あぁーなるほど。勘違いしちゃった」

「そうだぜ！　優大勘違いしちゃってたな！　あはははは！」

「う、うん」

……。なんだか、おかしいなぁ、雛ちゃん。

「えーっと、な、なら……。その、今から、そう言う関係ってこと

で、いいのか？」

不安そうに聞いてくる雛ちゃん。何が不安なのか分からない。僕が断るわけないのに！

「うん！　もちろんだよ！　これからよろしくね！」

一気に、雛ちゃんの笑顔が弾けた。とっても嬉しそうだ。嬉しいのは僕なのに。

「……は、はは……。ははは。……い、いやぁ、その……なんか悪いな……。私みたいなので……」

「そんな！　雛ちゃんだから、僕は嬉しいんだよ！」

「そ、そんなこと言うなよぉお前っ！　照れるじゃねえかっ！」

雛ちゃんも喜んでくれている。とっても嬉しいよ！

「僕、雛ちゃんが初めてだよ」

「そ、そうなのか！　あ、あはははは！　なぁ！　おい！」

「うん！　初めての親友だよ！」

「…………………………………………………………

……………………………………………………………

……………………………………………………………

……………………………………………………………

……………………………………………………………

……は？」

……え。

さっきまで喜んでいた雛ちゃんが、突然無の顔になった。

こんなにも人の顔って無を表現できるんだ。無過ぎて少し心配になっちゃうよ。

「ひ、雛ちゃん。もしかして、僕、全然違うこと言ってた？」

「あはははははははは」

かくかくと笑う。無です。無の状態で笑うと、こうなるんだね。

「ご、ごめんね！　勘違いしちゃった！」

「……いや、はっきり言わない私が悪いんだけど……。なんて言うか、お前らしすぎるというか、ベタすぎるというか」

「ごめん……」

無の顔をやめ、あきれたような顔で僕を見てきた。

「謝るなよ……。勘違いは、誰にでもある……」

落ち込みまくりの雛ちゃん。ごめんね、ごめんね。一体どういう意味だったのだろう……。

「その……、今のは、本当は、どういう、意味だったの？」

「ああ、しょうがねえよ。私がはっきり言わなかったのが悪いんだもんな。ああ、私が悪い」

「そ、そんなことないよ。僕が、馬鹿だから」

「お前はバカじゃねえよ。バカは私だ。こうなりそうだってことは予想ついてたんだ。はっきり言わない私が悪い」

「え、っと……」

「……だから、はっきりと言うわ」

「え、あ、うん」

「……うっし」

雛ちゃんが、気合を入れた。

覚悟を決めた、かっこいい顔で僕の顔をまっすぐに見てくる。

「……私は、優大のことが、す――」

と、ここでタイミング悪く誰かの携帯電話が鳴った。電話みたいだよ。

……。あああああああああああああ！　僕のポケットから聞こえてくる！　っていうか僕だ！

「う、あ、あ、あ、ゴメンなさい……！　その、僕、マナーモードにし忘れてた……！」

「……いや、別にマナーにしてないのは悪い事じゃねえだろ。いいから、さっさと出ろよ。話はそのあとだ」

「う、うん、ごめんね、ちょっと、失礼して……」

ポケットから携帯電話を取り出しディスプレイを見てみる。

「？」

知らない番号だった。でもなり続けるので出てみる。

「はいもしもし。どなたですか？」

『……なんで私は君の番号を知っているのに君は私の番号を知らないの？』

この可愛い声ときつい口調は……。

「え、あ、楠さん？」

「若菜だぁ?!」

「えっと、僕、携帯番号は教えてもらってないけど……」

メールしか受け取ってないよ。

『嘘。どうせ君、私の番号を調べて登録してあるんでしょ?』

「そ、そんな。僕そんなことしないよ……」

『どうだか……。ま、いいや。私から電話をかけたことによって君が調べていようが調べていまいが番号が知られてしまったわけだし、変わらないね』

「そ、そうだね。それで、その、いったい僕なんかに何の用事が……」

『私じゃないんだけどね。兄が君に言いたいことがあるってうるさいから』

「え! ま、まさか、本売ったの?!」

『売れって言ったのは君でしょ』

「言ってないよ?!」

『うるさいね君。往生際が悪いよ。売れって言ったのは君。認めてよ』

「み、認められないよ……」

『……レイプ未遂……』

「ぼぼぼぼ僕が言いましたあああああ！　ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

なんだかどんどん罪が重くなっているよ?!

『でも私は謝らなければならないの……』

「え、え?」

『未遂犯の君に命じられた兄のコレクションの処分、それも未遂に終わってしまったの』

「え、あ、よかった……」

失敗したみたいだね……よかった。

『出張買取してもらおうと思ったんだけど、査定中に兄が帰ってきてしまってね。理不尽に怒られたよ。そしてその言い訳として君に命令されたと言ったら、君に電話しろと。兄に代わるね』

「え!?」

そんな突然代わられても！　僕が怒られちゃうの?!

『……もしもし?』

「あ、はい！　その、僕……！」

『いやいや、そんなに恐縮しないで……。俺は、全部分かってるから』

「え……」

怒鳴られると思っていたけれど、全然そんなことは無くむしろ優しさと憐みのこもった声だった。

『君、若菜の本性を知っているみたいだし、きっと無理やり言わされたんだろう？』

「えっと……その……」

『みなまで言わなくていいよ。大丈夫。俺は君の味方だから』

「は、はぁ……」

『これからは部屋に鍵をかけることにするから。安心していいよ。もう勝手に処分されることは無い』

「そ、そう、ですか……」

『じゃあ、若菜を恐れる者同士、仲良くしよう』

「は、はい」

『じゃあね。いつか愚痴りあおう』

「えっと、はい……」

お兄さん、優しい人だね……。

『……もしもし？』

「あ、楠さん……」

楠さんに代わっていた。え、いや、お兄さんも楠さんだけど……。

……とにかく、楠さんに代わっていた。

『ふざけた会話の内容だったね。何が私を恐れている者同士よ。それはこっちのセリフだよ。恐れているのは私の方だよ。被害者面しないでよね』

「は、はい、すみません」

『……ふん。まあ、そう言うわけで、君の作戦は失敗に終わりました。ここにご報告させていただきます』

「はい……」

『では失礼します。また明日』

「うん、ばいばい」

電話が切れた。

よかった、お兄さんのコレクションが葬り去られないで……。

って、そんなことよりも！

「あ、ご、ごめん雛ちゃん。話の途中で電話なんかに出ちゃって……。……これで、もう大丈夫。電源切ったよ。それで、何の話だっけ」

うぐ……。雛ちゃん、怒っているのかとても怖い顔。……電話に出ちゃったから怒ってるのかな……。

「……お前、若菜の電話番号も知ってんだな」

「え、あ、うん……」

「しかも、若菜から電話がかかってくるんだな」

「う、うん。初めてだけど……」

「……」

ぎろりと睨み付けてくる雛ちゃん。

う、怖い……。

「その……」

「……話ってのはあれだよ。私達、しんゆうになったんだから、とりあえずアドレス交換しようぜって言おうとしてただけ」

「え、あれ、親友になろうっていうのは僕の勘違いじゃなかったの？」

「勘違いじゃねーよ。初めからそれ以外言うつもりなかった。なんだ？　それ以外に何かあるのか？　ねえよな。あるわけねえよな！

えぇ？　おい！」

「そ、そうでございます……」

怖いよ……。

「……なんだよ……くそ……」

「え、え？」

とても悔しがっていた……。

「てめえ、いいから、さっさと教えろよ。早く帰りてえんだよ」

「あ、うん。ごめん」

「……ふん」

突然機嫌の悪くなった雛ちゃんと、アドレスの交換をしたあと、雛ちゃんが一人さっさと山を下りて行った。

一人取り残された僕は、雛ちゃんを怒らせてしまったと困惑し立ち尽くしていたけれど、山を下りて行った雛ちゃんから送られてきたメールを見てほっと息を吐いた。

『また明日な』

なんてことは無いメールだったけれども、今の僕にはこれだけでとっても安心できた。

あの頃、別れる時に言ってくれていたこの言葉。

この言葉の次の日は、ちゃんと笑いあえていたから。

……また明日。

僕は、声には出していないけれど、思いを込めて、メールに乗せて送った。

なんだかとっても、ノスタルジー。

スカイプの音にビビる毎日

山から家に直帰して、お姉ちゃんと遊んで、ご飯を作って、みんなと一緒にご飯を食べて、お姉ちゃんを振り切ってお風呂に入って、お風呂から上がって、お姉ちゃんを振り切って部屋に入って、パソコンの電源をつけた。

廊下でお姉ちゃんが叫んでいるが気にしないでおこう……。ゴメンねお姉ちゃん……。

すぐにスカイペをつけてネット上の親友まりもさんのログイン状態を見てみる。

「あれ……。いないや……」

この前ログインしたのは、土曜日かな？　僕二日もログインしてなかったんだね。

僕にとって二日はすごく長い。それくらい、遊び相手がいないから。

遊び相手はお姉ちゃんくらいだよ……。……廊下のお姉ちゃん、大人しくなったね。部屋に戻ったのかな？

と、ここで！

「あ！」

タイミングばっちり！

まりもさんがちょうどログインしてきた。

僕はさっそくメッセージを送った。

ユウ：こんばんは！

まりも：やあ。二日ぶりかな？

ユウ：うんそうだね

まりも：毎日のように話していたから死んでしまったのかと思ったよ。

ユウ：死んでないよ。ちょっと、バタバタしてて……

まりも：パソコンの前に座る時間が減るのはいいことだね。これから先スカイペにログインする時間が減っていくといいね

ユウ：そんな。僕まりもさんと話したいよ

まりも：嬉しいこと言ってくれるね。でも顔も名前も知らない相手をそこまで信用するのはいかがなものかな

ユウ：でもまりもさん優しいから、信用してもいいよね

と、ここで突然どんどんと隣のお姉ちゃんの部屋から物凄い音が聞こえてきた。どうやらお姉ちゃんが僕の部屋の壁をどんどんと叩いているみたいだ……。さっき相手にしなかったことを怒っているみたい……。あとで謝っておこう。今はそれよりもスカイペだ。

まりも：私は別にかまわないけれど、こんなコミュニケーションツールだけのつながりなんてすぐに切れてしまうよ。パソコンが壊れでもしたらもう連絡がつかなくなる。そんな薄いつながりに頼って

はいけないよ。君はもっと友達を作るべきだ

ユウ：うん。それは分かってるよ
ユウ：でも、実は今日親友ができたんだ！

まりも：へぇ。それはいいことだね。でも親友なんてものは突然出来る者なのかい？

ユウ：親友ができたというか、昔の友達と仲直りできたんだ！

まりも：なるほどね。それは本当によかったね。心から祝福させてもらうよ

ユウ：ありがとう！

まりも：実生活が充実してきて、私の事なんか忘れるくらい現実を楽しんでほしいものだね。私は所詮、君の想像上でしか生きられない存在だからね

……それは、僕嫌だよ。
まりもさんのことは絶対に忘れたくないよ。
だって、一番の親友なんだもん。
例え顔が分からなくっても、名前を知らなくても。
そんなの関係ないくらい好きだもん。

ユウ：まりもさんも現実だから絶対に忘れないよ。僕まりもさんのこと好きだもん

まりも：

回線の不都合か、そのあとすぐにまりもさんのログイン状態が解かれ、返事がないまま、その日のスカイペを終了した。

まりもさん。

それだけしか分からないけれど、とっても優しい人。

地球に隕石が落ちてきて、僕と誰かが生き残るのだとしたら、一番生き残っていてほしいなと僕が思ったのは、顔も名前も知らない、パソコン越しのつながりしかないまりもさんだった。

それくらい、まりもさんには支えられたから。

誰よりも、まりもさんは優しい人だから。

ライトノベルの主人公

楠さんに脅されたり、雛ちゃんと仲直りをしたり、小嶋君に怒られたり、先生に仕事を頼まれたり。

なかなか濃い日々が続いているけれど、きっともうすぐこの非日常の波は治まるよね。今まで凪すぎなほど凪いでいた僕の人生の海がこれ以上荒れることは無いよね。今日からまた落ち着いた心地のいいビーチに戻っていくはずだ。僕の海じゃあサーフィンなんかできないよ。波一つないからね。

僕はいつも通りの一日を迎える為に、いつも通りひっそりと教室に入って、いつも通り誰とも挨拶を交わすことなく、いつも通りライトノベルの世界に逃げ込む。

うん。

これが僕の毎日だよ。

昨日までが嫌だったとか、そう言うことは一切ないけれど、むしろ面白かったけれど、僕は楠さんや雛ちゃんや小嶋君や先生といった人生の主役を張れるような人たちと深くかかわれる人間じゃないんだ。

部屋の隅っこで一人本を読んでおくくらいがちょうどいいんだ。

誰も怒らせることは無いし、誰も困らせることも無い。

脇役ですらなくていい。

背景の一部で充分だよ。

僕が今読んでいるライトノベルで言うならば、僕はページ数で充分だ。イラストでも、本文でもなく、ページを教えるだけの役割。

無くてもあまり困らない、小説の一部でありながらその枠から外れている存在。時々、気になった人が目をやる位の存在でいい。僕には物語の一端を担うなんて荷が重すぎるからね。

……楠さんは主役かな？　美人だし、なんでもできるし、みんなから信用されているし、簡単に主役になれるね。あ、でも雛ちゃん

も可愛いし、何でもできるし、男前だし、簡単に主役になれるや。
あ、でも、大体主役は男の子だから、この二人はヒロインになるのかな？　だとしたら、主役は――

「おーっす」

とても大きな挨拶が聞こえてきた。
僕は顔を上げてその声の主を見てみる。

「はよー」

手を軽く上げ近くにいるみんなに挨拶を振りまいていた。
背が高くってかっこいい沼田君だ。
このクラスの男子ナンバーワン。
ライトノベルの主役は、沼田君だね。むしろ沼田君しかいないね！
席に着く沼田君を目で追う。
沼田君が座った瞬間、そこに人だかりができた。
男子も女子も、みんな集まる。
沼田君はいつもいつでも人だかりの中心だ。すごいや。
……僕なんか、背も低いし、かっこ悪いし……。
僕はいつもいつでも人だかりの外の外だ……。すごくないね……。
所詮は主役とページ数。憧れることもおこがましいことなんだよ。
僕は、人生のページ数らしく、誰にも気づかれないように本の世界に没頭した。

沼田英明（ひであき）君。

茶髪で男子にしては長い髪。でも全くうっとおしくない、完璧にセットされたような髪型。噂によれば、自然とそうなるらしい。

小嶋君と同じバスケ部で、一年生にもかかわらずレギュラーを任されるすごい人。

当然背も高く、運動神経は言わずもがな。しかも部活だけに打ち込んでいるわけではなく勉強だってお手の物。楠さんの男子バージョンと言っても過言ではないね。

凛々しい瞳に凛々しい眉。凛々しい鼻に凛々しい口元。毛先を見ても凛々しいよ。

しかも優しい性格で沼田君の悪口を聞いたことがない。完璧な女の子楠さんに対する嫉妬はよく聞くけれど、完璧な男の子沼田君に対する嫉妬は全然聞かない。なんでだろうね？

かっこよくて、勉強ができて、運動もできる。しかも平等に接することのできる才能を持っていて、みんなとすっごく仲がいい。（少し辺りを確認して楠さんがいないことを確認させていただきます……。……。うん。向こうの方で話しているね……）

沼田君は、楠さんのように『平等に親切』のお面をかぶっている訳ではなく、根っこから平等に親切。（……ご、ごめんね楠さん……。少し悪口を言ってしまいました……）

明るい性格で、一緒にいる人をいつも笑顔にしている。

当然モテる。モテまくりだよ。

一説によれば毎日二人のペースで告白に来るらしい……。多分、それは嘘だけど。

これだけ凄いのに、一切調子に乗らない。調子に乗ってもよさそうなのに、調子に乗らない。すごい。

みんなに優しくて、みんなに好かれ、みんなの笑顔を作れる沼田君。

……でも、僕はほとんど話したことがない……。

だ、だって、こんなすごい人となんか話せないよ。僕なんかが話しかけたら、沼田君のイケメンオーラが散ってしまうよ。そんな罰

当たりなことできないって。
……あぁ、憧れてしまう。
僕は雛ちゃんのお兄さん、國人君にも憧れているけれど、沼田君にも憧れている。
二人が似ている訳ではないけれど、二人に憧れている。
二人とも、『男』っていう感じがするね。
僕も男らしくなりたいよ。
少し自己嫌悪中です……。
僕が自己嫌悪になっていようがいまいが、そんなのお構いなしにチャイムが鳴り先生がやってくる。

「席につけー」

先生が教室に入ってきた。
あ、まだ朝だったんだ。
先生が教壇に立ち、教室を見渡す。

「……全員来てるな」

僕も一応全体を眺めてみる。うん。全員いるね。
先生が全員いるのを確認した後、今日の連絡事項を伝えだした。

「今日の四時間目はロングホームルームだ。そこで、今日はずっと決まらなかった副委員長を決めようと思う。その時に話し合いを早く終わらせられるように、お前たちの間で大体決めておいてくれ。決められなかった場合、俺が勝手に任命するからな。……まあ、決まらないだろうけどな」

副委員長。文化祭へ向けて忙しくなる楠さんを傍でサポートする仕事。男子全員が狙っているよ。あ、僕以外だよ。

「じゃあ、よく考えておけよ」

先生が教室を出て行った。

副委員長か……。まあ、僕には関係ないけどね。

信頼度

数学、英語、古文と終わり、いよいよ四時間目のロングホームルーム。ＬＨＲだね。

今日の話し合いは副委員長について。誰が楠さんをサポートするのかがとうとう決まる。これまで誰も一歩も譲らなかったから、多分、先生が決めることになるんだろう。

チャイムとほぼ同時に担任の先生がやってきた。

「席へつけー」

いつも同じセリフで教室に入ってくる先生。

楠さんの声で起立礼。

みんなが着席する。……決戦の火ぶたが切って落とされた。

「えーっと。それで、誰が副委員長をするのか決めたか？」

みんな無言。

「えーっと、じゃあ、やりたい奴」

先生の声に男子全員が手を挙げた。あ、僕以外だよ。……と、思ったけれど、沼田君も上げていなかったから、僕と沼田君以外だね。

「あー分かった分かった。手を下ろせ。やっぱり男子全員だな」

え、僕と沼田君は上げてないよ。

「じゃんけんでもくじでもいいが、それじゃあいい文化祭は作れな

いからな。やっぱり、俺がふさわしいと思う人間を指名したいと思う。それでいいよな」

教室内の空気は「まあ仕方ないか」と、それを受け入れた。でも、大体誰が指名されるか分かるよね。

「じゃあ、そういうわけで――」

こんなの、当然。

「――沼田」

沼田君に決まっているよ。

「え、俺っすか？」

「ああ、沼田にお願いしようと思う」

悔しがっている生徒も大勢いるけれど、でもその人たちも「まぁ、最初から分かっていたし……」とあきらめがついているようだ。クラスの雰囲気はもう沼田君が副委員長になるのを認めていた。

「沼田ならうまくやるだろう。じゃあ、沼田。頼んだぞ」

すごいや！　楠さんと沼田君の完璧コンビだ！　一体どんな文化祭になるんだろう。楽しみでしかたないや！

沼田君が先生の指名を受けて、ぽりぽりと頭を掻きながら苦笑いで言った。

「俺、あんまりやりたくないんですけど……」

「「「「「「「「「「「……え？」」」」」」」」」」」

教室中が、あっけにとられた。当然僕も。

「……いや、でも、お前以外に適役はいないぞ。どうして嫌なんだ？」

「え、だって、部活ありますし。そもそも、俺やりたいって言ってませんし」

教室中がざわめく。自分にチャンスが回ってくるかもしれない……！　と、思うことよりもまず沼田君が断ったことがみんなに衝撃を与えた。

全員どこかで分かっていたから。

沼田君と楠さんなんだろうなーって。

でも、本人が、見事に拒否をした。

「ぬ、沼田？　でもな、お前以外には、みんなをまとめられる人間いないと思うんだがな？」

「いやー、楠さんだけで充分っすよ。それに、俺以上の適役がいると思うんすよね」

「沼田以上の適役？　……ああ……なるほど……。じゃあ、沼田が指名した奴が副委員長だからな。異存はないな」

教室全体が頷く。そしてみんなちらちらと小嶋君の方に視線を送っていた。

きっと、そうだね。男子ナンバーツーの小嶋君なら、男子をまと

められると思うし楠さんとも仲良くできると思うな。
小嶋君も分かっているのか、とてもいい笑顔で胸を張って沼田君の使命を待っていた。
「じゃあ沼田。指名してくれ」
「はい。俺は佐藤がいいと思います」
沼田君の指名を受けて小嶋君が立ち上がった。
「えー、しょうがねえなぁ……沼田が言うなら俺が……って、は？」
「よし、沼田が言うのならしょうがない。小嶋が……って、は？」
「「「「「「「「……………は？」」」」」」」」
教室中が、疑問に満ちた。当然僕も。いや、僕は誰よりも疑問に満ちているね。今この瞬間、僕は世界中の誰よりも疑問を抱いていると自信を持って言えるよ。
「…………は？」
だから僕は、みんなからの視線に、一言だけ返した。それしかできなかった。
みんなより早く我に返った先生が沼田君に聞く。
「あー、沼田？　いい間違い、だよな？」
「え？　いえ？　佐藤が適任だと思いますけど」

「……こほん。えー、沼田？　文化祭は、一年に一回、合計三回あるわけだが、高校一年の文化祭は、一回しかないんだぞ？　それを、佐藤なんかに任せていいのか？」

う……。本当のことだけど、なんだか悲しいよ……。

「任せられると思うから佐藤がいいって言ったんですけど」

「……ごほんごほん！　沼田？！　落ち着いて考えてみろ！　沼田がやった方が、文化祭が楽しくなると思わないか？！　佐藤もそう思うよな！」

「あ、は、はい」

本音。クラスのみんな、当然そう思ってるよ。

……沼田君以外は。

「先生、よく言ってるじゃないっすか。部活をしていないのは佐藤だけだから佐藤頼むぞって。時間が一番とれるのが佐藤なんだから佐藤が適任だと思ったんすけど、ダメっすかね？」

「……えー、あーいや……。でも……佐藤、か？」

みんなから視線をもらう。僕は慌てて机を凝視した。

「……ほら、佐藤だってやりたくなさそうだし、無理にやらせなくても……」

「え？　佐藤、嫌なの？」

「え？！」

突然沼田君に問いかけられた！　き、緊張しちゃうよ！　そもそも話しかけてきたのが沼田君じゃなくてもこの状況なら緊張しちゃうよ！

「え、いや、僕、その……」

「佐藤！　嫌だよな！」

先生が力強く言ってくる。

「は、は、はい……」

同意させられてしまった……。でも、嫌だし、これはありがたいね。僕やりたくないし、まとめられるはずないもん。

僕は、顔を伏せ拒否の体勢をとった。これで、大丈夫だね。

それを見てかどうかは、顔が見えないからわからないけれど、沼田君が残念そうに言う。

「そっか……佐藤したくないのかー。佐藤が適任だと思うんだけどなぁ。なら――」

ふぅー……。無事に、回避、できたかな？

安心していた僕だったけれど。

最後まで、何が起こるか分からないのが、ＬＨＲらしいよ……。

誰かの声が僕の安心を壊す。

「ちょっと待てよ」

誰だろう？　と、伏せていた顔を上げてみる。
小嶋君が呆然と立ち尽くしたままだけど、今の声は違うね。じゃあ、誰だろうかと教室を見渡してみると、教室の後ろの方にもう一人立っている人物を見つけた。
雛ちゃんだった。

「おい担任。お前、いつも無理やり優大に仕事やらせてるじゃねえか。副委員長も無理やりやらせろよ」

雛ちゃんが、格好良く、立っている。

「……それとこれとは話が違うだろう」

「違わねえよ。なんで雑務は嫌がる優大にさせるのに、こういうオイシイ役を優大にやらせねえんだよ」

ひひひ雛ちゃん?!　雛ちゃんは、僕の、味方なの?!　敵なの?!　どっちなの?!　僕やりたくないんだよ!?

「あのなぁ、こんな大切な役、佐藤に勤まるわけないだろう?」

「てめえ優大を馬鹿にしてんじゃねえよ!」

「な、なんでお前がキレるんだ!」

「あったりまえだろう!　友達なんだから!　……ともだち……ですから……」

急に落ち込んだ!　どうしてだろう!

「友達なのは分かったけどな、この仕事はクラス全員に関わる仕事なんだぞ？　佐藤には荷が重すぎるだろ」

「んなのやってみねえと分かんねえだろ！」

「分かるだろ。無理無理」

「て、てめえ……！」

た、大変だ！　雛ちゃんが爆発寸前だ！　どうしよう！

「俺は佐藤ならやり遂げられると思うけどなぁー」

一触即発の教室に、沼田君の声。

爆発寸前だった雛ちゃんも、絶対否定派だった先生も沼田君を見る。沼田君は続ける。

「だって先生から任せられた仕事ちゃんとしてるし、文句の一つも言わないし。こんな責任感のあるやつ、佐藤以外にいないと思うけど」

雛ちゃんの顔が一気に明るくなった。

「沼田……。お前分かってんじゃねえか！　そうだよなぁ！」

先生の顔が一層暗くなった。

「沼田……。お前何もわかってないな。そうじゃないんだ」

「てめえ担任！　どういうことだよ！」

「あのな、佐藤に仕事を頼むと、いつも『暇じゃないんで』って言って断ろうとするんだ。それを俺がやらせているからやるだけで、責任感とは無縁の人間なんだぞ佐藤は」

……。僕、死んでもいいかな。

「てんめぇ……！　勝手に優大に仕事を押し付けておいてその言いぐさはなんだよ……！」

「本当のことだから仕方がないだろう。なんだっけか？　ご飯を作らなきゃいけないからとか、そんな言い訳をしていたな。そんなことあるわけないだろう。なんで佐藤が家族のご飯を作らなきゃいけないんだ。すぐウソついて逃げようとするんだ」

う、嘘じゃないのに！

ちょっと、本気で涙が出てきちゃった……。

「先生」

沼田君でも雛ちゃんでもない声が聞こえてきた。今度は誰だろうかと、涙目で見てみる。

「先生。佐藤君は自分でお弁当作ってきているみたいですよ」

楠さんだった。

「両親が共働きらしくって、できる事は自分でやっているようです。なら晩御飯作っていても不思議ではないはずです」

「……それが本当かどうか分からないだろ？」

「独り言で早く帰らなきゃいけないって言ってましたから、暇じゃないというのは多分嘘ではないかと」

「……そ、そうか。でも、な」

「それに私も佐藤君が適任だと思います。佐藤君なら、私の命令を……じゃなくて、私の指示をよく聞いてくれますし、一番効率がいいです」

「……」

先生が黙った。

う、う……。僕、とっても嬉しいよ……。クラスのトップスリーがみんな僕の味方だなんて……。

でも僕、副委員長したくないんですー……。

うーん、と、唸っていた先生が顔を上げ、汗を飛ばしながら提案した。

「……じゃ、じゃあ、こうしよう。佐藤に決めてもらおう。うん。そうだ。みんなが信頼している佐藤に決めれ貰えばいいだろう？自分でやるのもいいし、誰かを指名するのもいい。うん、いい考えだな」

「はぁ？　てめえ何言って――」

「佐藤！　それでいいよな！」

「え、え？」

「自分でぜひやりたいの言うのなら、自分でやってもいいし、誰か他の奴が適任だと思ったら、そいつを指名すればいい。な？　それでいいよな？」

「……はぁ」

楠さんが呆れていた。

「んなの自分がやりたいなんて言うわけねえだろ！」

雛ちゃんはキレていた。

「まあ、俺はそれでいいと思うけど」

沼田君は納得していた。

「よし、佐藤！　指名してくれ！」

え、あれ？　いつの間にか僕が指名することになってる！　僕了解してないのに！　っていうか、僕、ここまでまともな発言してないよ！　なのに問題の中心になっちゃってるよ！　なんだこれ！

「さぁ。佐藤。早く指名してくれ」

僕がやるんじゃなくて、指名することは、決定なんだ。やりたくないから、いいんだけど……。

僕は誰がベストなのか教室を見渡してみる。みんな僕に注目していたけれど、一番目についたのはずっと立ちっぱなしだった小嶋君だった。小嶋君が、僕を睨み付けていた。

眼力で訴えている。「俺を指名しろ……」と。うう……怖いよ……。

「ほら、佐藤。早くしてくれ。早く誰かを指名してくれ」

急かす先生。う、うう……ゆっくり考えさせてよ……。

……。

ううん。考えるまでも無いよ。この状況で、誰を指名しなきゃいけないかは決まってる。僕の命がかかっているんだからね。

「あ、あの……僕は……」

きっと、みんな納得してくれる。この選択以外無かったって。

「僕は……」

怒られるのは、怖いからね。

そして僕は、みんなの視線を一身に受けて言う。

「僕は、有野さんがいいと思います」

「「「「「「「……………は？」」」」」」」

全員が、僕を馬鹿にするような目で見てきた。や、やめてよ……。

そんな目で見ないでよ……。

「……あー、佐藤？　男子で、だぞ？」

「え？　で、でも、副委員長は男子って決まっている訳じゃないですし、その、有野さんがやれば、多分、みんなまとまると、思うん

です、けど……。楠さんと有野さんの二人なら、です」

僕が雛ちゃんを選んだ理由を聞き、クラス中から「あぁ～」と納得の声が聞こえてきた。よ、よかった。これでみんなに怒られなくて済むね。

……でも、一人だけ激怒していた。

「……てめえ優大コラ。仕返しかよ……！　自分が副委員長に推薦されたことがそんなに気にくわなかったのか？」

とっても怒っていた！　優しい雛ちゃんの顔じゃない！　普通に怒ってるよ！

「ち、ちち違うよ？！　仕返しとかじゃなくて、ほ、ほんとに、雛ちゃんがやった方がいいと思ったから！」

「てめえみんなの前で雛ちゃんとか呼ぶな！？」

雛ちゃんの顔が真っ赤になった。な、なんだか、僕も恥ずかしいけど、幼馴染なんだから、いいよね。

「あー。じゃあみんなも納得したみたいだし、副委員長は有野で」

「はぁあああ？！　なんで私がしなくちゃいけねえんだよ！　男どもやりたがってたじゃねえか！　私はしたくねえよ！」

熱い雛ちゃんの心に対して先生はとっても冷めきった心。もう先生の中では決まっているみたい。

「いやぁ、でも、かなりいい落としどころだと思うけどな。俺の推

薦した沼田が拒否して、沼田が推薦した佐藤が嫌がって、佐藤が推薦した有野がやる。しかも、クラス全員それで納得しているし、かなりいい選択だと思うな」

「私の意志が一切入ってねえよ！　沼田と優大の拒否が認められて私の拒否が認められないのはなんでだよっ！」

「いやぁ、みんなも有野がいいと思うよな」

みんなが無言で頷いていた。

男子達は自分以外の男子がするくらいなら女子がした方がいいだろうと思っているし、女子達は色々と思うところがあるだろうけれども最終的には雛ちゃんがするのが一番いいと思っているのだろう。

多分このまま嫌がる雛ちゃんに決まってしまうだろう。これで決まらなければきっと一生決まることは無いと思うよ。

でも、このまま決まったら僕、絶対に雛ちゃんに怒られるね。ものすごく睨まれているし、僕の命はもうないのかもしれないよ。

「……。ああ、分かった。分かったぜ担任。やってやろうじゃねえか！」

「おお、やってくれるか。助かるよ。いい文化祭になるな」

「ただ！」

雛ちゃんにはまだ何か言いたいことがあるらしく、机に手を突き先生を睨み付けていた。

「どうした？　何かあるのか？」

「……やってやる、面倒くせえけど引き受けてやる……！　けど、その代わり――」

思いっきり机をたたいた後、僕を指さしてきた。

「優大も道連れだ！　あいつも副委員長だ！」

「……。……えっ？！　ええっ、なななんで？！」

「もとはと言えば優大のせいじゃねえか！　お前も苦い思いをしろ！」

「え、ええ！？　で、でも、先生も、僕が副委員長するの嫌ですよね？　そもそも、副委員長は、一人ですよね？」

「え？　いや？　二人ですればいい」

何それ！　さっきまであんなに嫌がっていたのに！

「く、楠さんは？！　副委員長が二人もいたんじゃあ邪魔なんじゃないかな？！」

「私は全然いいよ。むしろ、便利がいいかな」

……。

まあ、そうだよね。有野さんがいるんだから、ほかに副委員長が増えたところで、問題が起きるわけないよね。多ければ多いほど、便利だよね。

……だから、誰も、拒否、しそうに、無いですね。

「じゃあ、そう言うわけで――」

そう言うわけで、僕は、いろいろな人からの恨みの視線を貰いながら、副委員長になりました……。

ロングホームルームは、最後まで何が起こるか分からないみたいです……。

平凡な人生の終わり

「まさか君が副委員長になろうとはね」

ロングホームルームが終わってすぐに楠さんに連れてこられた屋上。

教室を出るときに受けた男子全員の視線が非常に痛かったです。おまけに雛ちゃんもめちゃくちゃ睨んでました。怖かったです。

「僕もこんなことになるとは思いもしなかった……」

昨日のように、二人屋上の端に腰掛けお弁当を食べる。

「他の男子がするより、佐藤君はコントロール効く分よかったけど。それにしても、有野さんね……」

「え、やっぱり嫌なの？」

「やっぱりって何。嫌だなんて言ってないでしょ」

「あう、ゴメン……」

「君は今までそう思ってたんだね。私が有野さんのことを嫌っているって。嫌っていないって言った私の言葉を信じていなかったんだね」

「そう言うわけじゃないよ！　なんだか意味深な言い方だったから気になって……」

「ふーん。まぁ、いいでしょう。信用してもらおうだなんて思ってないし。私と君の間に信頼関係は必要ないもんね。大切なのは主従関係」

「う……。僕召使なんだ……」

「なんで人なの。おこがましいよ」

「え！　犬ですか！？」

「……」

……？　あれ？

「ぼ、僕、犬扱いなの？」

「……」

あれ……。無視されるよ……。

「そ、その……」

聞こえてないのかな……。……そんなことあり無いよね……。

「……あ、の……」

……今話しかけたらダメなのかな……。

ものすごく寂しい不安に襲われ始めたところで、やっと楠さんが

声を出してくれた。

「知ってる？」

「え、な、何が？」

「犬の無駄吠えはね、無視するに限るの」

「えっ、今僕しつけられてたの？！」

「……」

……うう……。

「そんなことより、有野さんが副委員長になったことだよ」

「あ、そうだったね」

「君はどういった目的で有野さんを推薦したの？」

「え、僕は一番いい人を選んだだけだけど……」

「ふーん？　他意はないと？」

「他意はない、です……」

そもそも、他にどんな他意が想像できるんだろう。

僕の頭の中が読まれたのか、楠さんが教えてくれる。

「たとえば、君は私と有野さんが仲が悪いと思っているようだし、

それを何とかしようと二人を近づけた、とか」

「あ、なるほど……」

「……別に誰でもよかったんだけどね……。でもまさか有野さんと君になるとは思わなかったよ。特に有野さん。絶対副委員長は男子になると思ってたんだけどね」

僕もそう思ってました。

「女子と女子もどきが副委員長になる未来は見えてなかったなー。残念」

女子もどきって、僕、だよね……。ううう……男子にカウントされていないって、すごく悲しい。

「佐藤君！」

落ち込む僕を見て、楠さんがみんなの前で使う可愛くて聞きやすい声で声をかけてきてくれた。

「佐藤君、この程度のことで落ち込まないで！　まけちゃダメ！」

「く、楠さん……」

なんて優しいんだろうと、感涙にむせびなこうと思ったら。

「目障りだから」

喜ぶ僕を見て、楠さんが僕の前で使う可愛いけれど感情のこもっ

ていない声で突き放してくれた。
ありがとうございます。

「それで、話の続きなんだけど」

「え、うん」

「少し前ね、兄とファミリーレストランに行ったの」

……さっきの話と全然関係ない話だけど……違うよって注意しなくても……いいんだよね？

「タミフルみたいな名前のお店」

「うん分かった」

「そこで面白いことがあってね」

……今自分でハードルを上げたね。

「私と兄が入店して、席に案内されたんだけど、私達にあてがわれたボックスの隣のボックス席に学生と思しき三人組が座っていたの」

「うん」

「私たちの席から遠い方のサイドに、私達が案内されている姿が見える奴が一人いたの」

「うん。一人は楠さんたちに顔を向けていて、残り二人は楠さんたちに背を向けているんだね」

「そういうこと。その私の顔を見た男をA、背を向けている二人のうち通路側の男をB、残りをCとするね」

「う、うん……」

世間話でABCのキャラ分けが必要だなんて、いったいどんな話なんだろう……。

「Aは私の顔を見て、すごく気持ちのいい気持の悪い笑顔を作ったの」

……どっち？

「私は可愛いから、見ればそう言う反応もしたくなるし仕方がないけれど。でも気持ち悪いから私はAの顔を見なくて済むようにそいつに背を向けるように、BCと背中合わせになる方に座ったのね」

「うん……」

この時点でなんだかAさんがかわいそう……。

「席についたと同時に兄がウザい話をしだしてね。興味のかけらも湧かない私は暇だったから背中の方から聞こえてくる話を盗み聞きすることにしたの」

「え？！」

「なに」

「え、いや、なんでもないです……」

この前、楠さん、電車内の携帯通話についての話の時に、「盗み聞きするのもよくないと思うし」って言っていたけれど……。今、盗み聞きすることにしたって……。

「言いたいことがあるなら言ってよ。そう言う約束でしょう。ばらすよ」

「あ、えっと、その……なんでもないです……」

「……ばらされたいみたいだね……」

「ほ、本当に、何もないの！　気にしないで！　僕、楠さんの話の続きが聞きたいなぁ！」

「……まあ、いいや。それで、後ろの話に聞き耳を立てたんだけどね、そこで思いもよらない話を聞いたの」

「思いもよらない話……」

一体、どんな話なんだろう。

「すごい話と言うより、話している人の感性に感心したっていうこと」

「どんな話だったの？」

「最初はね、くだらない話ばかりしていたの。下世話な話。あーはいはいって思ってたんだけど、Ｂが何の脈絡もなく『俺さぁこの前、

親指を結構広い範囲でやけどしちゃって』っていう話をしだしたの。どうせまた『こんな傷を負う俺すげえ』みたいな話なんでしょうって呆れていたんだけど、全然違ったの」

「どんな話だったの？」

「Bはね、そのやけどの傷を『子供のようだ』って言ったの」

「こ、子供？」

よく分からないや！

「Bがね、『このやけどができた時、すごく痛い思いをした。それからしばらく痛みが続いて、それが終わったら急に痛みが引いたんだ。でも、安心していたら突然やけどがものすごい痛みを発しだして、それを我慢してしばらくしたらまた痛みが治まって。それを繰り返して、今はもうほとんど痛くない状態。これってさ、子供を育てることと似ているんじゃないかなって。産むのに激痛を伴って、手のかかる時期を何度も乗り越えて、やっと落ち着いて。もうすぐ俺のやけどは独り立ちだ。俺は快適な老後を過ごせるというわけなんだ』。そんな内容の話をしたの」

「そ、それは、すごいね」

「まさか傷を子供に例えるなんてすごい感性を持っているでしょう。確かに言われてみればそうなのかもって、珍しく相手が男なのに感心させられてさ。しかもそのあとBが『俺、このやけどに名前つけたんだ』って言ったときには思わず吹き出しそうになったよ。さらにその名前が、空から降る『雪』に茉莉の『莉』で『雪莉』だって、『ユキリ』。なんでその名前なのかなって、少し考えて、『湯きり』

だって気づいたときにはもうおかしくて仕方がなかったよ」

「それは楽しいね。すごい人に出会ったね」

面白い人がいるなぁ。

面白くって、すごくって、僕は笑った。

「いや、まだ笑いどころじゃない」

「えっ？！」

あれ？！　面白かったのに？！

「Bがその話をしている間、私の顔を見て一目ぼれしてしまったAが、明らかに私を意識した面白ツッコミをしようと元気に空回りしているところが滑稽で面白かったっていう話」

「……」

やっぱり、最終的にAさんがかわいそうという感想で終った。

「なんなの？　Aが面白いツッコミをしたところで私はAなんかに興味を示さないよ？　それでも頑張る男の子ってなんなの？　興味があるならそっちから話しかければいいじゃない。なんで、面白ければ私のほうから話しかけるはず、とか思えるの？　そんなのあり得ないでしょ」

「う、うん……」

僕はよく分からないけれど……。

「興味のない男に話しかけたりなんかするわけないじゃない」

「そ、そうだよね」

怒ってるよ……。どうやってなだめればいいんだろう……。

「あ、そう言えば、君料理するんだっけ？」

「え？　うん」

あれ、また話が変わった……。もう怒ってないのかな。よかった。

「オーブントースター本体にさ、温める目安って書いてあるでしょ？」

「うんあるね。トーストとか、グラタンとか、おもちとか」

「私の家にあるトースターはね、トースト二分、クッキー三分、焼きもち四分、冷凍ピザ四分、グラタン八分、冷凍フライドポテト十分って書いてあるの」

「すごいね。全部覚えてるんだね」

「あんなのパッと見ただけで勝手に頭に入ってくるでしょ」

……。僕には無理です。

「おかしくない？」

「え、え？　パッと覚えられない僕が？」

「そんなのはどうでもいい」

「……ごめんなさい」

「私が言っているのはその表記の統一性のなさ」

「え？　……何か、おかしいかな……」

「おかしいでしょ。トーストは完成形でしょ？　完成前は食パンね。焼きもちも完成形。でも、冷凍ピザと冷凍フライドポテトは温める前の完成前。完成形と完成前のものが混同しているっていうのはどうなの？」

Aさんの話から変わったけど、結局最後に怒ることは変わりないんだね……。

……オーブンの表記に統一性がない、かぁ。でも……。

「う、うん……」

少しもやもやするところを残しながら、とりあえず頷いてみたけれども、

「何？　言いたいことがあるなら言ってって言ってるでしょ！」

お、怒られた！　怒鳴られた！

「あ、あ、あの、僕は、その、購入者の為を想って、分かりやすさを優先した結果だと思います！」

「分かりやすさ？」

「は、はい……」

「……」

楠さんが空を見上げて考えている。

その間に僕はドキドキを抑え込もう。あー、怖かった。

すぐに僕の方に顔を戻す楠さん。もうちょっと考えてくれてもよかったけれど。

「……確かに、混ぜた方が分かりやすいかもね。パンより、トーストの方がわかりやすいし、ピザより、冷凍ピザの方がわかりやすいもんね」

「そ、そう、だよね」

「なるほど。別に統一する必要もないし、それなら分かりやすい表記の方がいいよね」

「うん、うん」

「あれは私達の為を想ったメーカーの粋な計らいだったわけだね。ああ、疑っていた私が恥ずかしい」

ふー。よかった。もう怒ってないね。

「そう言う優しい見方ができる君ならば、もしかしたら、私の抱えている悩み、解決できるかもね……」

楠さんの悲しげな視線が屋上の地面を滑る。

「え、悩み……？」

楠さんが抱える悩み？　……もしかしたら、みんなの前でいい人を演じている理由なのかもしれない。きっと、何か深い理由があるんだ。でも、僕なんかに解決できるのかな……。む、難しいよね……。

地面をさまよっていた視線を僕に固定する。

「……あのね」

「う、うん！」

解決できようができまいが、僕にできる事は何でもしよう！

「佐藤君、四元徳って知ってる？」

「……四元徳？　ちょっと、分からない、です」

「人間が備えるべき四つの徳だっていうことなんだけど、その四つが、正義、知恵、勇気、節制なの。聞いたことない？」

「……ありません」

「だろうね」

も、もしかして、一般常識なのかな……。

「その四元徳は、『国家』に当てはめたりするらしいんだ。いわゆる哲人政治。理性のある人間が国を治めることによって、軍人は勇気をもって国を守り、市民階級――まあ、私達でいいや――私たちは節制をするようになるらしいの。正義の独裁政治と言えばいいのかな」

「へぇ……。そうなんだね」

初めて聞いたよ。

「いやいや、ちょっと待ってよって、思わない？」

「え？」

「なんで私たちが節制しなくちゃいけないの？」

「え、え？」

「これじゃあまるで私達だけが節制しなきゃいけないみたいじゃない。まずは理性のある哲人様が節制してよ。そうしたら見習うから」

「そ、う、なのかな……？」

「君はそう思わない？　いくらいい政治をしてくれても、上がやらないことを下に求めてもらってもって」

「う、うん……」

「私の解釈が間違っているのかもしれないけれどね。君はどう思う？」

「えっと、その」

……正直に言えば、何とも思いません……。だって、よく知らないんだもん……。

「……はぁ、君でも私の悩みにこたえることはできなかったか……」

「ご、ごめん」

「……。全く、佐藤君は役に立たないね」

「ごめんなさい……」

「……。……。ふぅー……」

疲れたのか、膝の上の弁当箱を両手で包み大きく息を吐いた楠さん。

「……早く食べ終わってよ」

「え、あ」

まただ！　また楠さんの話に夢中でお箸を動かしていなかった！
でも楠木さんのお弁当箱は空っぽだ。いつの間に……。

「あの、別に、僕を待たなくても、帰りたかったら帰ってもいいと思うよ？」

「なに？　邪魔だって言いたいの？　急かすなって？」

「そ、そんなこと言わないよ！　もちろん、隣にいてくれるのは嬉しいけど、待たせるのは悪いから……」

「そう思うなら早く食べて」

「あ、そうだね」

僕は箸を動かした。

……。何で待ってくれるのかな。

「……」

僕はまじまじと楠さんを見つめる。

「なに？　箸を咥えながら私を眺めても私は食べられないよ？」

「え、あ、ち、違うよ」

じっと見つめるなんて、失礼だよね。

「えっと、その、聞いてもいいかな」

「この前も言ったけど、内容も何も聞かされないでそんなこと言われてもうなずけるわけないでしょ。何を聞きたいのかを最初に言ってよ。佐藤君のそれ、絶対にいい事じゃないよ」

「あ、ごめんね……。あの、僕を待ってくれる理由を聞いてもいいかな……」

「……で、それを聞く……」

「い、嫌なら、別に言わなくても……」

言いたくないことだったのだろうか。

「言うよ。大した理由じゃないけど」

「ありがとう」

「佐藤君が草むしりをしてる時に、私先に帰っちゃったでしょ。あれ、すごく申し訳なく思ってたからさ、どうやって償おうか考えていたの。そこで、一人寂しそうにご飯を食べている佐藤君に気づいて、一緒にご飯を食べてあげようって。別にこれはただの自己満足だし、償いのつもりだから感謝とかしないでよ」

僕なんかの為に、ここまでしてくれるんだ……。優しいね、楠さんは。

「ううん。僕、嬉しいからお礼言うよ。自己満足とか、償いとか、関係ないよ。ありがとうって言いたいから、ありがとうっていう。本当にありがとう楠さん。おかげでお弁当がおいしく食べられたよ。やっぱり一人で食べるより誰かと食べた方がおいしいね」

「……。そう」

僕の答えが気に入らなかったのか、楠さんが口をとがらせ空のお弁当箱に困惑のまなざしを注いでいた。

「あ、あの、楠さん？」

気になり、声をかけてみたけれど、楠さんからそれに対する反応をもらうことはできなかった。

「……」

仕方がないので、僕は急いでご飯を食べることにする。それが一番だからね。

「ねえ、佐藤君」

「え？」

ウインナーを口に入れようとしたタイミングで話しかけられた。僕はウインナーをつまんだまま楠さんを見る。

「佐藤君、その性格を少しだけ変えたら人生楽しくなると思うよ」

「え？　え？」

空の弁当箱を弁当袋にしまい楠さんが立ち上がった。

「その、どういうこと……？」

僕を見下ろす楠さん。その眼はいつもより暖かい、気がした。

「目障りだから卑屈な性格を矯正してって言ってるの」

全然暖かくなかった！

「う、うん……。ごめんね……」

「……。じゃあ、私戻るから。ここでご飯食べる理由がばれちゃったら、もうここじゃあ食べられないね。明日からはまた一人で食べてね」

「う、うん……」

「じゃあごゆっくり」

屋上から去っていく綺麗な黒髪を眺めながら、僕は心に生まれた半透明な疑問の正体を懸命に探った。

――楠さんが屋上を出て行き、一人取り残された僕もお弁当を食べ終え教室に戻った。

そこから僕の人生は激変していく――

銀色

結局心の奥底に感じた混濁した疑問の実態をつかみきれないまま、僕は教室に戻った。

教室の扉を開け自分の席に向かっている途中、僕の歩く通路に誰かが立ち塞がり進行が妨害された。

「？」

誰だろうかと顔を上げてみてみる。

腰に手を当て僕を睨み付けるように立っていたのはメガネをかけ、髪を銀色に染めた女子。

楠さん、雛ちゃんに続く第三位の位置にいる前橋さんだ。

長い銀色を一度振り、また僕を睨み付ける。

「……あの……。何か、用？」

僕と同じくらいの背だけれど、僕を見下すように顔を上げ睨み付けているので妙に上から睨まれている気分だ。

「用事があるから君の前に立っているんです。ちょっとついてきてください」

そう言って、颯爽と教室を出て行った。

僕は訳も分からず後を追いかけた。

前橋さんはどこか落ち着いたところで話したかったようで、僕を最寄りの空き教室に迎え入れるとすぐに鍵をかけて入口を封鎖した。

……出口を封鎖したのかもしれないけれど。

鍵をかけすぐに僕の方を振り向き、苛立たしげに顔にかかったメ

ガネをかけ直した。

「君は有野さんの何なんですか？」

「え、え？」

何を言っているのかよく分からない。

「どう言うことでしょうか……」

「君と有野さんの関係を聞いているんです！　さっさと教えてくださいこの野郎って言いますよ？！」

それは、もう言っているのと変わらないんじゃないかな……。

「殴りかかる振りをしてもいいんですか！？」

振りなら、別に構わない気もするけど。

「えっと、僕は、雛ちゃんと――」

「それです！」

前橋さんがグイッと距離を詰め僕の鼻先に指を突きつけてきた。

「え、え？！」

どれ？！　まだ何も言っていないけれど！

「なんで有野さんを雛ちゃんなんかと呼んでいるんですか！　私も

呼びたいのに！」

「それは、僕が幼馴染だから……」

「羨ましい！」

メガネの下の目が威圧的な光を放った。

「えっと……」

「私だって名前で呼びたいんですよ！」

そう言いながら僕のほっぺたを両手で抓ってきた。

「い、痛いです……！」

「こうやって暴力を振るってしまうほど憎たらしい人ですね！」

暴力と言えるほどつらい仕打ちでもないけれど……。

「いったいどうやって幼馴染になったんですか？！」

「う、生まれた時から……」

「才能だって言いたいんですか？！　生意気ですね！」

「ち違うよ！　運が良かったなぁって！」

「私だって有野さんの事を『雛ちゃんっ』とか『雛さま』とか呼びたいのに、有野さんがやめろって言うから我慢しているんです！

それなのに君は！」

頬の肉をつまんだまま両腕を思いきり広げる。

「痛い！　……い、痛いよ、前橋さん……」

「うう……。有野さんのバカ……」

痛がる僕に何の関心も示さず、メガネをはずしてハンカチで目を拭っていた。

「あの、その……ごめんなさい……」

僕の謝罪を聞き、ものすごい勢いでメガネをかけて僕を睨み付けてきた。

「仲が良くてごめんなさいざまぁみろって言いましたね！？」

「言ってませんけども！？」

「ぐ、ぐぐぐぐ……！　まさかあなたのような男にバカにされるとは思ってもみませんでした！」

「バカにしていません！」

「……許しませんからね？　私から有野さんを奪ったら酷い目に遭わせる気になりますよ？」

酷い目に遭わせる気になるっていうのは、酷い目に合わせるっていうことじゃないんだよね？

「ぼ、僕は、前橋さんから雛ちゃんを奪おうだなんて、考えてないよ？」

友達が取られたくないっていうことかな。でも、友達はとるとかとらないとか、そう言うものではないと思うよ。

「……勝者の余裕ですか？　……私が寛大な心を持っていると勘違いしているようですね」

「えっと、その……」

何を言っても、僕の声は謎のフィルターを一度通ってから前橋さんの耳に入っていくようだね。

「私から有野さんを奪ったら――」

言うや否や、左手で僕の胸ぐらをつかみ逃がさないように固定し、右手に持った何かを僕の顎の少し奥辺りに突き付けた。

何を突きつけられているかは見えないので分からないが、少しとがった金属のような感触だった。

「――切り裂きますから」

「ご、ごめんなさい」

何を突きつけられているのか分からないし、何故こんなにも怒っているのか分からなかったけれど、とにかく謝ることしかできない状況だった。

「注意してくださいね。有野さんが少しでも嫌な思いをしたら」

顎の奥に添えられた何かを軽く突き立てる前橋さん。そこに鋭い痛みが走り僕は顔をしかめた。

「容赦しませんからね？」

メガネを光らせ、口元に冷たい笑みを浮かべた後、前橋さんが僕を突き飛ばした。

よろめき尻餅をついた僕。目線は自然と前橋さんの右手に吸い込まれていた。

「――」

前橋さんが握っていたのは銀色の柄のハサミだった。

前橋さんの髪の毛と同じ色のハサミ。

僕は、それを突きつけられていた。

ハサミがゆっくりと開き、勢いよく閉じる。

「刺しますから」

今までは曖昧な言い方をしていた前橋さんだったけれど、これは、言い切った。

そして、前橋さんが空き教室を出て行った。

僕は昼休みが終わるまで自分の教室に帰れなかった。

校舎裏にて

前橋未穂（みほ）さん。

銀髪ロングで身長は普通。

入学した当初は黒髪だったけれど、ある日突然銀色に染めて学校にやってきた。

それまで優等生として振舞っていた前橋さんのその行動は色々な人に衝撃を与えたが、そこまで話題になることは無かった。優等生の突飛な行動に驚きはしたものの、僕らの学校は大変自由な校風なため、髪を染めてはいけないという校則がそもそも存在しないので問題があるわけでもない。

この前の高校初めての、一学期中間テストでも普通に二番をとっていたので成績に影響が出ている訳でもないみたいだし。

ただみんな驚いただけ。

優等生にしか見えない顔つき、優等生にしか見えない佇まい、優等生にしか見えない振る舞い。でも髪の毛がすごい色。

それが衝撃だった。

でももうみんな慣れたようで今更髪の毛に触れる生徒はいない。

当然僕も見慣れたよ。

前橋さんは雛ちゃんと仲がいい。だからよく金色と銀色でセット扱いされることもあるみたい。

メガネの下には怒っているような目。雛ちゃんとは百八十度違う目。

強気な顔にまじめな性格。一見したら委員長に見える。多分これまで何度か委員長を務めてきたのだろうと思う。委員長っぽいのは見た目だけではなく、行動も委員長っぽい。楠さんがいなければ、多分前橋さんが委員長になっていただろう。

その面倒見の良さから女子達に慕われている。行動力もあり、責任感もあり、何事もそつなくこなす能力を持っている。だてにこの

凄い人たちが集まるクラスの女子三位につけている訳ではないということだね。

……ただ、男子に滅法きつい。

男子と女子とで全く扱いが違う。そのせいで、男子からの評判はあまりよくないみたい……。

もっと仲良くすればいいのになと思う。

……。僕は、うん……。嫌われているというか、憎まれていたね……。

今は放課後。

僕は昼休みに起きたショッキングな出来事からまだ立ち直れないでいた。

優等生の前橋さんが……あんなことをするなんて……。

「おい」

僕、何か悪い事したのかな。だから怒ってるのかな。

「おい！」

僕の机が叩かれた。

「え、なにごと？！」

驚き、机を叩いたその人を認めた。

「こ、小嶋君……」

「無視すんじゃねえよ」

気が立っている様子の小嶋君が高い位置から僕を睨み付けていた。

「ごめん……」

「……ちょっと来い」

「え？」

着席したままの僕を置いて小嶋君が教室を出て行った。着いて行かなきゃ怒られちゃうね。急いで小嶋君を追った。

その十分後。僕は校舎裏の地面に呆然と腰を下ろしていた。

「……いたい」

小嶋君にお腹を殴られてしまった。そのあと倒れ込んだところ、右腕を蹴り飛ばされてしまった。痛い……。

むかつくって言っていたけれど、多分僕が副委員長に小嶋君を選ばなかったことで怒りを買ってしまったのだろう。

だから、殴られて、蹴られたんだ。

しょうがないよ。

しょうがない。

この前胸ぐらをつかまれた時以上に頭がフワフワしている。お腹も腕も痛いけれど、あまり気にならない。

夢の中にいるような。

何を考えていいのか分からない。

ぼーっと座っていた。

「てめえここにいやがったか！」

突然聞こえてきた声に飛び上がり、僕はあたりを見渡した。

「優大てめえよくも私を巻き込んでくれたな！？」

雛ちゃんだ。雛ちゃんがものすごい勢いで僕に近寄ってきた。

「なんで私を副委員長なんかにしやがったんだよ！」

雛ちゃんが、座り込む僕を睨み下ろしている。

「優大のせいでなんか大変なことになっちゃったじゃねえか……！」

「あ、ごめんね」

怒られているのだろうけれど、よく分からない。

「なんなんだよ本当にお前はっ」

「うん」

今返事をしたのかどうかも、僕の中では定かでない。

「……？」

「……」

「……お前、どうした？」

「え？　なに？」

「……なんかあったのか？」

雛ちゃんが腰を落とし座り込んだままの僕と目線を合わせる。

「え？　何にもないよ？」

「何もないわけねえだろ。どうした？」

「な、何もないって」

「お前嘘つかないって言ったじゃねえか。嘘つくなよ」

「……」

睨み付けられているようだけど、その眼はとてもまっすぐで僕は見ていられなかった。

「そ、その、心配するようなことは、何もないよ」

「……本当か？」

「うん」

「……分かった」

雛ちゃんが立ち上がった。

「私が心配するようなことは何もないんだな」

「うん」

雛ちゃんを見上げる。

その時ふと、突然お昼休みの前橋さんとの一件を思い出してしまった。

「あばばばばば」

「どうした?!」

雛ちゃんが僕を心配してくれているこの状況を目撃されたら前橋さんに切り裂かれてしまうのではないでしょうか?!

「ぼぼぼ僕はだだだ大丈夫だからあああああ」

がくがく震える膝を抑え込みながら立ち上がる。

「お前全然大丈夫じゃねえよ!　やっぱり何かあっただろう!」

「ちが、違うの!　これは、違うの!　その、雛ちゃんが心配するようなことは一切ないから!」

両手を突出し否定の仕草。

「顔真っ青だぞ?!　何に怯えてるんだよ!」

「怯えてないですよ?!」

「おびえまくりじゃねえか！」

ま、まずい。不自然過ぎた！

僕は急いで話をそらす。

「その、雛ちゃんって、前橋さんと仲良いよね！？」

「……話をそらすなよ」

うぐ。

「……まあ私に言いたくないっていうんなら、別にいいけど……」

ううう……。悲しませてしまった……。ごめんね……。

「んじゃま、その話に乗ってやるか。未穂と仲がいいって？　そっか？」

「え？　あれ？　いつも一緒にいるよね」

「あー、まあ未穂がついてくるからな」

「別に仲良しじゃないの？」

「仲良しに見えるならそうなのかもしれねえなぁ」

「えっと……」

前橋さんとの温度差に戸惑いを隠しきれないよ。

「未穂の事よく知らねえしな」

「えっ、あんなにも長い時間を過ごしているのに？」

本当に、ずっと一緒にいたような気がするけれど……。

「入学してからこれまで優大の事しか見てなかったからなー」

「え？」

それは、あの時の理由を説明するタイミングをうかがっていたってことかな。そうだよね。

「他の奴らのことはあまり気にしてなかったわ。なに？　私未穂に気に入られてんの？」

「そ、そうみたいだよ？」

強烈にね。

「ふーん。あー、もしかしたらそれで髪を銀色にしてんのかな？」

「あ、そうかも」

雛ちゃんが髪を染めているから前橋さんも髪を染めたんだね。でも、それだったら同じ金色にすればいいのに。

「なんか悪い事したなぁ。悪影響与えてるじゃん、私」

「そんなことないと思うよ」

「そんなことあるんだよ」

自分の前髪をつまみそれを見る雛ちゃん。

「……やっぱり髪染めた方がいいのかなぁ？」

ちらちらと僕に視線を送ってくる。

「でも、似合ってるよ？」

「うへへ～。そうかぁ？」

「うん。でも、雛ちゃんなら何でも似合うよね。絶対」

「うへへへへ～！　んだよ照れるじゃねえか！」

ばしばしと小嶋君に蹴られた右腕を叩かれた。いたい、痛いよ。

「優大の好きな色とかあんの？　あればそれにしてみるけど」

「僕の好きな色？」

うーん。空の青い色が好きだけど、そんなすごい色は髪には合わないよね。

「えーっと、あ、楠さんみたいな綺麗な黒髪も素敵だよね」

突然不機嫌な顔になった雛ちゃん。

「……」

小嶋君に殴られたお腹にパンチをもらった。小嶋君のより、痛かったです。思わず足から崩れ落ちてしまう僕。

「な、なに、するの……？」

「別に。蚊が止まってたんだよ。蚊が」

「蚊なら、そんなに、強めに殴る必要なかったような……」

「蚊との対決はスピード勝負だろ！？　逃げられてそいつにさされてマラリアにでもなったら大変だろうが！　なんだよ、文句あんのか」

「な、無いです。危険を未然に防いでいただきありがとうございます」

「ならうだうだいうんじゃねえよ。で？　お前は若菜の黒髪が好きなんだって？」

「え、いや、その、楠さんの髪は綺麗だなぁ……とか……」

「楠さんの髪『は』綺麗ねぇ……。まあ？　染めて痛んだ私の髪なんて綺麗じゃねえんだろうけどな！」

「そ、そんなこと言ってないよ。雛ちゃんの髪も、綺麗だね」

「後付でそんなこと言われて喜べるわけねえだろ！　……そういやお前、ここ最近若菜と飯食ってるみてぇだな？」

「あ、うん」

「へー。ふーん。そうですかぁー。やっぱり男はみんな若菜みたいなやつが好きなんだなぁ。私みたいな金髪似非ヤンキーは目にも留まらねえよなー」

「ち、違うよ。そんなことないよ。雛ちゃんもモテるでしょ？」

「モテねえよこの野郎。嫌味か？」

「嫌味じゃないよ！　ほ、本心だよ！」

ところで僕はなんでこんなにも怒られているの？

「別にどーでもいーけどー」

へたり込んでいる僕を一睨みした後、背を向けて校舎裏から去って行った。

「うう……。僕皆を怒らせてるよ……」

楠さん前橋さん小嶋君雛ちゃん……。……僕、すごい人たちを怒らせているね。みんなクラス序列の上位にいる人たちだよ。底辺の僕なんかがこれらの人たちから怒りを買うなんて愚かにもほどがあるね。

妙な感慨深さを感じながら、僕も校舎裏を後にした。

夜の自室にてパソコンをいじる。もちろんスカイペだ。

ユウ：そんなこんなで僕副委員長になったんだ。

まりも：それはすごい。信頼されているね

ユウ：違うよ。僕が暇そうな人間だったからだよ。本当に信頼されている人たちがみんな断ったから一番暇な僕になったんだ

まりも：そんなに謙遜する必要はないよ。君はいい人そうだからね

ユウ：それは勘違いだよ

まりも：そうは思わないけどね

パソコンを通じてのコミュニケーションは気が楽だよね。面と向かわないで話せるからかな？　あと電話みたいに声じゃなくて文字で会話するから気が楽だっていうのもあるんだね。

僕は電話が苦手だ。

すぐに何かを言わなきゃいけないし、それなのに相手の表情が見えないから何を言っていいのか分からない。面と向かって話すのも苦手だけど、顔つき合わせて会話するのならば表情から何かしら情報が読み取れるし、メールやチャットなら考える時間があるから失礼なことを言うことも少なくなる。顔見えないし考える暇がない電

話は何よりもコミュニケーション取りづらいよね。……僕だけかもしれないけど。
　スカイペって素敵。

ユウ：副委員長って何すればいいんだろう。僕みんなをまとめられないよ

まりも：まとめるのは委員長に任せておけばいい。君は君なりに頑張るだけでいいんだよ

ユウ：僕何もがんばれないよ。何もできない

まりも：君なりにさ。何もできないなんてことないだろう

ユウ：何もできないよ。僕不器用だもん

まりも：関係ないさ。頑張る気持ちさえあればね

　頑張る気持ちか……。それすらも無いかも……。やりたくなかったから……。
　でも、頑張らなきゃいけないんだよね……。憂鬱……。
　スカイペをしていたのに、最終的にそれは嫌な気持ちをもたらしてしてきた。残念賞だよ……。

狂った木曜日

朝。学校に来た僕は真っ直ぐに小嶋君の元へ向かった。

「あ、あの、小嶋君」

「……」

「おはよう……」

「……」

「その、昨日ごめんね……。その、小嶋君を選ばなくって……」

「……」

「……あの」

がたっと、小嶋君が椅子を鳴らして勢いよく立ち上がった。

「……」

無言で僕の胸ぐらをつかんで、教室の外に連れて行かれた。
そのままトイレまで連れて行かれてお腹を殴られた。トイレの床汚いよ……。

「うぜえ」

それだけ言って僕を置いて行った。

ううう……。とても怒らせているよ……。

「また謝らなきゃ」

……。

休み時間毎に殴られました。

朝から昼まで、計五回。トイレで。

「痛いよ……」

お腹をさすりながらトイレから教室に戻る。お腹をさすってトイレから出てくるって、僕がまるでお腹を壊しているみたいだね。誰にも疑われないからいいね。普通に教室に帰れるや。……そもそも僕なんかを気にする人いないか……。

「でも、これじゃあ謝れないよ……」

許してくれないみたいだよ。どうすればいいのかな……。

まず話を聞きたいのに、殴ったらすぐにどこかへ行ってしまうんだもん……。

お腹を押さえながら教室へ行く。どうしよう。小嶋君がいたら入りづらい。

扉の前で躊躇う僕。

そんな僕に誰かが話しかけてきた。

「優大。何してんだお前」

「え？」

振り返ってみると、そこに立っていたのは綺麗な金色の髪を持つ人と綺麗な銀色の髪を持つ人。雛ちゃんと……前橋さん。

「あ、その、お腹、痛くて、保健室に、行こうかなー、とか……」

「大丈夫か？　連れて行ってやるよ」

雛ちゃんが僕の腕を自分の肩に回してくれる。が、それを見て前橋さんの顔が鬼神に変わる。

背筋が凍る。

僕は慌てて雛ちゃんから離れた。雛ちゃんが驚いたように僕を見ている。前橋さんは相変わらず鬼神。

「だだだ大丈夫ですよ！？　雛ちゃんは前橋さんと仲良くしてていいよ？！」

両掌を突出し一生懸命振る。

「無理すんなよ。ほら、行くぞ」

突き出していた右手を掴んで僕を引っ張る雛ちゃん。

前橋さんの顔は、ちょっと、言葉では、言いあらわせない、物に、なっています……。激怒と悲しみを大量に混ぜ込んだものをベースに、愛情を少し振りかけた後憎悪で蓋をし、その上にトッピングで嫌悪と不快を乗せた後アクセントとして恐怖を少し垂らした顔。

……。

とにかくすごく怒ってた。
昨日のハサミが頭をよぎり、僕は乱暴に雛ちゃんの手を振りほどいた。

「なっ……」

雛ちゃんが一瞬とても悲しそうな顔を見せて、すぐに怒った顔を作る。

「なんだよ。迷惑ってのか？」

「そ、そうじゃなくって、その、お腹痛いのは、その、ただの下痢だから……。あの、保健室じゃなくて、トイレに行けば治るから……」

「……そうかよ。ならさっさと行けよ」

「う、うん、ごめんね……」

「別に」

怒った雛ちゃんが歩き出し、前橋さんもそれに続く。廊下の少し先で、雛ちゃんの後ろを歩く前橋さんが一度こちらを振り向き、べーっと舌を出してから消えて行った。
……昨日に続いて、今日も怒らせちゃった……。謝らなきゃ……。
一度大きく息を吐いて僕は改めて教室を向く。
もういいや。教室に入るのが気まずかろうがなんだろうがどうでもいいよ。入ろう……。
扉を開け、一歩踏み出す。
突然だけれども僕はよく人とぶつかる。それはきっと、地面ばか

り見て歩いているせいで前方の確認がきちんとできていないせいなのだろう。校舎内とか狭いところだとなおさらだ。よく人とぶつかってしまう。

そんなわけで今も人とぶつかってしまう僕だった。

「あ、ご、ごめんなさい！」

慌てて頭を下げる。も、もしかして、小嶋君？　小嶋君だったら、いやだなぁ……。

「ううん。大丈夫だよ」

歌っているかのような声。顔を上げて確認するまでもなく、楠さんだ。

「す、すみません……」

一度お顔を拝見させていただき、もう一度頭を垂れる僕。

「いいっていいって。それより、佐藤君は怪我無い？」

「あ、うん。大丈夫。ごめんね、ぶつかってしまって……」

「大丈夫だよ」

にこにこと笑っている。でもその後ろで数名の女子が嫌悪感を露わにした表情で僕を睨み付けていた。な、なんでそんな目で見るの……。

「楠さん行こう。場所無くなっちゃう」

どうやらみんなは、どこかにお弁当を食べに行くようで、一人の女子がお弁当箱片手に楠さんの手を引っ張った。

「うん。それじゃあね、佐藤君」

楠さんは素敵な笑顔を僕に振りまきながら、他のみんなは弱敵を威嚇するように睨み付けながら、僕の目の前から消えた。

僕がぶつかったのは楠さんなのに……。なんでみんなから睨まれるんだろう……。

……そんなことを気にしてもお腹がいっぱいになるわけじゃないし、ご飯を食べよう。

自分の席へ向かいながら一度教室内を見渡してみる。小嶋君はみんなと楽しそうに笑っていた。僕なんか気にしてもいない。

僕は自分の席で、一人でお弁当を食べた。

お弁当を食べた後、ライトノベルを読む。

相変わらず、とても面白い。でも何故だか集中できない。

僕は窓の外に視線をやった。

窓から見える空は、屋上で見る空よりも狭くて濁っていた。

放課後に、また校舎裏に連れて行かれてお腹を殴られた。

謝ったけれど、聞いてくれなかった。代わりにうずくまる僕の左腕を蹴り飛ばした。

理由を聞いたけれど、無視された。代わりに尻餅をついた僕の胸に前蹴りをした。

小嶋君は無言で去った。

「うう……」

尻餅をついたまま胸を押さえる。今日殴られたのは六回だ。六回殴られ、二回蹴られた。

さすがに理不尽なものを感じてくる。僕が悪いのだろうけど、理由位教えてほしい。

でも、教えてくれないし聞いてくれない。

少しだけ、涙が出てきた。

でも、ここでじっとしていたらまた誰かに見つかってしまうかもしれない。

僕は土のついたお尻と胸を払いながら立ち上がる。何度か瞬きをして涙を引っ込め、とりあえず校舎内に入ることにした。

その途中、

「佐藤君」

楠さんだ。ちょうど玄関から出て帰ろうとしていたところで出会った。

「楠さん。あの、お昼はごめんね……」

「お昼？　何かされたっけ？　……まさか、君私のいないところで私の椅子であんなことや私の縦笛でこんなことを……」

「そ、そんなことしてないよ！　そもそも縦笛なんて持ってないでしょ？！」

「そうだけど、君が用意しているかもしれないでしょう。君が持ってきて、私のロッカーに入れる。それを取り出して君が舐める。擬

似リコーダー舐めを体験できるというわけだよ。……この変態」

「やってないよ……」

妄想の僕を貶すのはやめてほしいよ……。

「どうだか。やってない証拠が――」

楠さんの後ろをクラスメイトの男子歩いている。その男子が楠さんに向かって元気よく別れの挨拶。

「楠さんさようなら！」

楠さんが振り向き手を振った。

「うん！　ばいばい！」

僕に話しかけていた時とは全然違う暖かい声。

再び僕の方を見る。顔は無表情。声はやっぱり冷たい。

「縦笛事件。君がやってない証拠が無いから、私と君の社会的信用の差で君は有罪。だから君は変態。家の兄も変態」

「お兄さん、いい人だったね」

電話越しでも分かる暖かい感じ。優しそうな人だった。

「ちょっと。なんでうちの兄の性格を知っているの」

「え、この前、電話で……」

「さては調べたんだ。私の家に盗聴器をつけて兄の行動を逐一チェックしていたんだ。兄に言っておこう」

「そ、そんな！　会ったことも無い人に嫌われたくないよ！」

「なら早く転校してよ」

「い、嫌だよ」

「なら転送する。どこがいい？　雪山？　砂漠？　無人島？　ああ、残念ながら二次元の世界へは転送できませんので」

「わ、分かってるよ……」

「残念だね二次に行けないで。でも君が二次元になる方法ならあるよ？」

「え？　どういうこと？」

僕の絵を描くっていうことかな。

「まずは、プレス機を用意して、」

「その二次元のなり方はとっても嫌です！　まずの時点でごめんなさい！」

「わがままだねホント。それじゃあ友達出来ないよ」

「う、うん……ごめん」

「……どうでもいいんだけどね。時間がもったいないね」

「え、あ、ごめんね楠さん。引き止めてしまって」

「私のじゃなくて君のだよ。君の時間がもったいない」

「え？　どういう意味？」

「私はもう帰るっていう意味。じゃあね佐藤君。達者で」

「あ、うん。さようなら」

意味を教えてくれないまま、楠さんが帰って行った。
一体どういう意味だったんだろうね。今の僕には分からないや。
分からないことを考えても仕方がない。
早く帰って晩御飯の買い物をしなきゃ。
駆け足で教室へ荷物を取りに行く。
教室へたどり着いた僕。
誰もいない教室。
どこからか楽しそうな笑い声が聞こえる。みんなとっても幸せそうだ。その事実だけで僕も幸せになれるよ。
にやけながら僕は真っ直ぐに自分の席へ向かう。
そして、僕は自分の机の上のよく分からないものを見つけた。

「……」

机の上に置かれたものは細切れにされた紙切れだった。

「え？　なにこれ……」

何が何だかわからないけれど、とりあえず破片をつまみあげてみてみる。
文字の書かれた紙切れ。明朝体の文字が綺麗に並んでいた。

「……これ、ライトノベルだ」

多分僕の。
僕が読んでいた。

「……」

これはさすがに、悲しすぎた。

救いを求めるように僕は秘密基地へ向かう。
濡れる目を拭いながら山を登る。
涙が落ちることはもうないけれど、思い出したら涙がにじむ。
僕の味方は秘密基地だけだ。
生活や周りの状況なんて簡単に変わるけど、秘密基地は変わらずにいてくれる。
先の見えない未来よりも先の見えている今の方が大切。
何よりも平穏だ。波風の立たない人生が一番いい。
でも今はそれが壊れかけている。僕の未来が見えなくなってきた。
最悪だよ。
だから僕は秘密基地へ向かう。

あの日から変わらない秘密基地は僕の心の支えだ。
変わらない世界の象徴。
それが秘密基地だ。
あの日を留めたままの風景。
あの日を僕は守りたいんだ。
そして、たどり着いた秘密基地。

「う……」

楠さんがいた。
玄関で別れたはずの楠さんが秘密基地の前で暴れまわっていた。

「くそっ、この……！　あいつら、好き勝手言いやがって！」

振りまわしているものは以前持っていたプラスチックのバットではない。今度はバドミントンのラケットだ。パッと見は一生懸命素振りをしている様子。でも実際は体を動かしてもやもやを振り払おうとしているんだ。

「……佐藤君」

暴れていた楠さんが僕に気づいた。

「何しに来たの。まさか私を追ってきたの？」

「え、あ、違うよ。たまたま、僕もここに用事があって……」

「用事って何。言ってみてよ」

「う、その……」

「ほら用事がない。やっぱり私を追ってきたんだ」

「……違うよ……」

「違わない。早くどこかへ行ってよ。こんな姿人に見せる物じゃないから」

犬を遠ざけるときのように手を払う。

「違うってば。僕はここに用事があってきたんだ」

「だから用事って何」

「よ、用事は、用事……」

「ふーん。なら後にして。今は私が使ってるから」

僕は少し自棄になっていた。

だから、ありえない行動をとった。

「そ、そんなの……、楠さんが、林の奥へ行けばいいでしょ……！ここは僕の秘密基地だよ！　僕だけしか使っちゃダメなんだ！」

僕は思わず叫んでいた。

「え」

楠さんが目を丸くして僕を見ている。

僕は今自分の取った行動にハッとして、すぐに謝った。

「え、あ、ごごゴメン……。その、僕が、山を下りるから」

僕は、踵を返し来た道を駆け下りた。

まさか、脅してくる相手を怒鳴りつけてしまうなんて。僕は何を考えているのだろう。ばらされたら困るのに……。

とにかく僕は走った。

早く降りれば、今起きたことが無かったことになるような気がして。

そして追ってきた楠さんに捕まり秘密基地まで連れ戻されました。

「機嫌が悪いね。どうしたの」

隣に座る楠さんが興味深そうに僕に尋ねてくる。

「そんなこと、ないよ。ごめんね、その、僕わがままで」

「なにか嫌なことでもあった?」

「全然ないよ。その、ただここでちょっと休憩したかっただけ」

「休憩するために山登りをするなんて馬鹿でしょ。いいから、何があったのか言いなさい。ばらされたいのなら言わなくていいけど」

「ほ、本当に何もないんだ。気にしないで」

「そんな無茶な。気になるに決まっているでしょ。自己主張の少ない佐藤君が突然キレて襲い掛かってきたのだからその理由が知りたくなるのは当然の事でしょう」

襲ってなんかいないのだけれども……。

「そ、そんなことより、楠さんは何をしていたの？　また嫌なことがあったの？」

「嫌なことは毎日起きているよ。楽しい日なんてない」

「え、そんな。楠さん、みんなに慕われているし、信頼されているし、嫌なことなんてされないでしょ？」

「違う。それは違う」

「え？　どういうこと？　何が違うの……？」

嫌なことされないっていうのが、違うってことかな？

「私は、慕われているんじゃなくて、『慕わせている』の。信頼『させている』の。そこは重要なところだから」

「う、うん？　えっと、慕われているのと、慕わせているのは、違うの？」

「もちろん。慕わせるために色々と努力をしている。信頼させるために色々と仕事を引き受ける。だからストレスが溜まる。そう言う

こと。自然とみんなが慕ってくるんじゃない。私がそうさせるように仕向けているの」

「どうしてそんなことをするの？」

「だって、私のこの性格じゃあ慕われないでしょう。信頼されないでしょう」

「そ、そんなことも、無いんじゃないかな」

「無理しなくていいよ。分かってるから。私の性格はいい方じゃない。好感を持てる性格を演じなきゃ私はすっごく嫌われる。分かっていることだよ」

「そんなことないよ。楠さん、優しいもん」

「だから、それは私が優しい人間を演じているから。私はここ最近君に対して優しい行動をとってる？」

「とってる……、ような……」

「はいはい。とってませんよね。でもそれが私。それが本当の性格なの。こんな性格で人と付き合ってたら誰も近寄ってこないよ」

「で、でも、その、楠さん、綺麗、だし……」

「そうだね。綺麗だね。でも、『綺麗だから』なんだよ」

「え、え？」

「私は人より容姿が綺麗。謙遜する気も起きないほどにね。でも性格が腐ってる。美少女で、性格が腐ってる。それは周りの目に調子のってるって映るらしいよ。『あいつは可愛くって何でもできるから調子に乗っている』。ふざけるなって思うみたい」

「でも、楠さん優しいよ」

「君も私の魔性に騙された一人なんだね。これほどまでにひどく扱っているのにそれを受け入れない。現実認めちゃなよ」

「そうじゃなくて、その、この一週間、本当の楠さんと接してきたけど、やっぱり、優しいなって、思った」

「どこをどう見たらそうなるんだろうね。ドM以外喜ばないよこんな性格」

「でも、その、一緒にお弁当を食べてくれたり、草むしりしてくれたり」

「お弁当は自己満足。草むしりは手伝う私偉いってみんなに思わせたかったから」

「えっと、でも」

「でもじゃない。私は猫をかぶっている。間違いなくね」

それは、そうかもしれないけれど。

「で」

何と言おうか迷っている僕に楠さんが言う。

「私は今正直に包み隠さず君に話したわけだけど、君は何があったのかを隠すんだ？」

「え」

今日はよく自分のことを話してくれるなあって思ったけどそう言うことだったんだ……。

「何があったのか聞かせてもらおうかな」

「う、その……」

言いたくないよ。

「……あの、ちょっと、言えない……」

「不公平だよ。私がこんなにも情報を与えたのに君は何も教えないなんて。酷い話だよ」

「でも……。迷惑かけると、いけないから」

「……どうしても言いたくないんだ？」

「う、うん……」

「よーし、誰にばらそっかなー」

「や、やめてください！」

やっぱりそうきたよ！

「えーっと、じゃあ山口さん辺りにばらそうかな」

携帯を取り出し耳に当てる。

「あの、本当に、やめて……」

「あ、もしもし……。その、私、ちょっと相談があって……」

ま、まずい！　電話が繋がっちゃった！　僕は慌てて頭を下げる。

「……！　ごめんなさい！」

「うん。うん」

頷きながら楠さんが通話口に手を当てる。

「なら、何があったか教えてくれる？」

「……それは……」

「あ、山口さん？　ごめんね、急いで来てほしいところがあるんだ。うん。学校近くのコンビニ」

「ごめんなさいごめんなさい！」

楠さんが目で言う。「教えるの？」

「……僕、言いたくないです……。でも許してください……」

僕は必死に土下座をした。

言えない。

だから頭を下げて許してもらうしかない。

話し声が聞こえなくなったので顔を上げて楠さんを見てみる。

僕を睨み付けていた。

ううう……。ごめんなさい……。

しばらく僕を睨んだ後、携帯を閉じた。

「え、あれ？　通話……」

「してない。ちょっと驚かせようと思っただけ。そんなに言いたくないんだね」

「う、うん……。迷惑かけるし……」

「ふーん。じゃあ私帰る」

「あ、ご、ごめんね」

「はいはい許す許す。じゃね」

なんだか驚くほどあっけなく、楠さんが諦めてくれた。

やっぱり、優しいんだなと、改めて思った。

そういえば。

楠さんと話しただけで少し気が紛れていた。

愚痴ったわけでも慰めてもらったわけでもないのに。

少し言葉を交わしたせいで、なんだかここで落ち込タイミングを失ったというか、なんというか。

これも楠さんの力かな、とか、思ってみたり。

優しさの意味

小嶋翔君。

髪の色は明るい茶色で、普段は長い前髪をヘアピンで留めている。

バスケ部で、レギュラーではないけれどうまいみたい。

クラスの中では結構発言力が強く、結構やりたい放題。自分が望まない意見になりそうになったら、無理やり自分の意見を通そうとして話がややこしくなったりする場面もちょくちょく見かける。そういう時は沼田君が小嶋君をなだめたりしているのでやっぱり沼田君は凄い人なんだなと思う。

楠さんのことが大好きなようで、猛烈なアピールをして気を引こうとしている。多分、全男子の中で一番アピールしているのは小嶋君だ。

雛ちゃんとはあまり仲が良くないようで、言い合いのような場面を何度も見てきた。結局は小嶋君がどうでもよさそうに諦めるのだけれども、諦めるのなら最初から言い合いなんてしなければいいと思う。

男子二位の位置にいるけれど、粗暴な性格のため、かなり多くの人から恐れられている。僕も、できる事なら関わりたくない。

バスケをしているので運動は出来るみたいだけれど、勉強の方はよく分からない。この学校は上位三十人の結果が張り出されるが、前回のテストで小嶋君の名前が無かったので多分普通位なのだと思う。

それくらいしか知らない。

最近ますます思うけれど、やっぱり関わりたい人間ではない……。

痛い思いはしたくないもん。

でも、その願いは聞き入れられない。

さっきもちょっかいを出された。

朝トイレで出会って、わざと肩をぶつけられた。

怖い。
小嶋君は怖い。
何より、なんで怒っているかを教えないので怖い。
どうしていいのか分からないから。
僕に少しでも腕力があれば小嶋君を抑え込んで話を聞けるのに。
少しでもすばしっこさがあれば避けて話を聞けるのに。僕はひ弱だしどんくさいからダメだ。
小説みたいに、何か特殊な力に目覚めればいいのに。

「……」

暇な朝。
僕は机の真ん中をじっと見て時間が過ぎるのを待つ。僕、話し相手っていなかったみたい。友達と思っていた人も最近は話しかけてくれないし、僕はずっと孤独だったんだ。

「おう、優大」

孤独の中で、唯一雛ちゃんだけが話しかけてくれる。
雛ちゃんが僕の前の席に座って笑顔を見せてくれた。

「あ、おはよう、雛ちゃん。昨日は、ごめんね……」

「昨日？　……ああ、昼の。別に気にしてねえよ。そんなことより、お前今日は本読まねえんだな」

「う、うん。家に忘れてきちゃって」

本当は忘れてなんかない。持ってくる本が無かったんだ。

「ドジだなぁ。でもま、その方がいいんじゃねえの」

「え？　どうして？」

「本読んでたら話しかけづらいじゃん。暇そうにしてた方が話しかけやすいだろ」

「う、うん。でも、僕、話し相手いないから」

「私がいるじゃねえか。しんゆうだろ」

何故か親友と言う言葉を強調されたけれど、僕はとっても嬉しかった。

「うん。ありがとう」

「まあ、私は本読んでようが関係なく話しかけるんだけどな」

かっこよく笑った。どんな笑顔でも似合うなぁ雛ちゃんは。

と、ここで！

「？！」

ものすごい悪寒に襲われた！

きょろきょろと辺りを見渡す。すぐに悪寒の正体を見つけた。

「うぎぎぎぎぎ……！」

前橋さんだ！　ハムスターな勢いで爪を噛んでいる！　怖い！

「どうした？」

怯えている僕の様子を訝しんでいる雛ちゃん。

「な、にも、無いけど、その、雛ちゃんは、前橋さんと、話した方が、楽しいんじゃ、ないかな？」

僕の言葉をどう取ったのか、雛ちゃんがすぐに怒った顔を見せた。

「……なんだよ。お前は私にどっか言って欲しいってのか？」

「そ、そんなわけないよ！　僕だって雛ちゃんと仲良くしたいよ！」

「うぐっ。そそんなこと、大声で言うなよっ」

恥ずかしかったのか、真っ赤になる雛ちゃん。それを見て僕も赤くなった。少し恥ずかしいセリフだったね……。

「あ、ごめん……」

俯く僕に、雛ちゃんが明るく話しかけてくれる。

「だったらもっと話そうぜ。その方が私だって楽しいし」

「う、うん……」

気のせいかもしれないけど、視界の隅に映っている前橋さんの髪が逆立ち口から紫色のモヤが出ているよ。きっと僕の恐怖が幻覚を見せているんだね。

「優大、なんか最近元気ないけど疲れてんのか？」

心配そうに聞かれた。

疲れているというより恐れているのだけれども、言えない。

「え、あ、うん。そう。疲れてる」

「それはよくないな。気分転換が必要なんじゃねえの？」

「そうだね。でも、僕趣味とかないし、どうやって気分転換すれば……」

ニヤニヤ動画じゃあ気分転換にならないし、運動しようにも一人じゃあ楽しくないよね。

「明日土曜だし、どこか出かければいいじゃん」

「そうだね。でも、どこへ行こう……。楽しい場所どこかあるのかな。雛ちゃんいいところ知ってる？」

「んー？　そうだなー……」

と、少し考え、ちらりと僕に視線を送る。

「……あー……のさ。もしよければ、明日、私と――」

「席につけー！」

ああ、楽しかった雛ちゃんとの会話が終わってしまった……。短い間だった。

「――ちっ」

雛ちゃんが忌々しげに先生を睨み付けていた。

「またあとで話すわ」

すぐに笑顔に作り替え僕にそれを見せてぺちぺちと僕の頬を叩き、自分の席へ戻って行った。

なんだろう、なんて言いたかったんだろう。……もしかして、僕と遊んでくれるのかな。もしそうだとしたら嬉しいな。とっても楽しい休日になるね。

またあとで、か。

一体何が聞けるのかな。

でも、結局、雛ちゃんが言った『またあとで話す』の内容を聞けないまま、僕はこの日を終えることになった。

この日の小嶋君は、昨日、一昨日よりも酷かった。

休み時間の度に教室から僕を連れだし、校舎裏でいつもより酷い暴力を振るってきた。

だから雛ちゃんと話すチャンスが無かった。

放課後まで、それは続いた。

「うっ！」

小嶋君に胸ぐらをつかまれ壁に押し付けられる。苦しい。

「……」

相変わらず小嶋君は怒った顔をするだけで何も言わない。

「な、なんでこんなこと、するの……」

「うるせぇ」

「ううぅ！」

ぐっ、と押し付ける力を強める。さっきよりも苦しい……。

「……」

「や、やめて……やめてください……」

胸ぐらをつかんでいる手を引き離そうとするが、全然勝てない。筋力に差がありすぎる。

「……んでてめえなんだよ」

「苦しい……放して……！」

「なんでてめえなんだよ」

「な、何が……？」

「若菜ちゃんだけじゃなく、有野までお前のことを気に入ってるみたいじゃねえか。どうしてくれるんだよ。あぁ？」

「そ、それは、勘違い、だよ？」

僕なんかがちやほやされるわけないのに。でも、小嶋君は何も聞いてくれない。

「うるせえんだよ！」

「うぅ！」

今まで顔は殴られてこなかったけれど、今、初めて左頬を思いっきり殴られた。

そのおかげで、おかげと言ってもいいのか分からないけれど、胸ぐらをつかんでいた左手から解放された。

「う……ど、どうして、殴るの……」

「気持ちわりぃんだよ！」

「あっ！」

近寄ってきて、僕を何度も踏みつける。僕は丸まって必死に耐えた。

「ムカつくんだよ……！　お前みたいな奴は！」

「ごめんなさい、ごめんなさい！」

謝るけれど、何も聞いてくれない。

「すみませんすみません！」

聞いてくれないというより、聞こえていない。

耐えるしかないんだ。痛いけど、我慢しよう。

そう思った矢先、

「死ねよ！」

脇腹を思いっきり蹴り上げられた。

「……！」

息ができなくなった。

「……ふざけんじゃねえよ」

小嶋君が何か言っているが、聞こえない。呼吸をするだけで精一杯だ。

遠ざかる足音、あふれ出る涙、脇腹の痛み、全部気にならない。

僕はただ生きようとした。

・　・　・

十数分後。もう呼吸はできる。恐怖は去った。

けれど。

僕はどうしようもなくショックを受けていた。

怒らせているとかではない。

僕は憎まれていた。
何かの拍子に殺されてしまうのではないかと言うほどに憎まれていた。
波風を立てないよう意識して過ごしてきた僕がこれほどまで恨みを買うことになるとは思わなかった。
今までの生き方が間違っていたこと、これから先どうやって生きて行けばいいのか、僕が何をしたのか。色々と目の前に現れた問題に僕はどう対処すればいいのか分からなかった。
お腹はまだ痛い。顔もいたい。きっと青くなっている。顔を殴られたのは初めてだ。こんなに痛いだなんて。お腹を蹴られて呼吸ができなくなったのも初体験だ。本当に、死ぬかと思った。

「……」

誰もいない校舎裏で、僕は涙を流した。
どうすればいいのか分からず、とにかく泣いた。声を殺して泣いた。

「ゆうたー？」

遠くから聞こえてくる声にハッと顔を上げる。
この声は雛ちゃんだ。僕を探している。
涙を拭って立ち上がり、どうしようか辺りを見渡す。
でも結局逃げることもできず、涙目でそこに立ち尽くすことしかできなかった。

「優大ー。あー、やっと見つけた。お前なんでこんなところに……
……優大？」

「う、うん」

顔を見られたくなかったので俯いた。でも、雛ちゃんのテンションが一気に下がったので、もしかしたらばれたのかもしれない。

「……誰が犯人だ」

怖い声色で僕に問う。僕は質問の意味が理解できないふりをした。

「え、な、何が？」

僕の反応を見て雛ちゃんが怒る。

「誰だって聞いてんだよ！　誰にやられたんだ！」

「な、何も、されてない……」

駆け寄ってきて、僕の両肩を掴む。

「ふざけんじゃねえ！　どこのどいつだ！　教えろ！」

「だ、大丈夫だから。少し転んだだけだから」

「ならこの服についてる足跡は何なんだよ！　てめえ教えろ！」

がくがくと僕の体を揺らす。僕はとにかく白を切った。

「何も、無いから」

「……っ！　てめぇ……。……小嶋、か？」

「ち、違う！　……よ……」

しまった。返答がおかしなことになってしまった。

「あいつ……！　殺す……！」

荒々しく僕の肩を突き放し、どこかへ向かおうとする雛ちゃん。

「ま、まって……」

僕は慌てて雛ちゃんの腕をつかんで引き止めた。

「大丈夫。僕は何ともないから」

出来る限り明るい声で言った。

「何ともない訳ねえだろ！」

雛ちゃんが振り向き僕の顔を見る。僕の顔を見るなり悲しそうに眉を寄せた。

「お前……、ひでえ顔じゃねえか！　顔も殴られたのかよ！　あの野郎！」

しまった。顔を見せてしまった。

「なんで殴られたんだ！」

悲しそうだった顔から再び怒りの顔に戻す雛ちゃん。

「そ、その、それが、よく分からなくって……」

「あの野郎……！」

体育館がある方を睨み付け歯を食いしばる雛ちゃん。

「まって！　小嶋君だなんて言ってないよ！」

「でもそうなんだろう？！　あいつ以外にいねえ！」

「ち、違うよ……」

「違わねえ！」

雛ちゃんが怒っている。僕なんかの為に怒っている。嬉しい。

また涙がにじむ。

「痛むのか？！」

僕の両肩を包み込むように掴む。優しい手だった。

「ち、違うよ。その、雛ちゃんが怒ってくれるのが嬉しくって」

「んなの当たり前だろ……友達じゃねえか！」

「うん、うん」

僕にも味方がいるんだ。

雛ちゃん少し膝を曲げ、うつむきがちな僕を見上げるような位置から諭すように言う。

「だからな、私が代わりに仇をうってやる。誰がやったか教えてくれ」

「……それは、お、教えられない……」

「なんでだよ。お前はそれでいいのか」

「よ、よくないけど、その、雛ちゃんに迷惑かかるから」

両肩を持つ手にぐっと力が入る。

「迷惑なもんか！　お前の為ならなんだってする！」

「でも、それで雛ちゃんが傷ついたりしたら、僕、その、嫌だから……」

「……」

雛ちゃんが呆れたように曲げていた膝を伸ばし僕から手を離した。

「……はぁ……」

大きくため息をつく雛ちゃん。僕は慌てて言い訳をする。

「それに、その、これは僕が自分で解決しなきゃいけないことだし、雛ちゃんに手間かけさせられないよ」

「……そうか……」

とっても悔しそうに落ち込む雛ちゃん。

「……お前は本当に優しいな」

その姿のまま。僕のことを褒めてくれた。

「そんなこと、ないよ……」

「優しいよ。でも、どうするんだ。どうやって解決するんだ？」

犯人を聞きだすことは諦めれくれたみたいだ。

「……そ、それは……」

ど、どうしよう……。

「目には目を、歯には歯を。殴られたら殴り返せ」

「そ、そんな。僕、勝てないよ……」

「鍛えればいい」

「鍛える……」

「私が喧嘩を教えてやる！」

格好よくポーズを決めた雛ちゃん。

「そ、それは……。雛ちゃん女の子だし、危ないよ」

「優大になんか負けねえよ。舐めんじゃねえ」

「う。そ、そうだけど……。でも……」

喧嘩……。それしかないのかな……。

でも、確かにこのままじゃあ話し合いにならないし。

せめて一方的にならないくらいにならないと。

でも、雛ちゃんにケンカを教えてもらうって、雛ちゃんと殴り合うってことなのかな……。それはかなり抵抗があるよ……。万が一、万が一！　僕のパンチが当たったりなんかしたら……。

雛ちゃんは女の子だもん。僕と雛ちゃんの間に圧倒的な力の差なんてないはず。……多分。

雛ちゃんの可愛い顔を傷つけたりなんかしたら……！　それはもう死んでも死にきれないよ！

ど、どうしよう。喧嘩以外の解決方法を……。

……。

何も、思いつかない……。

多分小嶋君の暴力をいなすようなことも必要だし……。僕の弟に頼もうかな？　……でも、小学六年生だし……。じゃあ、お姉ちゃんは？　高校三年生だけど、女の子だし……。どうすればいいんだろう。……僕に、お兄ちゃんがいれば……。

……。

「……あ！」

閃いたよ！

「あん？　どうした」

突然声を上げた僕に雛ちゃんが怪訝な顔を向ける。

僕とってもいいアイデアを思いついてしまったよ！

「雛ちゃん！　僕國人君に頼むことにするよ！　國人君なら喧嘩慣れしていると思うし、僕なんかひとたまりもないよね！　喧嘩を教えてもらうには一番だよ！」

「え……」

雛ちゃんの顔が渋くなった。

「え？　どうしたの？」

何か都合の悪い事があるのかな。

「……あ、そう言えば……、國人君、何か問題抱えてるんだったよね……」

「……あ、あぁ？　まあ、そう、なんだけど……」

しまった。忘れていた。バカなことを言った。

「ご、ごめんね、無神経なこと言って……」

「いや、全然そんなことはねえよ……」

でも雛ちゃんの顔はすぐれない。……もしかして、國人君――

「……そうだな。いい機会だし兄貴に会わせるよ」

何か覚悟を決めたような面持ちで僕と向かい合っている。

「う、うん。その、大丈夫？」

「……ああ。大丈夫だぜ。むしろそのセリフは私が言うセリフだ。優大、覚悟はできてるか？」

「う、うん……」

正直、あんまり……。

一体何が起きているのか分からないけれど、いい事ではなさそうだよね。

「どんな状態でも、泣かないって約束できるか。どんな状態でも、兄貴だって、言ってくれるか」

「うん。それは、もちろんだよ。國人君がどうなっていても、僕は國人君の幼馴染だよ」

「……そっか。なら、会わせてやる……。……ショック、受けないでくれよ……」

とても悲しそうに、雛ちゃんが俯いた。

國人のケンカ指南（予定）

有野國人君。

有野さんと同じ金髪で、ツンツンとした髪型。背も高くって、顔もかっこいい。ピアスとかもたくさん開けていて、どこからどう見てもヤンキー。細い体つきからは想像できないくらい力が強くって驚くほど運動神経がよかった。

僕の幼馴染……で、年は三つ上。今は、大学生、なのかな。ここ二年くらい國人君の噂を聞かないからどうなったのか分からない。

二年前までは凄かった。

とにかく喧嘩が強くって無法者で。　町中で知らない人はいないくらいの有名人。遠くの方から喧嘩を売りに来る人がいるくらい有名だった。

『新月の災厄』

そう言う通り名がつくほど恐れられていた。

その理由。

新月の暗い夜が、一番國人君が襲われる回数が多かったから。そして、それを返り討ちにしまくっていたから。しかも、新月の夜を狙って襲ってくることが分かっていた國人君も、それを知っていて敢えて新月の夜に出歩いていたらしい。

だから、新月の夜は怪我人が大勢出る。新月の夜は巻き込まれるかもしれなからら外へ出てはいけない。そう言った理由で『新月の災厄』と言われていた。

恐ろしい。

髪を染めてから、僕は遠目から眺める事しかできなくなっていた。

でも、今日僕は國人君に会う。

喧嘩を教えてもらうんだ。

……正直に言うと、とっても怖い。

殴られるんじゃないかって。

とっても怖い。
それと、もう一つ。
雛ちゃんの様子がおかしい。
もしかしたら、國人君は大変な状態なんじゃないかなって。
その不安が当たった時は、多分僕の想像を超える状況なんだと思う。
二つの意味で怖かった。
会いたい。
けど、会うのが怖い。
でも知っておかなきゃ。
國人君が、どうなっているのか。

「……最後にもう一回聞くぞ。後悔、しないか？」

有野家の扉の前で雛ちゃんが振り返って僕を見る。

「うん」

怖いけど、もう迷いはない。國人君と対面するんだ。

「……じゃあ、開けるぞ」

雛ちゃんが、自分の家の扉に手をかけた。
う……。なんだかお腹が痛くなってきた……。

「……よし、行くぞ」

雛ちゃんがゆっくり扉を開けた。
久しぶりに訪れる雛ちゃんの家は何一つその装いを変えていなかった。玄関に入ってまず見えてくる大きなジグソーパズル。僕たち

が完成させた奴だ。大変だった。
黄土色の傘立ても、焦げ茶色の靴箱も、家の匂いも。あの日から何も変わっていなかった。
――ただ、静かだった。

「入るか」

僕を後ろに従え、雛ちゃんが家に上がる。

「お邪魔し――」

「しっ！」

お邪魔しますと、声をかけようと思った僕の口に指を当て止める。

「――え？」

「ちょっと、待ってろよ。居間に行っててくれ」

居間の方を指さし僕を促した。

「う、うん」

「私は兄貴の様子を見てくる。お前は物音を立てずに居間にいてくれ」

「うん……」

「じゃあ、少し待ってろ」

雛ちゃんが階段を上って行った。
僕は首をかしげながら居間へ。様子を見なければならない状況って、どんな状況だろう……。
何となく有野家の状況が怖いと思った僕は、居間の扉を少しだけ開け、中の様子を耳を澄ましてをうかがう。……何か、物音がする……。雛ちゃんのお父さんかお母さんかな。
ゆっくりと扉をあけ、僕は居間の中へ足を踏み入れた。

「――！」

僕はその瞬間戦慄する。

「……ちっ、何もない……！」

誰か、見たことも無い巨漢の男が部屋をあさっていたのだ。
ぼさぼさの黒髪、グレーのスウェット上下。とても大きな体がリビングと繋がっているダイニングを物色している。
ど、泥棒だ！　早く警察に！　……でも、違うかもしれないし……。お客さんだったら申し訳ないから……。

「あ、あの……」

僕は一応、声をかけて確認することにした。

「……？！」

その大きな人は、僕を確認した瞬間、ものすごい勢いで僕に襲い掛かってきた。
突然のことに思考がついていかない。

「え、え?!」

百キロはゆうに超えているだろうというその体に見合わないものすごいスピードで、僕との距離を一気に縮めた。僕は驚き一歩も動くことができなかった。

「う、うわあああああああああああああ!」

叫び声を上げる事しかできない。まずい、殺される!

まさか、久しぶりに来た友達の家で泥棒の犯行現場に出くわすなんて。非日常すぎて頭が混乱する。

当然泥棒はそんなのお構いないし僕を襲う。

棒立ち状態の僕に泥棒が飛びついてきた。

押し倒されるように居間から追い出された僕は、そのまま大きな体に押しつぶされてしまった。

「う、うぅ……」

泥棒は鼻息荒く僕の顔を見ていた。

「た、助けて……」

窒息させるためなのか、一向に僕の上からどこうとしない。

苦しい。息がしづらい。

怖い。

このまま殺されちゃうのか……。

嫌だよ。まだ死にたくない。

助けて、雛ちゃん——

助けて、國人君——

「何してんだてめえ！」

僕の祈りが届いたのか雛ちゃんが駆けつけてくれた。

「兄貴！」

雛ちゃんの声が玄関に響く。

え？！　國人君が助けに来てくれたの！？

お肉の下で首を回しきょろきょろと國人君を探すがどこにもいない。

あれ？　と状況がよく分からずにいると雛ちゃんが僕の上にいる泥棒に蹴りをお見舞いして僕を解放してくれた。

ごろごろと玄関まで転がっていく泥棒。

「大丈夫か？！　優大！」

雛ちゃんが僕の体を起こし胸に手を当ててくれる。それだけで少し楽になったような気がした。

「ごほっごほっ。う、うん、ありがとう……。……そ、そんなことより、そ、その人……！」

睨み付ける僕と雛ちゃん。

「……」

泥棒がのっそりと起き上った。

また襲ってくる！

「どどどどうしよう！　早く警察に！」

この人巨漢なのにすごく素早いからこのくらいの距離すぐに詰められちゃうよ！

「……いや、さすがに警察は」

とても余裕のある雛ちゃん。襲い掛かられても大丈夫なくらい、喧嘩に自信があるのだろう。でも、この人は泥棒で、体が大きい。武器をっていないとも限らない。絶対に雛ちゃんには勝てないよ！

「ひ、雛ちゃん！　危ないよ！　早く警察に！」

「……えーっと、あー、いやまあ……」

「ひ、雛ちゃん……？」

気まずそうな雛ちゃん。

あ、もしかして、知り合い、なのかな……。

……まさか、雛ちゃんの彼氏とか？

いやいや！　その、人を見た目で判断してはいけないけど、その、ねえ！　いきなり襲ってくるし、れ、礼儀が、なってないよ！

ダメだよ！　僕は認めないよ！

と、混乱している僕の肩に手を置き、もう一方の手で太った人を指さし言った。

「あれ兄貴」

……。

「……は？」

……は？

「いててて……。ひ、酷いだろう！　雛タン！」

……雛タン？

「雛タン言うな！　殺すぞデブ！」

「ひぅ！　そ、そんな目で睨むのはやめるのです！　いや、そんなことより、その隣の美少女は誰！？　ま、まさか、俺の為に……。ありがとう雛タン！」

「死ねデブ！　これは優大だ！　昔一緒に遊んだだろう！　男だよ！」

「優大……？　……ああ！　佐藤優大君！　久しぶりだな！」

「……」

「優大！　しっかりしろ！」

「はっ」

雛ちゃんに揺すられ現実に戻された。

「まさか優大君、いや、優大タンがこんな俺好みのショタに成長するなんて……！　僕感激！」

と言って、また飛び込んできたが雛ちゃんの足の裏がそれを阻ん

でくれた。

「優大に近づくんじゃねえこのくそデブ！」

倒れている國人君を何度も何度も踏みつける。

……まるで放課後の僕みたい。

「あぁ！　もっと、もっとお願いします雛タン！　はぁはぁ」

訂正します。させてくださいお願いします。放課後の僕とは似ても似つかないですごめんなさい。

……あの、……その。

……。

ものすごくショックだ！

誰これ！　國人君じゃないよ?!

「おいデブ。てめえさっき優大に抱き付きやがっただろう！　殺してやるから死に方選べ！」

「うーん。俺は萌え死がいいなっ！」

「よしわかった。望み通り外側からその脂肪を燃焼させて役に立たねえ醜い体を消し炭にしてやる！」

「雛タン。萌えを分かってないよ」

「分かりたくもねえよ！　役に立たねえデブは二階に上がってろ！」

「役に立たないデブか……。でもね、雛タン。俺は一人で眠れるんだよ」

「だからなんだよ！　んなもん普通じゃねえか、自慢げに言うな！」

「何を言っておるのか！　俺以外の人間はみんな嫁と二人で寝てるんだぞ！　その点一人でも眠ることもできる俺は偉いではないか！」

「なにが嫁だくそ野郎！　んなもん妄想の中だけにしろクズ！」

「妄想じゃないもん！　ちゃんと部屋にいっぱいいるもんね！　今日はタイガーちゃんと寝ようっと」

「もしかして嫁ってあれの事か?!　あの気色悪い枕カバーの事か?!」

「枕カバーなんかじゃない！　あれは魂の宿った正真正銘俺の嫁だ！　昨日だって四人で楽しくおしゃべりしたんだぞ！」

「枕カバーを人で数えるんじゃねえよ！　お前さぁ、あの気持ち悪いのをベランダに干すの止めてくれよ！　恥ずかしすぎるだろうが！」

「何を言っているのか！　俺の嫁を馬鹿にするなんていくら雛タンでも許さないぞ！　謝罪を要求する！」

「てめぇはまず親に謝れ！　次に世間に謝れ！　最後に地球に謝って死ね！」

「ぬぬぬ……。仕方がない、戦争じゃっ！」

「かかってこいよ！」

「とうっ！」

「死ね！」

「ごぶ！　ま、負けた……」

「すぐにやられるなら挑んでくるんじゃねえ！」

「くっ……。こんな時に俺の幻想世界（イデア）に潜む暗黒竜（ダークネスドラゴンルーム）が現生化するなんて！　命拾いしたな！　ヒナ！」

「黙れデブ！　って、優大！　しっかりしろ！　いろいろな機能が停止してるぞ！　現実から逃げるな！　おい兄貴！　お前のせいで優大が呆然としちまってるじゃねえか！」

「何？！　それはいかん！　人工呼吸だ！」

「はぁ？！　ちょ、て、てめえ！　う、うぎゃあああああああああ！　なにしやがるぅぅーーーーーーーー！」

ふわふわしていたけれど、体に衝撃を感じて、意識を正面に集中させると、大きな顔が、目の前にあって、僕の、唇が、奪われて――

「離れろデブ！　優大、しっかりしろ！　優大、ゆうたあああああああああ！」

――

さっきまで悪い夢を見ていた気がする……。どんな夢だったかわからないけど、なんだか、そのまま忘れていてくれた方がいいような……。

うーん？

まあ、いいや。

今見てる夢はとっても幸せだからね。

なんといえばいいのかわからないけれど、とっても幸せな気持ちになる。甘くて、あたたかい夢。

僕にもよくわからないけれど、とっても穏やかな気持ちで満たされていた。

なんだか、柔らかい感触を感じるね……。

……でも、柔らかい感触って、悪い夢の時にも感じていたような……。

……ううん。これは、それとは違う……。もっと、優しい。

ずっと感じていたい。このまま寝続けていたい……。

……。

あぁ、でも寝ている場合じゃない気がする……。

この幸せを手放したくないけれど、起きなきゃ。

僕は眠りに来たわけじゃないんだから。

――

夢から覚醒し目を開けると一番に雛ちゃんの顔が飛び込んできた。

雛ちゃんが間近で僕の様子を見ていてくれたらしい。

「あわっ」

突然のことに驚き胸の鼓動が激しくなる。こんな近くに雛ちゃんの可愛い顔があるだなんて驚くに決まっているよ。

恥ずかしかったのか、真っ赤な顔の雛ちゃんが慌てて僕から遠ざかった。

「わ、わりぃ！」

「え、う、ううん」

ドキドキする胸を押さえながら上半身を起こす。

「お、おおお前、い、いつから、起きてた？！」

「え？　今起きたばっかりだよ」

「嘘じゃねえだろうな！」

真っ赤な顔で僕を睨み付ける。

「う、嘘じゃないよ？　えっと、その、なんで？」

「別になんでもねえよバカ！　ビビらせんなよ！」

赤い顔のままそっぽを向いてしまった。怒らせてしまったのかな……。

「あの、僕何か悪い事したの……？」

「別に何もしてないっ」

機嫌が悪いよ。

無言のままではどうにも居心地が悪いので、なにか話題を見つけ

る。

「えっと、あ、そう言えば僕なんで寝てるの？」

「……え？！　……忘れてんのか……？」

驚いたように僕を見る雛ちゃん。

記憶が曖昧だけれども、思い出してみよう。

「……えーっと……雛ちゃんの家に来て、居間に向かって、おっきな人に会って、……それが國人君で、そのあと……そ、そのあと、僕は……國人君に、く、く、唇を……！」

思い出した瞬間強烈なめまいに襲われた。

な、なんてことだ！　ぼ、僕のセカンドキスが奪われてしまった！

「……ううん、夢……、かな……。うん。きっと、夢、だよね。雛ちゃん？　僕、國人君と、き、キスなんて、してないよね！」

「……」

言い辛そうに視線を外した。

「……あ、本当なんだ。現実なんだ。あはは。……あはは……。……あはあはあはあはあはあはあはあはあはあはあは」

「壊れるな！　ま、まあ、安心しろ！　その……、上書き、されたから！」

また顔が赤くなる雛ちゃん。

「？　上書きって？」

よく分からないよ？

「う、上書きは上書きだ！　細かいことは気にすんなよ！」

何故だか詳しく聞くと怒られそうな勢いなのでとりあえず事実だけを確認することにした。

「あの、僕は、國人君に、唇を奪われたんだよね？」

「……まぁ、有野に唇を奪われてた」

「？　國人君に？」

「あ、有野」

「？？？　『有野』じゃあ、雛ちゃんも容疑者に入っちゃうよ？」

「……う、うるせえな！　いいからさっさと兄貴のとこに行くぞ！　あのデブ、普段出てこねえくせにこういう時に限ってタイミング悪く部屋を出てやがる。優大がびっくりするだろう！　なあ！」

「う、うん。あの、僕、國人君とキス――」

「よーし！　さっさと行くか！」

「え、あの――」

「いいから行くぞ優大！」

腕を掴まれ引きずられるように二階へ向かった。事実を確認したかったのに……。

「ここが兄貴の部屋だ」

二階のとある一室。その部屋の前で掴まれていた腕が解放された。

「ここに、やせた國人君がいるんだね」

「おい。お前現実を見ろよ」

「ううん。まだ、あれは夢かもしれないから」

「現実から目をそらしたらまたショック受けるぞ」

「大丈夫。ここにいるのはやせた國人君だから」

「……お前がそう思いたいのなら何も言わねえけど……」

それ以外に考えられないよ！

だ、だって、僕が憧れていたのは金髪で沢山ピアスをつけていて眼光が鋭くって一目見ただけで只者じゃないと分かってしまう國人君だったんだよ！？

それなのに、夢で見た人は黒く長いぼさぼさの髪でピアスなんてつけていなくって眼光は鋭くなくて雪だるまみたいで一目見ただけでお腹いっぱいになっちゃう様な人だった！
ギャップがすごすぎるよ……。

「落ち込むなよ……」

「あ、うん……」

「……ドア開けても泣かないよな？」

「う、うん。大丈夫だよ」

ドアの前で話す僕らの耳に、部屋の中から飛んでくる國人君の声が聞こえてきた。

「遅ぇんだよこの野郎！　さっさとしろよボケ！　殺すぞ！」

こ、これだよ。これ……。これが國人君だよ！
この恐ろしい声と暴言！　遠目に見るだけしかできなくて、近寄れなくて、でも、それでも憧れを抱いていた國人君だよ！
やっぱりこの中には國人君がいるんだ！

「開けるぞ優大」

「うん！」

雛ちゃんがゆっくりと開ける。それと連動して聞こえてくる國人君の怒声の音も大きくなっていった。
ああ、國人君は誰に向かってこの罵声を浴びせているのだろう。

電話かな？　知り合いが部屋にいるのかな？
ああ！　怖いなぁ！
そして開いた扉の先で、
「早くしろよこの野郎！　ディスプレイ叩き割るぞ！」
大きな人がパソコンに向かって怒鳴り声を上げていた。
「おい優大。何かしらの感情を見せてくれ。無表情は怖い」
「……。ね、ねえ雛ちゃん。國人君はどうしちゃったの？」
現実を認めよう。これは國人君だ。二年前までの國人君は死んでしまった。
「私が聞きてえよ……」
「ふぅー……ふぅー……！　……ん？　おお、優大タン。もう調子はいいのかね」
ディスプレイを睨み付けていた國人君が椅子を回し僕らの方を見て言った。
ちらりと覗くディスプレイには、ぜ、ぜ、全裸の女の子の、絵が映し出されていた……。
「あ、はい大丈夫です」
「いきなり倒れるんだもんな。びっくりしたよ」
「ご迷惑をおかけして大変申し訳ございません。以後気をつけます」

「なになに！　俺と優大タンの仲なんだからさぁ、敬語なんてやめようよ！」

「うん、わ、わかった……。そ、その、部屋に入って大丈夫？」

「大丈夫大丈夫。むしろ早く入って欲しい！　さあ、早く、早く！」

國人君の鼻息が荒くなる。

僕は情けないことに雛ちゃんの後ろに隠れてしまった。

「大丈夫か、優大」

そんな僕に優しく声をかけてくれる雛ちゃん。

「ちょっと、ふわふわしてる……。で、でも、大丈夫です」

「無理、するなよ……」

「うん」

ちゃんと、幼馴染と接する態度を取らなきゃね。

「あ、あの、國人君？」

僕は雛ちゃんの後ろから顔を出して尋ねてみた。

「なんだいマイハニー」

ぞわぞわっと、背筋に強烈なものを感じた。

「……國人君、その、どうしちゃったの？」

まずこれを聞かなきゃ僕はもう駄目だ。

「どうしちゃったって、何のこと？　ああ、もしかして、髪の色？　面倒くさいから染めるの止めたのにゃ」

「……にゃ……。……う、ううん。その、あの、全体的に、どうしちゃったのかなーって……」

「全体的に？　ああ、そう言えば少し体重が増えちゃったかな。ま、これくらい運動すればすぐやせるし」

絶対に無理です！　昔何故だか流行った某ブートキャンプを二万回やらなきゃ痩せられないよ！

「その、体もだけど、あの、生活、と言えばいいのか、趣味と言えばいいのか……」

「生活？　何かおかしい？」

本当に分からないと言った顔でそばにあったポテトチップスを食べる國人君。

「二年前から考えたら、百八十度違う生活を送ってるよね……」

「ああ、まあそうだけど、こっちの生活が人として正しい生活だからね。いやぁ、ＤＱＮ時代が恥ずかしいよ。ぶひひひひひ」

ドキュンとか！　ぶひひとか！

「ひ、雛ちゃん?!　その、原因は?!　僕頑張って元の國人君に戻してみるよ！」

「いや、私も聞いたんだけど、訳が分かんねえんだよ」

よし、僕も聞いてみよう！

「國人君！　國人君がこの道に引きずり込まれた理由は何?!」

「引きずり込まれたんじゃなくて導かれたと言って欲しい！」

「うん！　分かった！　面倒くさいからとりあえず話を合わせる！　國人君は何によって導かれたの?!」

「ふ……。俺は、運命の人に出会っちまったのさ……」

そう言って、遠い目をして壁にかかったポスターを眺め出した。

「運命の人?」

首を傾げる僕に雛ちゃんが小声で教えてくれる。

「なんだかこいつよ、どっかの女のせいでこうなっちまったみたいなんだ。でも名前だけでどこの誰だか分からねえし、その女の姿見たことねえし……。私にはお手上げなんだよ」

「そうなんだ……。運命の人って、何だろうね」

「さっぱり分かんねえよ」

一応、聞いてみよう。

「あの、國人君。その運命の人って、どこで出会ったの？」

「ふ……。彼女とのなれそめを聞きたいか。いいだろう。教えてあげよう」

偉そうに椅子にふんぞり返り窮屈そうに足を組んで話し始めた。

「あれは、学校へ続く坂の下だったかな……。桜並木の坂の下。僕は彼女に出会ったんだ……」

あ、もうこの時点でアウトだ。國人君アウト。

「彼女はこうつぶやいていた……『あんまん』と……」

國人君は惚けた表情で壁のポスターを眺めていた。ポスターには一人の女の子の絵が描かれていた。アウト。

國人君の言葉を聞いて雛ちゃんが憎々しげに言った。

「学校の近くの桜並木ってのもどこか分かんねえし、あんまんってのも訳わかんねえし……！　畜生……どこの誰だか知らねえが、兄貴をこんなんにしやがって……！　許せねえよ！」

「……」

「もし見つけたらただじゃおかねえ。ブッ飛ばして罪を償わせてやる！」

雛ちゃん。戦えないよ。雛ちゃんとその人では、次元が違いすぎるもん。詳しく言うと、相手の人に一次元ほど足りないかな。

「ね、ねえ、雛ちゃん。僕、國人君と二人で話がしたいんだけど、いいかな？」

「え？！　お前襲われるぞ！」

「大丈夫だよ！　きっと」

「自分も信じてねえじゃねえか！　やめとけよ！」

「だ、大丈夫だよ。うん。國人君はやさしいもん」

僕の言葉を聞いて國人君が笑った。

「ぐふふ……優しくするよ……ぐふふ……」

……。うん。

にこにこと笑う國人君を指さして雛ちゃん。

「あんなキモいデブと二人きりだなんて耐えられるのか？！」

「体重とか、容姿は関係ないよ。ここにいるのは國人君だもん。多分」

「確信持ててねえけど？！　本当にいいのか？！」

「大丈夫。二人で話せれば、もしかしたら國人君をあの頃に戻すヒ

ントが得られるかもしれないよ」

「……それは、確かに欲しいけど……」

「でしょ。だから、僕に任せて」

「でも、優大が危ない目に遭うのは我慢できねえ」

「安心して、雛ちゃん。僕なら大丈夫。だから任せて」

気持ちを伝える為に雛ちゃんをまっすぐに見つめる。雛ちゃんも真っ直ぐに見つめ返してくれる。

しばらく悩んだ結果、

「……心配は尽きねえけど、分かったよ……。私は居間にいるからな、話が終わったら居間におりてきてくれ。危ないと思ったら叫び声を上げろよ。それ出来ない状況だったら、近くにあるあいつのお気に入りの人形をねじ切れ。ショックで二時間は動かなくなるから」

「えげつなっ」と國人君が驚いていた。

「うんわかった。ありがとう」

「ああ。……じゃあ、出来るだけ早く話し合いを終わらせろよ」

雛ちゃんが開け放たれていたドアをくぐって廊下に出た。

「うん」

ゆっくりと扉を閉めて行く雛ちゃん。
最後に閉じかけのドアから顔を出して言った。

「……じゃあな。叫んだら、すぐ駆けつけてやるからな」

「うんありがとう」

「……うう、またな……」

最後に悲しそうな顔を見せて、國人君の部屋のドアを完全に閉めた。

「……ぐふふ……。優大タン、やっと二人きりになれたね……」

椅子から立ち上がる音が聞こえる。

「うん」

僕は扉に向けていた体を國人君に向けた。

「って、もうすでに俺の大切なフィギュアを握りしめている?!
いつの間に！　しかも一番のお気に入りのフィギュア！」

「大丈夫。僕國人君のこと信じてるから」

「信じているのならそれを置いてほしい！」

「一応、その、保険として持っとくね」

「ぐ、ぐぶぶ……」

悔しそうに一歩後ずさった。

「あの、その、久しぶりだね」

「んー。そうでござるねえ。俺が中一になってからまともに会ってないから、えーっと、六年ぶり？」

「それくらい、かな？」

「いやぁ、優大タン。可愛く育ってまあ！　なんで早く俺に会いに来なかったのっ。運命の出会いがこんなに近くで待っているなんてお兄ちゃん衝撃！」

……。うん。

「あの、その、聞いてもいいかな」

「いいよ！　なんでも聞いて！　ちゃんとお風呂入ってるし！」

意味が分からないけれど、まずこの状況について改めて聞いてみた。

「國人君、本当にどうしちゃったの……？　昔は、アニメとか漫画とか、嫌い、だったよね……？」

椅子に座り直し國人君が笑った。

「あっはっは。いやあ、毛嫌いはよくないね。こんなに楽しいものに触れずに生きてきただなんて、人生損しちゃってたわ！　ひゃひ

やひゃ！」

楽しそうにお腹を叩く。ううう……。國人君に見えない……。

「その、運命の人に導かれたって言ったけど、それって、あの、ゲームの……」

「そうそう！　何？！　優大タンも人生やったの！？　いやぁ！　いいよねあれ！　アニメも神懸ってて涙腺崩壊しまくりだったね！　優大タンはどの子が――」

「ちょ、ちょっと待って！　落ち着いて！」

「ん？　なんだい？　他の話がしたいのかい？　しょうがないなぁ。じゃあ優大タンの嫁は――」

「待って待って待って！　一旦、ストップ！」

「……。……。……。はい、一旦ストップした。それで、優大タンの嫁は――」

「うん僕の嫁の話は置いとこう！　それで、聞きたいことがあるんだけど！」

「聞きたいこと？　もー。しょうがないなぁ。なんでも聞いてくれたまへ」

やっと落ち着いてくれた……。

「あの、ゲームが入口だったのは分かったけど、なんで、その、そ

れに手を出しちゃったの？」

「むふふ。運命って奴さ……」

「あ、あの、もうちょっと、詳しく……」

「詳しくぅ？　……しょうがないなぁ、優大タンの頼みだからダゾ！」

……。うん。

「いやぁ、それがさぁ。本当に運命の人に出会ってしまったんだぜ」

きぃきぃと椅子を鳴らしながらくるくる回る。

「……ゲームの中の？」

僕の問いかけに椅子をピタッと止めた。

「違う違う。リアルの世界の、普通の男」

「男の、人？」

「うん」

その人が原因で……。一体どうやってあのアウトローの代表國人君に美少女ゲームをやらせたんだろう。

國人君がその時の状況を話し出した。

「俺が新月になったら襲われまくってたのは知ってるよね？」

「う、うん」

『新月の災厄』だ。

「今から二年とちょっと前、荒れまくっていた俺は新月の夜に街をぶらついて襲われるのを待っていたんだ。でもその日は一向に闇討ちの奴らが現れなくて、俺はイラついていたんだー」

「闇討ちの人が来ないからイラつくって、すごいね……」

その頃はこうなるって思ってなかったんだろうね……。

「当時は喧嘩が楽しくてしょうがなかったからさぁ。だから一向に始まらないファイトにかなりイラついていた。ただ無意味に街をぶらついてたんだ。……そんなときに、前方から背の高い男が何か袋を持ってこっちに歩いてきてたんだ。ニヤニヤしながらな。それを見つけて、その時の状況と合わさってムカついた俺はそいつにケンカを売ったんだ」

「無茶苦茶だよ……」

でもそれが國人君だった。だから恐れられ、噂された。

「凄んで、胸ぐらをつかんで、腕を振りかぶって、そしていつの間にか負けていた」

「え?!」

あの國人君が?!　負け知らずで有名だったあの國人君がいつの

間にか負けていた?!

「ああ、びっくりした。驚くほどあっさり負けてしまったんだ。驚いた。無敗だった俺が、こんな優男相手に完敗するなんて……。ショックだった。ショック過ぎて泣いてしまったよ」

「えっと、もしかしてそれのせいでこの道に?」

「違う。そんなに脆くない。俺はリベンジするために毎日そいつと出会った道で待ち伏せした。襲ってくるDQNどもを適当に潰しながらそいつを待った」

……もうドキュンって言わないでほしい。

「時間を潰すみたいに人に怪我を負わせてるんだね……」

挑むのが悪いんだとは思うけど……。

「そして何日目かに、またそいつが現れた。また袋を持ってにやにやしていた。ムカついたね。俺をあんな目に遭わせておいて、にやにや笑っているだなんて。俺はそいつの前に出て、また喧嘩を売った」

その人は全く悪くないけど……。

「……その結果は……?」

「またあっさり負けちまった……。俺は悔しくて何度も何度もそいつに挑んだ。でも何度も何度も負けた……。悔しかった。負けるわけねえと思ってた俺が連敗するだなんて……」

「……」

考えられない。あの國人君が負けるだなんて……。そしてそこからこうなってしまうだなんて考えられない……。

「負けて、負けて、負けて……。いい加減、俺にも分かってきた。こいつには勝てねえなって。諦めようとしたんだ。上には上がいる。負けを認めようって。そう思って、最後にしようと思って挑んだ日……。ことは起きた」

「……」

いよいよ、理由が聞ける。

「喧嘩を始める前に、そいつが変なことを言いだしたんだ」

「変なこと？」

「ああ。なんか、『君には愛が足りない。それじゃあ俺には勝てない。これで愛を勉強すればいい。そして恋するといい』って言われて、袋から取り出された一本のゲームを手渡されたんだ……。普通なら、受け取らないか目の前で叩き割るところなんだけど、俺たちの間には変な友情が芽生えていて……。まあ、一応やってみるかって思ったんだ……。どうかしていた」

「……」

「それが、間違いだったのかもしれないニャー」

「うん。間違いだね」

ニャー言うな。

「でも俺は後悔していない。むしろ感謝している！　あの人は、俺の師だ！　先生だ！　もう一度あの人に会いたい！　でも、どこの誰かも知らないし……」

「でも会える場所なら、知っているんでしょ？」

何度もこぶしを交えているのなら、そこへ行けば会えるはず。でも会えないのは……。もしかしたら何か理由があるのかも……。

「……だって、そこまで行くの、疲れるし……」

「うん分かったありがとうフィギュアおいておくねさようならまたいつか」

「怒涛のように一言に詰め込んだね！？　優大タンもう帰るの？もっとゆっくりしていきなよ！　明日学校休んじゃおう！」

「明日はもともと休みだよ……」

曜日感覚が無くなってる……。

「ならこの部屋に泊まっていこうぞ！　ねえ、ねえ。いいよね、いいよね」

「ご、ごめんね。僕家に帰ってご飯作らないといけないから……」

「わお！　花嫁修業中ですか！？　俺の為に花嫁修業中なんですね？！　ありがとう！　いつでも嫁いでおいで！」

「さ、さようなら！」

「え？！　ちょっと待って！　こんな面白くない話だけで帰るの？！　ねえもっとオタトークで盛り上がろうよ！　ねぇ、ねえ！」

迫ってくる國人くん。

僕は慌てて國人君の部屋を出て居間へ向かった。

うう……。実は結構怖かった……。殴られるとかじゃなくて、貞操の危機の意味で……。

居間の扉を開ける。居間では雛ちゃんがうろうろと落ち着きなく歩き回っていた。僕が入ってきたのを見てホッと息をつき安心の表情を見せて近づいてきた。

「何もされてないよな……。よかった」

ぽんぽんと僕の体を触って異変がないかを調べてくれる。

「國人君は優しいから、何もしてこないよ」

多分。一晩一緒に過ごしたらどうなるか分からないけど。

「優しくねえよあんなデブ。それで、何か分かったのか？」

一歩離れて聞いてきた。

「うん。外に出たくないらしいということが分かったよ」

「……あのデブ……」

雛ちゃんが呆れたように怒っていた。

「雛ちゃん。國人君に会わせてくれてありがとう」

僕は頭を下げた。

「いや、あんなデブ何の役にも立たなかったろ。悪かったな……」

「ううん。とっても、参考になった」

「参考って、あんな奴のどこが」

「……人って、変われるんだなぁって！　だからきっと、僕も変われるよね！　自信がついたよ！」

「……なんともまあ前向きな受け取り方だな。でも役に立ったのなら私も救われる。あんなクソ兄貴でも人のためになれるんだな」

雛ちゃんが笑った。

かと思えば、突然困惑したような顔になった。

「……私は、お前に変わって欲しくねえけど……」

「え？　でも、こんな情けない性格じゃあ、雛ちゃんも友達として嫌でしょ？」

「んなことねえよ。優大が優大だから、その、好きなんだよ……。……い、今の好きってのは、その、なんだ。別に、深い意味がある

わけじゃあ、ねえぜ」

「うん。分かってるよ。勘違いできる身分じゃないもん。あ、で、でも、僕も、雛ちゃん、す、好きだよ」

「っっっ。……そ、そうか。うん。そうかそうか」

お互い顔を真っ赤にする。こういうことを面と向かって言うのは、恥ずかしいよね。

「あ、そう言えば」

恥ずかしいといえば。

「ん？　なんだ？」

「あの、僕、國人君とキス――」

僕が言い切る前にまた顔を赤くした雛ちゃんが大きな声で言う。

「そのことはもういいんじゃねえかなぁ？！　なあ！　夢ってことでいいんじゃねえかな？！」

「う、うん。そう、なのかな？」

「そうそう！　気にすんなよ！」

「うん。なら、気にしないことにするね」

「そうしろそうしろ！　別に嫌じゃねえだろ？！」

「え、い、いや、その、僕、男の人と、その、そう言うことするのは、あまり、好きじゃないけど……」

「ま、まあ、そうだよな。でも安心しろ。あれは帳消しになったはずだから」

「帳消し？　どういうこと？」

「……」

赤面して怒った顔をする。

「わ、私にかかれば、あんなの……、帳消しにすることくらいたやすいんだよ。それで納得しろっ」

「う、うん」

なんだか、これ以上聞いたら雛ちゃんの顔から火が出そうだ。

だからもう聞くのはやめよう。

倒れる前に感じた國人君の唇の柔らかさと、夢の中で繰り返し感じた柔らかさの違いに妙な違和感を覚えながら、僕は追い出されるように雛ちゃんの家を後にした。

生徒手帳に何を書けばいいのかわからない

雛ちゃんの家から帰ってきた僕は居間に入り姉と弟に帰りの挨拶をする。二人とも笑顔で返してくれた。

ソファに腰を下ろしている弟の隣に座りテレビに目を向けた。何故かお姉ちゃんがダイニングのテーブルから僕の隣に移動してきたが気にしないようにしよう。

テレビから流れてくる夕方のニュース。

隣町で交通事故があったらしい。危ないね。

次のニュースはまた隣町。よく分からないけれど、爆発があったらしい。

そのほか色々なニュースが垂れ流されてくる。

僕はぼうっとそれを聞いていた。

そしてふと思い出す。

そうだ。今日は金曜日なので制服を洗濯しなければならない。

まとわりついてくるお姉ちゃんを引きはがして制服を洗濯器の中に入れる為に洗面所に入った。

きちんとスラックスのポケットの中身を確認しなくては洗濯物が大変なことになる。

僕はポケットの中に手を突っ込み裏返した。

裏返してみて僕は首をかしげた。

おかしい。いつもポケットに入れていた生徒手帳が無い。どこかで落としてしまったのか。

いつ落としたか全くわからない。今日あったかどうかも分からない。

念のため自室に戻ってカバンの中身をひっくり返してみるが生徒手帳は見つからない。

もしかして……、昨日山を登った時に落としたのかな。

きっとそうだ。

僕は日が落ちる前に見つけようと、大急ぎで山へ向かった。

「この辺りかなぁ」

いつも登る山道を、ゆっくり辺りを見渡しながら歩いて行く。夕日に照らされ、赤く燃える炎のように生い茂っている草木。

今日はもう駄目かもしれない。すぐに暗くなる。

通り慣れた道でも暗くなれば別だ。光があるのと無いのでは別世界なのだ。

学生証は生徒手帳とは別に用意されているので、生徒手帳なんて使ったことないし使い方わからないし、別にすぐに見つけなければいけないものでもないはず。生徒手帳って、名前以外なにか人に見られてはまずいもの書かれていたっけ？

まあ、とにかく。必要のないものだろうし今日はやめようかな。

そうしよう。もう暗いしね。

そうはいっても落とし物が見つからないのは気持ち悪いのでとりあえず秘密基地までの道のりは歩いてみるのだけれども。

結局秘密基地まで行っても見つからなかった。

そもそもここで落としたわけではないのかもしれない。

あとあり得るとすれば、校舎裏か、雛ちゃんの家か。

「でも、多分ここだと思うんだけどなぁ……」

見つからなかったらどうしよう。再発行してくれるのだろうか。

再発行の手続きは？　どこですればいいのだろうか。担任の先生に言わなければいけないのかな。やだな。また何か言われる。代わ

りに学年主任の先生に聞いてみようか。
……こんなことはここじゃなくても考えられるよね。帰ろう。もう暗くなってしまう。
でも、その前に。
靴を脱ぎ、狭い秘密基地に入る。僕の身長でも屈まなければ入ることはできない。中は僕が四人集まればそれでもう満室になる狭さ。そこで寝転がってみる。
秘密基地の真ん中に突き刺した棒が天井のビニールシートを支えている。これのおかげでシートがたわまない。雨が降っても水が溜まらない。あの頃の僕らにしてみれば劇的な発明だった。
青いビニールシートが木々をすり抜けてきた赤い夕陽を浴びて紫色に光る。
もうすぐ陽が落ちる。そうなれば青も赤も関係ない。すべてが暗闇に包まれる。この山の中では、月明かりだけが味方だ。しかしそれだけでは心もとない。懐中電灯でも持って来ればよかった。天高く僕らを照らす月よりも、僕の手に握られて足元だけを照らす懐中電灯の方が心強い。今日はその心強い味方を持ってきていない。だから暗くなる前に帰ろう。
僕は体を起こし、秘密テントの中から這い出た。
靴を履こうとしゃがみ込んでいるところに、
「わっ！」
「うわあああああああああ！」
突然横かけられた大きな声に驚き腰を抜かしてしまった。
「なななに？！」
破裂しそうな勢いで収縮を繰り返す胸に手を当てながら、僕は声

の正体を確かめた。

「偶然」

楠さんだった。楠さんが後ろで手を組み立っていた。
制服ではないのでいったん家に帰って着替えてきたのだろう。
デニムのホットパンツに黒のストッキング。上はTシャツ一枚。
足はハイカットのスニーカー。初めてここで目撃したときよりは山を登りやすい格好だと思う。
いきなり声をかけられた驚きと楠さんの非日常レベルの容姿にぼうっとしている僕を楠さんが無表情で見下ろしている。

「こんなところで何してるの？」

「な、なんでもないよ」

驚いてみっともなく片手とお尻をついていた僕は、楠さんの前でこんな格好は見せられないと膝を抱えて座った。

「ふーん。でも何か探してたでしょ」

「え？　見てたの？」

僕より先に来ていたということか。

「見てたよ。また私を追ってきたのかなと思って、木の陰に隠れて見ていたんだけど、何か落とし物を探しに来たみたいだね」

「うん。生徒手帳を落としちゃって。ここかなって思ってきたんだけど、見つからなかったんだ」

「ふーん。手伝ってあげようか」

「え、いいよ。もう暗くなるし、ここに落としたんじゃないかもしれないし」

「一人じゃ見つからないでしょう。手伝ってあげるって言ってるの」

「そんな。悪いよ」

「悪くない。代わりに、私が見つけたら一つ言うことを聞いてもらうから。それでいいでしょ？」

それが狙いだったのかな。

しかし、そんな裏があろうがなかろうが、手伝ってくれることはとても助かる。ここで断る理由がない。

「あの、ううん。楠さんに、迷惑かけられないから、大丈夫だよ？一人で探せるよ？」

けれど、僕は断っていた。

一向に物探しの手伝いを認めない僕に楠さんが苛ついた表情を見せた。

「……なんで手伝うって言ってあげてるのにその好意を受け取らないの？」

「え、あの、ごめん……」

「謝るんじゃなくて、理由を聞いてるの」

怖い……。でも、楠さんの言う通りだ。

「その、楠さんに、迷惑がかかると思って」

「私から言い出したのに迷惑も何もあるわけないでしょ」

「は、はい……」

「まあ、手伝ってほしくないのなら断ればいいけど」

「そんなことは、無いけど……。手伝って欲しくないことは無いです」

「手伝ってほしいのに、君は断ったんだ。迷惑がかかるからって」

「うん……」

楠さんが大きなため息を吐いた。

「君さ、それよくないよ」

それとは、断ったことだよね。

「う、うん」

「なんでだと思う?」

「え。えっと、せっかく手伝うって言ってくれているのに、その好意を受け取らなかったことが、失礼にあたるから、かな……」

「違うよ」

「え？」

違うらしい。

「佐藤君はさ、それが優しいと思ってるんでしょ？　他人に迷惑をかけないことが、人に優しいって思ってるんでしょ？」

僕は何も言えない。何故だかは分からない。とにかく楠さんの言葉を聞く。

「それは優しさなんかじゃないよ。いや、優しさかもしれないけど、少なくとも君の行動の裏にある物は優しさなんかじゃないよ」

楠さんが体育座りをする僕と視線を合わせた。

「君のそれはね、どこからどう見てもただの臆病」

「……臆病……？」

臆病。確かに、僕は臆病だけど……。この場面でそれを言われるとは思ってもみなかった。

「君は臆病。人に手伝って貰って借りを作るのが怖い。人と支え合っていくのが怖い。それじゃあ、友達なんかできるわけないよ。距離を縮めようとしないんだから」

「……そう、なのかな……」

「そうなんだよね、残念ながら。君は傍観者で満足してていいの？　せっかく副委員長になれたんだからもっと人生楽しんでみてもいいんじゃない？」

「うん……」

僕は……。

「……あまり積極的に楽しみたいとは思っていないみたいだね。どうして？　主体的に過ごした方が楽しいでしょ？」

「うん……。それは、そうかもしれないけど……」

楠さんが僕の肩に手を置き、力を込めた。

「言いたいことがあるなら、はっきり言ってね」

「は、はい」

怒られるところだった。

「僕なんかが、自発的に行動したって、誰も楽しくないから……。だから僕は、受動的に、みんなが楽しんでいるものに巻き込まれて生きた方が、楽しいし、その、迷惑をかけないですむし……」

「迷惑ね。人を困らせたくないから自分が困る。バカみたい」

「う、うん……。自分でも、そう思う」

「自発的に生きられないから受動的に生きるね……」

楠さんが立ち上がった。

「それが楽なんでしょ。恥もかかないで済むし、傷つくことも無い。迷惑をかけたくないとか言ってるけど、結局は楽だからでしょ」

「……そう、かもしれない……」

「そうなんだよ、きっと。巻き込まれる人生はさぞ楽だろうね。流れにのるだけ。自分は一歩も動かないんだから。でもそれ、疲れないけど楽しくないでしょ」

今までそうやって生きてきた僕の人生。楽しくないか、楽しかったかと聞かれたら、迷わず僕は答える。

「楽しいよ。だって、今まで悲しい出来事が無かったから」

「楽しいと悲しくないは別物でしょう」

……そうかもしれない。

「それと」と、楠さんが言う。

「君は、自発的の反対が受動的だと思っているらしいけれど、自発的の反対は強制的なんだよ。君は今まで強制的な人生を歩まされてきたんだよ。強制的な人生が楽しいだなんて思わない。強制的に楽しまされるだなんて、考えただけでも腹が立つ」

強制的に、楽しませてくれるのならそれでいいんじゃ……。

「自発的な人生を送ってこなかった人は、無理やり人生を選ばされる。どう？　こう聞いたらちょっとは自分で人生を作る気になるんじゃない？」

楠さんが前かがみになり僕に少しだけ顔を近づけた。ちょっと緊張してしまう。

少し考えてみる。

強制的に送らされる人生。

確かに、楽しそうではない。

今まで僕は『自主的』に『受動的』に生きてきたと思っていた。

でもそれは違うらしい。

僕は『強制的』に『受動的』だったみたいだ。

……よくわからなくなってきた。

でもよくないことだけはわかる。

これじゃあ、よくないんだ。

「うん。少しは、うん。積極的になろうと思った」

「そっか」

体を起こしほんの僅かだけ笑う。

「それならよかった。だったらまず、その臆病を治さなきゃね。その臆病のせいで傷つくのを恐れるし、他人の目を気にして恥ずかしがる。言いたいことは言ってやりたいことはやる。勇気を出して、自分で人生を選ぶ。勇気を出せば人生変わるよ、漢気見せてよね」

「うん」

人生が変わる、か……。

……國人君もあれだけ変われたんだ。僕だって、変われるはず。
うん。
僕は心の中で頷いた。頑張ってみよう。
小さく決心をした僕の前でしゃがみ込み、また僕と視線を合わせて楠さんが言う。

「で、生徒手帳の話だけど。手伝うから、私が見つけたら一つ言うこと聞いてね」

「そ、それは、大丈夫です」

「……でた臆病……」

「え、いや」

一つ言うこと聞いて、と言うフレーズが怖いのは仕方がないと思うんだ。

「あーもういいよ。一人で探せばいいよ」

立ち上がり、そのまま歩いて行く。
そして立ち止まらず、思い出したように、

「あーそうそう。今アドバイスしたことでこの前の草むしりの一件はチャラね」

背を向けながら手を振りそう言う楠さん。
少し距離が開いたので僕は手でメガホンを作り大きな声で言った。

「草むしりの事って、僕全然気にしてないよー？」

「君が気にしてなかろうが関係ない。私が気にしていたんだから」

大きな声ではないけれど、とてもよく響いてくる。やっぱり楠さんは凄いと思った。

しばらく歩き、立ち止まる。

何事かな？　と思っていると、楠さんが振り返り僕を指さして言った。

「じゃあね、佐藤君。人生楽しみなよ」

楠さんが笑った。

無邪気とか、屈託がないとか、嫌味が無いとか、まだ色々と褒めたいけれど、これだけじゃあ足りないけれど、それよりなにより、一番に言いたいことは、楠さんの笑顔は、とにもかくにもけた違いに綺麗だった。

楠さんが去った後しばらく何も考えられなかった僕を誰も責めようがないはず。

その後、楠さんからのメールで正気に戻った僕。

そのままメールを開封し、『郵便受け』と書かれたメールに首をかしげたが、家に帰って郵便受けを見てみると僕の生徒手帳が入れられていた。

どうやら、楠さんが見つけて入れてくれていたらしい。

『見つけたらひとつ言うこと聞いて』というのは、勝ちが見えているから持ちかけられたことだったようだ。……承諾しなくてよかった。

デジタル・バーサタイル・ディスク

いろいろと忙しかった土日はあっという間に過ぎて行き、月曜日。
土日に色々と考えて、僕は一つ作戦を思いついた。
これがうまく行けば、小嶋君も暴力をやめてくれるはずだ。
その為に必要なのは根気と誠意と、そして勇気だ。

「小嶋君っ」

「……」

朝一番に声をかけて、不機嫌そうな目で睨み付けられる。でもひるんではダメだ。

「あ、あのっ」

「うるせえ……。てめえ、うるせえんだよ……！」

勢いよく立ち上がり、僕の胸ぐらをつかんできた。またトイレに連行されてしまうのだろう。でも、その前に。

「これ！　これを、小嶋君に！」

「あん？」

僕は一枚のＤＶＤで自分の顔を隠した。

「その、これを是非小嶋君に……」

「……」

胸ぐらをつかんでいた手を離し、僕の手からＤＶＤを奪い取る。
そしてそのままＤＶＤをへし折った。
う……。予想していたけれど、かなりショックだ……。
そのあと僕の顔めがけてそれを投げつけ、満足したのか僕をトイレに連行することなく腰を下ろした。
……うう……。また次の休み時間に挑戦しよう……。

そう言うわけで、僕の作戦はＤＶＤを見てもらうこと。
朝も合わせて、各休み時間と放課後に合計七回ＤＶＤを渡そうとしたけれど見事全部へし折られました。おまけに放課後、いつもとは違う場所、屋上で殴られました。いえ、過去形ではありません。現在進行形で殴られています。

「なんなんだよてめえは。気持ち悪いんだよ」

「……うぅ……」

胸ぐらをつかまれ睨み付けられる。

「嫌がらせか？　あ？」

「ち、違うよ」

「ならなんだよ。おら。言ってみろよ」

何度も何度もびんたされる。

「い、いたっ、その、僕、小嶋君に見てもらいたいものがあって」

「てめえから受け取ったも誰が見るか！」

思いっきり顔を殴られた。

地面に倒れ込む僕を小嶋君が睨み付けている。

「てめえ、明日も今日みたいなことしやがったらただじゃおかねえからな」

「……」

「……ちっ」

舌打ちをして早足で校舎内に戻って行った。

「うう……。踏んだり蹴ったりだよ……」

ＤＶＤは割られるし、殴られるし……。

「先行きが暗いよ……」

痛いよ……。顔とか、精神とか……。でもあきらめられない。

僕がなよなよとコンクリートの上にへたり込んでいるところ、

「……楽しそうなことしているね」

誰かが屋上の影から出てきた。

「え、あれ、楠さん？　もしかして、みてたの……？」

「うん。佐藤君が小嶋君に連れていかれたのが気になってね。後を追ってきちゃったんだ」

恥ずかしいや。情けないところを見られてしまったね。

「ごめんね。怖くって助けに行けなかったよ。痛そうだね」

苦笑いを浮かべながら近づいてきた。

「ううん。痛いけど、僕が悪いから」

僕の傍にしゃがみ込む楠さん。

「へぇ、君が悪いんだ。なんだか朝から小嶋君にまとわりついていたけれど、何をしていたの？」

「あれは、僕が小嶋君に見せたいものがあって、一生懸命勧めていたの。進め過ぎたみたいで怒られたというわけです」

「ふーん。それは佐藤君が悪いね。無理やりはよくないよ」

「う、うん。そうだね。僕も無理やりはよくないと思う。でも僕は無理やりじゃないよ。一生懸命勧め過ぎただけ」

「それは無理やり。無理やりはよくないよ。でも――」

楠さんの顔が険しいものになった。

「――暴力はもっとよくないよ」

小嶋君を責めているのかもしれない。でもそれは違う。

「暴力はよくないかもしれないけれど、小嶋君のは教育だから」

あまり勧め過ぎるなよと教えてくれているんだ。

しかし、楠さんとしては認められないらしい。

「それでもダメなものはダメ。教育だろうがなんだろうが手を出すのは罪なんだよ」

「え、でも、教育なら……」

悪い事をしたら、叩かれても文句は言えないと思うけれど。

「駄目なものはダメ。自分の身を守るため以外の、責任が持てない暴力は絶対によくない」

責任。よく分からないや。

「責任って、なに？」

「責任は責任。振るった暴力には絶対に責任が伴うの。罪を償うと言えば分りやすい？」

「罪を償う……」

教育的指導も、罪なのかな。

「子供が悪い事をした。先生は殴ろうか躊躇っています。もうこの時点でその先生はダメ。ダメダメ。戸惑う時点でダメ。戸惑うっていうことは、ＰＴＡとか親の反応が怖いってこと。親たちの反応が怖いってことは、自分の保身を考えているってこと。自分の保身を考えているってことは、子供の為に振るう暴力ではないってこと。つまり？」

「つまり？」

「つまり、先生が振るおうとしていたのは自分の為の暴力なんだよ。悪い事をした子供を叱る為じゃない。言うことを聞かせる為に振るおうとしている暴力ってこと。罪を背負うのを恐れているから戸惑うんだよ」

「そうなのかな……」

「そうなの。本当に子どもの為を想って、子供を正しく教育するためなら自分の事なんか考えずに殴るべきなんだよ。責任を持って、殴るべきなんだよ」

「責任って、どう責任をとればいいの？」

「ＰＴＡに怒られればいいよ。最悪、怒られて辞めればいいんじゃない」

「子供の為に叩いたのに、それほど重い責任を背負わなきゃいけないのかな……」

先生がかわいそうだよそれじゃあ。先生だって人生があるんだし、

職を失うのはいきすぎだよ。

「それが責任って奴だよ。暴力はそれほど重い」

暴力はいけないことだと思うけど……。そこまでなのかな。

「暴力をふるう人はその罪を知っておかなければならないんだよ」

罪。

確かに暴力は罪だ。

それを知ったうえで行使しなければならないものだと楠さんは言いたいらしい。

「えっと、でも責任が取れれば殴ってもいいの？」

「いいと思うよ」

「そうなんだ……」

それは、なんだかおかしな気もする。

「理不尽な物でもいいの？」

理不尽な暴力はどんな状況でも認められないはず。責任が取れるからって認めていいものではないよね。

しかし、楠さんは言う。

「いいよ。殴った後相手を納得せしめる責任の取り方ができるなら」

「……でも、理由がないのなら……ダメだと思う」

「まあね。だからそんなものにはとんでもない責任が伴うんじゃないかな。死刑とか」

「そ、それは、重いね……」

確かに、自分の命を懸けて理不尽な暴力をふるうのなら、まあ、よくはないけれど、その覚悟はすごいと思う。

「重いよ。暴力は重い。私は小嶋君にそんな責任が取れるとは思わないね」

「小嶋君は、責任取る必要ないよ」

だって、僕が悪いんだから。

「……はぁ……、君がそれでいいのなら、別にいいと思うけど。責任なんて言ってもあくまで被害者が納得できればいいことだし」

楠さんが立ち上がり、どうでもよさそうに手を振って屋上から出て言った。

「……何が伝えたかったんだろう？」

よく分からないや。

でも、もしかしたら僕は悪くないって言ってくれたのかもしれないね。

違うかもしれないけど……。

結局作戦初日は小嶋君に話も聞かれずに終わってしまった。

でも、僕は諦めない。

しかしＤＶＤはあと一枚しかないので明日からは口で説得して見せよう。

プッシュプッシュ

二日目。

朝一で、小嶋君の元へ向かう。向かっている途中ですでに睨み付けられているが僕はひるんでいられない。

「小嶋君。おはよう。僕小嶋君に見てもらいたいものがあるんだ」

と、言った瞬間。小嶋君が立ち上がり、僕を掴んで投げ飛ばした。派手に机をなぎ倒しながら転がる僕。いきなりのことで驚いた。

「いたた……」

痛いで済んでよかった。

「てめぇいい加減にしやがれ！　何なんだよ一体！　ぶっ殺されてえのか！？」

小嶋君がとても怒っている。

「ご、ゴメン。でも、僕小嶋君に見てもらいたいものが……」

ずんずんと近づいてくる。う、怖い……。

小嶋君が近づいて、上半身を起こしていた僕の肩に足を置き勢いよく押す。

「俺に何を見せてえんだよ。何の嫌がらせだよオラ。言ってみろよ」

そのあと何度も何度も僕のふくらはぎを蹴ってくる。痛い。

「嫌がらせなんかじゃ、ないよ。あの、僕、小嶋君に見てもらいたいアニメがあって……」

「アニメェ？　誰がそんなクソみたいなもん見るんだよ！　いい年こいてアニメアニメ気持ち悪いんだよこのオタク野郎！　さっさと死ね！」

そう吐き捨て、自分の席へ戻って行った。

「う、ごめんなさい……」

つぶやいてみても、多分聞こえてない。
ダメだ。もう話を聞いてくれそうにない。また時間をおいて話そう。

一時間目、体育。
今日の体育はバスケ。
僕は小嶋君にマンツーでマークする。

「ねえ、小嶋君」

「……イライラ」

「僕小嶋君に見てもらいたいものが、」

「イライライラ！」

う！　押された！
審判が笛を吹く。
「ファール」
こちらボールになった。

四時間目、美術。
今日の美術は校内スケッチ。
校舎内を自由に歩いていいので僕は小嶋君に着いて行った。
「ねえ、小嶋君」
「……イライラ」
「僕小嶋君に見てもらいたいものが、」
「イライライラ！」
うわ！　蹴っ飛ばされた！
これはフレグラントファウルだよ！？　……美術だけど……。

昼休み。
食堂にて。
「小嶋君」

「うるせぇ！　ンだよしつけぇな！　キモいんだよ！」

僕のしつこい勧誘に耐えかねて小嶋君が怒鳴り声を上げる。食堂中の視線が一気に集まり僕は少し恥ずかしい。

「てめえ、まだ殴られてえのか？！」

「な、殴られたくはないけど、その、僕、見てもらいたいものが……」

「お前はそれしか言えねぇのか？　昨日からそればっかりじゃねえか！　んなもん見ねえからさっさと失せろボケ！」

「ゴメン……。じゃあ、また次の休み時間に」

「くんなよ！　うっとおしいんだよお前！　諦めろよ！」

「それは、できない……」

「なんで俺に見せようとすんだよ気持ちわりぃなあ！　お前はホモか？！」

「ち、違うよ。僕はホモなんかじゃないよ」

「うるせぇオカマ野郎！　とっとと視界から消えろ！」

お腹を殴られた。

これ以上説得してもダメなようなので引き下がることにした。

ううう……。なかなか強敵だよ……。

放課後。
ホームルームが終わり真っ先に向かうところは当然小嶋君のところ。

「こじ、」

「うるさいもうくんな」

それだけ言って、僕の方をちらりとも見ずに教室から出て言った。
……今日もダメだったね……。
落ち込んじゃうなぁ……。

「お前何してんだ？」

雛ちゃんだ。
雛ちゃんが不思議そうに僕を見ている。

「休み時間の度に小嶋に話しかけに言ってたけど、どうしたんだお前。いままで散々殴られてきたんじゃねえの？」

そうです。しかも今朝は投げ飛ばされました。でも雛ちゃんはまだ学校に来ていなかったから見ていないね。
しかしここで殴られていると認めてしまってはいけない。雛ちゃんと小嶋君が喧嘩になってしまうといけないから。

「僕はただ小嶋君と仲良くなろうと思っているだけだよ」

「仲良くって、今すげー拒絶されてたぞ。無理だろ。そもそもどうやって仲良くなるってんだよ」

「うん。僕は、小嶋君の趣味とか好きな物とか分からないから、とりあえず僕の好きなものを見てもらって小嶋君にもそれを好きになってもらおうと思ってるんだ」

「相手の好きなものを作ろうってか。そりゃまあ、好きになってくれりゃあ話題は作れるよな。でも優大の好きな物ってなんだ？」

「僕の好きなものは、アニメだよ」

「……アニメ、ねぇ……。アニメとか漫画とか、あのくそデブの事しか思い浮かばねえわ。気持ち悪い」

雛ちゃんの顔が渋くなった。

「え、もしかして、雛ちゃんもアニメとか漫画が好きな人って嫌いなの？　楠さんも、小嶋君も言ってたけど、オタクって気持ち悪いって思ってる……？」

そうだとしたら、もしかしたら僕もそう思われているのかもしれない……。

でも雛ちゃんはカラッとした顔で言う。

「別に個人の趣味に口出しするつもりはねえよ。お前が好きならそれでいいじゃねえか」

「でも、今國人君の事思い浮かべて、その、気持ち悪いって……」

「それはあのデブだからだ」

「え、容姿が嫌いなの？　それは、その……あまりいいことじゃないと思う、ケド……」

「容姿じゃねえよ。私だって他人の容姿をとやかく言える顔じゃねえし」

雛ちゃんは可愛いよ？　言わないけど。

「あいつ、気持ちわりぃじゃん。行動とか。発言とか」

「……」

言葉に困ります。

「そういうところが気持ち悪いって言ってんの。だから別に優大のことは気持ち悪いとか思ってねえぜ。だから安心しろ」

「うん」

突然小声で話し出す雛ちゃん。

「……でさぁ、その、兄貴の事、出来れば周りの奴にしゃべらないで欲しいんだよな。優大なら言いふらしたりしないだろうけど、一応な」

「うん。分かった。内緒にしておくね」

「悪いな」

雛ちゃんの気持ちがわかる僕は良い人間ではないね……。

「それで、なんで小嶋と仲良くなりたいんだ？」

「え、べ、別に、理由は……」

「あー、なるほどな。殴られるから、仲良くなってそれを防ごうってか」

「殴られてなんかいないよ？」

「なんだよ。何とかしてほしかったら私に言えばいいのに。即日解決して見せるぜ」

「な、殴られてなんかいないってば！」

「はいはい。にしても、仲良くなりたいからアニメを勧めるねぇ……」

「え、まずいかな」

「別にそういうことが言いたいんじゃねえけどぉー。まぁなんだ。お前が頑張ってるのを邪魔できねえし。しっかりやれよ」

「うん。……？」

何か、気になることでもあるのかな……。

まあ、いいや。雛ちゃんに応援してもらったし頑張ろう。

作戦開始二日目はうっとうしがられて終わった。

三日目。
朝。
「小嶋君」
「……はぁ……」

昼。
「小嶋君」
「……はぁあああ……」

放課後。
「小嶋君」
「……。お前、よく諦めねえな……。しつこすぎる……」
あきれたような顔で僕を見る。
「どうしても、見てもらいたいから」

「見ねえから」
「面白いよ？」
「見ねえから」
「でも、」
「見ねえから」

カバンを持ってそそくさと教室を出て行った。
あーあ……。今日も失敗か……。
今日の結果。
三日目にして、僕はどうしようもなく呆れられたみたいだ。

四日目。
朝。

「小嶋君」

「……はっ……」

いきなり笑われた。

「ど、どうしたの？　僕何かおかしいかな」

「いや、お前色んな意味ですげえな。見ねえっての」

「でも、面白いよ」

「どうでもいいわ。見ねえよ」

小嶋君が机に突っ伏した。

これ以上話を聞いてくれそうにもないし、仕方がない。引き下がろう。

昼。

「小嶋君」

「ぶはっ。またお前かよ」

前より大きく笑われた。

「お前マジなんなんだよ」

苦笑を浮かべながら小嶋君が言う。

「見ないっつーの」

「それでも見てもらいたいんです」

「俺じゃないやつに見てもらえよ。いくら来ても無駄だって」

「で、でも……」

「もうくんなよ」

ひらひらと手を振って、男子達の輪に混ざって行った。
さすがにそこにツッコむ勇気はないね……。
僕はすごすごと自分の席へ戻った。

放課後。

「小嶋君」

「ははは。またきやがった……」

あきれ返って笑いしか出ないみたいだ。

「あの」

「みないみない。じゃあ俺部活が忙しいから。もう来るなよ。時間の無駄だぞ」

僕の話を全く聞かずに去って行った。
ううう……。ダメなのかな……。
今日の結果。
作戦開始から四日目、僕は小嶋君の笑顔が見れた。これは小嶋君との仲が進んだと言ってもいいのかもしれない。

そして、五日目。

朝。

「小嶋君」

「もう本当に勘弁してください！」

五日目は、泣かれた。

僕は小嶋君に泣いてお願いされた。

まさか、泣き顔まで見れるなんて。これはもう友達と言っても過言ではないね。

「もうマジでなんなのお前?!　嫌がらせだとしたらすげえよこれ！　すげぇ参る！　もう謝るからこれ以上付きまとうのはやめてくれ！　悪かった！　色々と悪かった！」

机に手をついて何度も頭を下げてくる。

「そんな。僕謝って欲しいわけじゃなくて、僕のおすすめアニメを、」

「アニメなんか興味ないっつーの！　佐藤の情熱は十分伝わってきた！　うん、すごいなお前は。これからもがんばれ。いい趣味だと思うぜ。でも俺には勧めてくるな。分かったか?」

「……。僕のお勧めはね、」

「やめてくれぇぇぇぇぇ！」

と叫んだあと、椅子の上でぐったりしてしまった小嶋君。

え?!　なんでこんなに精神が衰弱してしまっているの?!　僕

精神攻撃してたっけ？！

「悪かった……俺が悪かった……」

ぶつぶつと口から何かが漏れているけどよく聞こえない。

「あの、これ。僕のおすすめアニメ」

コピーした最後の一枚。これが割られたらまたコピーする作業で土日を潰さなければならない。

小嶋君が僕の持っているＤＶＤを一瞬見て首を振った。

「俺、見ねえって……。見ないから、そいつをしまってくれ……」

「でも、とっても面白いんだよ？　きっと小嶋君も気に入るよ」

「……やめてくれー……かんべんしてくれー……」

死にそうだった。

ど、どうしよう。こんな姿を見せられたら僕困ってしまうよ。もうこれじゃあ勧められない。まるで僕がいじめているみたいだよ。

どうしようかと、おろおろしているところに誰かが声をかけてくる。

「オハヨウ優大。ン、ドウシタンダ？」

雛ちゃんが何故か棒読みでやってきた。

「あ、おはよう雛ちゃん」

「優大、イマハ、ドウイウ状況ナンダ？」

そんなことより雛ちゃんの状況の方が気になるよ。

「えっと、僕が、小嶋君にアニメを勧めているんだけど、小嶋君が遠慮しているっていう状況」

「ヘェ、……ダッたらぁ、私が見てやるよ！　な！？　優大のおすすめアニメ見てみたいなぁ！　いいだろ？　私に貸してくれ！　優大のおすすめアニメを私に貸して仲良くなろうぜ！」

小嶋君に貸そうと思って焼いてきたけど……、まあ、仕方がないよね。小嶋君が見たくないっていうんだもん……。わざわざコピーしたものが誰にも見てもらえないなんて悲しいし、見たがっている雛ちゃんに貸そう。うう……、作戦失敗だよ……。

「うん。小嶋君が見ないのなら、雛ちゃんに――」

僕が雛ちゃんにＤＶＤを渡そうと差し出したとき、それを横から奪われた。

僕の近くにいるのは雛ちゃんと小嶋君の二人しかいないので、奪ったのは当然小嶋君だ。

「ちょっと待てよ」

ＤＶＤを持って雛ちゃんを睨み付けている。

「んだよ。それは今から私が借りんだよ。てめえは寝てろカス」

「うるせえ。このＤＶＤは佐藤が俺に貸すために持ってきたものな

んだよ。誰が有野に渡すか」

し、しまった。雛ちゃんと小嶋君は仲が悪いんだった！　喧嘩が始まっちゃったよ！

「小嶋、てめえいらねえいらねえ言ってたじゃねえか！」

あれ？　なんで知っているんだろう？　今来たんじゃないのかな？

「はぁ？　知らねえよ。これは俺が借りるんだよ。有野はどっかいってろ」

「んだとてめえ！　さっさとＤＶＤよこせ！」

「うるせえ！　てめえは俺の次だ！」

バチバチと火花を散らす二人。

「小嶋の次なんて嫌に決まってんだろうが！　ブッ飛ばされたくなかったらそれよこせ！」

「ぎゃーぎゃー喚くな！　佐藤に決めさせればいいだろうが！」

「ああ、いいぜ。そうしよう」

おろおろと間近で見守っていた僕に二人の視線が集まる。

「う」

「佐藤。これは俺に貸してくれるために持ってきてくれたんだよな

？　なら、俺だろ」

「優大。こいつ見ねえぞ。嫌がってたじゃねえか。でも私は見る。ちゃんと見る。お前から勧められたから全部見る。二回見ちゃうもんね」

「俺だってちゃんと見るに決まってんだろう。適当言ってんじゃねえよ有野」

「うるせえ黙れタコ。なぁ？　優大。私に貸してくれるよな？」

雛ちゃんの笑顔。

こ、怖い。何故だか怖い。

「これは俺に貸してくれる予定だったんだろ。なら俺に貸すべきだ」

「予定は未定なんだよ。いいからそれよこせ」

「渡さねえよ。俺が見た後に見ればいいじゃねえか」

「それが嫌だって言ってんのが聞こえねえのか？」

「あーはいはい。じゃあ、俺が先に」

「勝手に決めてんじゃねえ！」

うう！　怖い！　逃げていいかな！

「佐藤、俺に貸してくれるよなぁ」

「優大、私だろ？　私に貸してくれるよな！」

「う、ううう……」

どうすればいいんだろう……。

って、考えるまでも無いよ。

「その、小嶋君に、見てもらいたいな」

「よっしゃ」

小嶋君が嬉しそうにガッツポーズを見せた。

それとは対照的に雛ちゃんがとても悲しそうな顔で僕の肩を揺さぶってきた。

「ええー！　なんでだよ優大！　私には見せたくねえってのか？！」

「ち、違うよ。その、あの、ここでは言えないけど……」

國人君の家にＢＤボックスがあったよって言いたい。けどお兄ちゃんのことを隠したがっているみたいだし言えないよ。あとで説明しておこう。

「とにかく、それは、小嶋君に貸すね」

「ああ、サンキュウ。月曜返すわ」

「……ちくしょう……」

雛ちゃんが悔しそうに僕らの元から離れて行った。

「へっ。ざまあみやがれ」

雛ちゃんの後ろ姿を見て、小嶋君がとても嬉しそうに笑っていた。

……ちょっと聞いてみよう。

「あの、小嶋君、雛ちゃんのことが嫌いなの？」

「……嫌いだな。大っ嫌いだ」

「な、仲良くすれば、いいと思うけど……」

「……まあ、そりゃ仲良いことはいいことだと思うけど。……お前は有野と仲良いな。どういう関係だ」

「僕？　僕はただの幼馴染だよ？」

「……それだけか？」

「うん。それだけだよ。ずっと話していなかったし、幼馴染未満かも」

「……そうか」

どこか安心している様子の小嶋君。

「どうしたの？」

「なんでもねえよ。これ借りるからな」

「うん。是非楽しんでね！」

「……おう……」

何故かげっそりした表情でＤＶＤを眺めていた。

作戦五日目、金曜日にしてやっと小嶋君に渡すことができた。

よし、これで小嶋君がこのアニメを気に入ってくれたら、そこから話ができるね。

元気のなくなった小嶋君を残して、作戦成功に満足した僕は自分の席に戻って行った。

きっと今日から楽しい人生になるに違いないね。

優しい勘違い

「席につけー」

いつものセリフを言いながら先生が朝の教室に入ってきた。
みんなが席に着いたのを確認して先生が今日の連絡事項を伝える。
いつも通りだね。

「えーっと、今日から七月に入ったわけだが」

え、もう七月？　気づかなかった。

「来週からテスト週間に入って、部活は全面禁止に――」

テスト週間か。
期末テストが七月十一日、十二日、十三日の三日間で行われて、その一週間ほど前の七月四日から十日までの七日間がテスト週間になる。先生も言っていたけれど、この間は部活動禁止。放課後がとても静かになる一週間だ。部活のせいで勉強に時間が割けない人はこの一週間に全てをかけている。頑張ってもらいたいね。
僕は部活なんかしていないのに普段勉強していない怠け者なので、僕もこの一週間に全てをかけている。頭が良くなりたいよ……。

「テストが終われば夏休みに入るわけだが、そこでだ。楠と有野と佐藤には、文化祭で何をするのかを考えていて欲しいんだ。夏休みに文化祭の準備をするのが通例になっているからな。準備をはじめないところもあるが、年に一度の文化祭、われらが一年六組は気合を入れて行こう」

文化祭。
文化祭は確か十月の第二週の土・日だったかな。
八月から準備をするなんて、気合が入っているね。

「テスト勉強も大切だが、出来れば夏休みに入る前に何をするのかを決めておきたい。勉強の合間でいいから、こっちの方もよろしく頼むぞ。楠、有野」

僕は華麗にスルー。確かにいいアイデアなんか出せないけどさ…。

・
・
・

と、言うわけで。
放課後、楠さんの呼びかけにより、急遽委員長会議が開催されることになった。
誰もいない教室で四人固まって座る。
え？　三人じゃないのか？　一人多い？
うん、何故だか前橋さんがこの場にいるんだ。委員長っぽい見た目だからいてもいいよね。僕の方が場違いだし。

「三人は何かやりたいことある？」

楠さんが机に置かれたルーズリーフをシャーペンでコツコツと叩く。

「私は別に」

「有野さんが別に無いのなら私も無いです」
「なるほどなるほど。佐藤君は？」
僕も特にこれがやりたいって言うのは無いけれど。
「僕は、なんでもいいよ」
「そっか。なら、メイド喫茶と……」
何故か楠さんが分からないけれどメイド喫茶と書いていく。
「ちょっと待て！　メイド喫茶なんて嫌に決まってるだろう！」
雛ちゃんが猛然と抗議する。恥ずかしいよね。
「有野さんが嫌がっているんですから私も嫌です！」
「え、別にやりたいことが無いって言ってたから何でもいいのかと思って」
「やりたいことはねえけど、やりたくないことはある。それはその筆頭だ。誰がメイド服なんて気持ちわりぃもん着るか！」
「私だってごめんです！　着るのなら楠さん一人で着てください！」
「当然私だって嫌だよ。だから、みんなで一緒に考えよ？」
楠さんがにっこりと雛ちゃんに微笑みかける。
雛ちゃんは大きくため息をついて「分かったよ」と言った。

……楠さんと雛ちゃん、それほど仲が悪いようには見えないね。

「佐藤君もなんでもいいとかふざけたこと言わないでちゃんと考えてね」

「あ、はい。分かりました」

笑顔が怖い。

「じゃあ何かいいアイデアはあるかな？　みんながやりたがっていることってなんだろうね？」

「やっぱりサテンとか飲食系の店じゃねーの。私は嫌だけど」

「当然私も嫌です！」

「え？　二人はどうして嫌なの？」

「面倒くさそうじゃん。別に対して稼げるわけでもねえだろうし、それなら忙しいことしたくねえ」

「私もそうです！」

「なるほどね。佐藤君は飲食系どう思う？」

「え、うん。僕は、別に、飲食系でもいいよ。みんなもやりたがるだろうし」

「君の意見を聞いているのに他の人のことを考えてどうするの」

「あ、そうだね……ゴメン」

「別に怒ってないからいいよ。とりあえず、どんなものがあるのか出していこう。他に何かあるっけ？」

「んーオーソドックスなところで行くとお化け屋敷とか劇とかか？でもどっちも面倒くせえなぁ……」

「そうですよね！　私もそう思います！」

前橋さんはやっぱり雛ちゃんと仲がいいなぁ。

「あとは展示とか、発表とかかな……。佐藤君は何か思いつく？」

「えーっと……、僕は特に思いつかない、です」

「あっそ。やっぱりこの中から何か選ばなきゃいけないのかな。飲食系、演劇系、展示系、研究発表系。一旦この中からクラスのみんなに選んでもらおうか」

「そうだな。それがいいな」

「いえ、私は有野さんがすべて決めるのがいいと思うんですが……」

「そうなったらこのクラスは文化祭不参加になっちゃうからダメだな」

「では不参加で行きましょう！」

「駄目に決まっているでしょう」

楠さんが苦笑いを見せた。

「不参加は冗談としても、やっぱり私は楽なもんがいいなぁ。優大も楽なもんがいいよな？」

「そう、かな？　せっかくの文化祭だし、忙しくっても、僕はいいけど……」

「有野さんの言うことを否定するんですか？！　佐藤君ふざけています！」

うう！　前橋さんに怒鳴られた！　正直前橋さんに怒鳴られるのが一番怖いよ！

「まあまあ落ち着いて。確かに、せっかくの文化祭なんだから一生懸命やろうよ、ね？　有野さん？」

「あー。まあそうだな。私一人の文化祭じゃねえし、楽なのがいいとかはもう言わねえわ」

「さすが有野さん……。心が広すぎます……！　好きです有野さん！」

「はいはい」

……もしかして、百合？

とか考えたらダメだ！　友達をそんな目で見たらダメだよ！

「では、とりあえず時間が取れた時に私がクラスのみんなに何系が

いいのか聞いてみるから。次の話し合いはその系統の中でどんなものがあるのかを考えてみよう。大体何があるのかを私達で決めておけばクラスでの話し合いがスムーズに行くと思うし」

「そうだな」

「じゃあ早いけど今日はこれで終ろうか。これ以上話が進むわけでもないし。次はクラスのみんなでどんなものをするのかを決めてからでいいよね」

「んー。分かった」

楠さんが僕をちらりと見る。僕も何も文句が無いので頷いた。

「よし。それではまた次の機会に。でも、佐藤君」

「？」

楠さんが無の感情を見せる。

「佐藤君もっと積極的に話し合いに参加してよ。促されてからじゃなきゃ発言しないとか、面倒くさいからやめてよね」

「あ、ご、ごめん……」

「自分のわがままも出していこう」

そういって少しだけ笑った。

「うん」

そうだった。そっちの方が楽しい人生になるってこの前楠さんに教えてもらったんだ。少しは自分の意見を通す努力をしよう。

「今日は突然集まってもらってごめんね。でも多分次の開催も突然になると思うから許してね」

「……。……ああ、分かった」

「さすが有野さん……。物わかりが良すぎです……！　好きです有野さん！」

「はいはい」

次は、積極的に行かなきゃね。

「優大」

解散した後、一人下駄箱へ向かって廊下を歩いていたところを雛ちゃんに引き留められた。

「どうしたの？」

振り向き雛ちゃんの顔を見る。その顔はすぐれない。

「え、な、何かあったの？」

もしかして、また僕が何か粗相を……？！

「いや……」

雛ちゃんが一度辺りを確認して僕に聞いてくる。

「お前、若菜と何かあったのか？」

「え？」

何かって、何だろう？

「特に何もないけど……」

最近はまともに声かけてもらってないしね。お弁当も一緒に食べてないし、僕は小嶋君にＤＶＤを貸そうと躍起になっていたし。

「どうして？」

「……なんかさ、さっきの話し合い中若菜がお前に対して刺々しかったから……」

「え？　そうだった？」

いつもの楠さんより優しかったけど……。

って、そうだ。

「ぼぼぼ僕は何も知りません？！」

「やっぱり何かあったんだな？！」

「何もないですよ？」

「嘘つけ！」

もう慣れてしまっていたけれど、僕は楠さんに脅されているんだった。忘れてた。

それのせいで楠さんは僕と二人きりの時ストレートな感情で接してくるのだけれど、その態度が今日少し漏れ出してしまったみたいだ。雛ちゃんはその違和感を感じ取ってしまったようだ。うぅ、ばれたらまずいよ。僕が楠さんに酷いことをしたってばらされてしまう……。……してないのに……。

「なんか若菜の奴、お前のことを見下していたみたいだったよな……」

「そ、そうかな？　普通だと思うけど。それに、見下されても仕方がないし」

僕だしね。

「……もしかして、小嶋がお前を殴ることと関係してんのか？」

「え、それは関係ないよ？」

「……。……やっぱりお前を殴ってたのは小嶋だったんだな」

あ、しまった。ばらしてしまった。誘導尋問にひっかかってしまった……。

「で、でも、小嶋君は、多分もう殴ってこないと思うから、大丈夫だよ」

「……朝なんか貸してたもんな……。……私も借りたかったのに……」

落ち込んでいる雛ちゃん。そう言えば何も説明していなかった。

「大丈夫だよ雛ちゃん。あのＤＶＤより画質のいいものが國人君の部屋にあったから。それを貸してもらえば見れるよ」

「誰があんなデブから借りるか。私はお前から借りたかったんだよ。お前から借りなきゃ意味ねえよ」

え……。僕から借りたかったって……、それって……もしかして……もしかしなくても……。

……それほど國人君のことを嫌っているってことだよね……。

悲しいよね……。

落ち込みうつむいていた雛ちゃんが引き締めた顔を上げた。

「そんなことより今は若菜のことだ」

う。

「だ、大丈夫だよ？　何も、何もないよ？」

「嘘つくな。私とお前の関係だろ、遠慮せずに何でも相談しろよ」

「う、うん。でも、本当に何もない、から……」

適当に笑ってごまかそうとしたけれど。

「優大」

雛ちゃんが僕の両肩を持って真剣な表情で見つめてくる。

「お前が悲しい思いをすると私も悲しいんだ。お前が嫌なことされると私も嫌なんだ。言えないようなことされているのかもしれねえけど、私たちは……親友、だ。何も隠さないで相談してくれ。若菜に何をされているのか想像もつかねえけど、大丈夫。私なら何でも受け止める。どんな理由でいじめられているのか分からねえけど、私ならなんとかできる」

「い、いじめは、ないよ……？」

多分。

「いじめ『は』ないよってことは、他に何かされてるんだろ」

う。失敗した。

「他にも、何もないよ。僕なんかが楠さんと関われるはずないよ」

「嘘つけ。一緒に飯食ってたじゃねえか。それも何か関係してるんだな……。……もしかして、若菜に自分の弁当を食われていたとか……？」

「それはないよ。お昼を食べるときは何もされてないよ」

「お昼を食べるとき『は』何もされてない……。他の時に何かされ

てんだな……」

僕のバカ！

「い、嫌だなぁ、他の時も、何も酷いことされてないよ？」

「酷い事か……」

え？！　僕また失敗した？！

「優大。なんでも言ってくれ。若菜に口止めされているんだろうけど、私なら大丈夫だ。うまくやる。絶対にお前を困らせない」

「えっと……」

「私はお前のことを大切に思っている。お前のためなら何でもできる。私はお前を困らせたりしない、もうお前を悲しませたりしない……。……だから、私はお前を悲しませている原因を取り除く。お前のためにしてやりたい。大丈夫、私なら、やれる」

真剣な雛ちゃんの顔。僕は内緒にし続けなければいけないのかな……。これだけ僕のことを想ってくれている人を心配させたまま、何も言わないでいなければいけないのかな。

「優大、お前は若菜に、何かをされているな？」

「……」

「優大」

僕の肩が優しく揺すられる。
そのせいか、口から言葉が漏れ出した。

「……う、うん……」

「……。何をされているんだ？」

「……そ、その……、僕……」

言ってもいいのか。
脅されていると、言ってもいいのか。
僕は、何故だか言いたくない。
楠さんが持っている僕の脅す材料。
それがばれるのが怖いから、何だろうけれど……。
何か胸につっかえる。
何か、言いたくない別の要因がある気がする。
……。
それでも。
雛ちゃんに心配をかけるのはよくない。
僕を心配してくれている雛ちゃんに何も言わないのはよくない。
多分、言った方がいいのだろう。
言えば、きっと何かが変わるのだろう。

「……あの、僕……、楠さんに――」

「ふぅー……ふぅー……！」

どこからか聞こえてくる荒い息遣い。雛ちゃんの後方に伸びる廊下から聞こえる。雛ちゃんは僕から話を聞き出すことに一生懸命でそれに気づいていないようだ。

僕は気になりその息遣いのする方をじっと見てみた。
柱の影からゆっくりと、前橋さんが顔を出した。

「ぐぎぎぎぎ……！　あ、有野さんと、あんな間近で……！　佐藤優大……！　佐藤……！」

「あばばばばば」

怖いっす。

「どうした優大?!」

突然怯えだした僕を雛ちゃんが揺する。
僕が一点を見ていることに気づいた雛ちゃん。

「誰かいるのか?!」

勢いよく振り向くが前橋さんはすでに顔を引っ込めている。

「……誰もいねえな……」

雛ちゃんがゆっくりと僕に向き直し、聞いてくる。

「……なるほど。……真実を言うことがそれほど恐ろしいってことか……」

「え?!　ち、違うよ?!」

「分かった、分かったよ優大。何も聞かない。口にするのが恐ろし

いっていうんなら何も聞かない。優大が若菜に対して恐怖を抱いているって事実だけで十分だ」

「え、いえ、それは本当に違くてですね！」

壮絶に勘違いをなさっていますよ？！　早く誤解を解かなければ！

「大丈夫だ優大。私に任せろ。何も聞かねえけど、何かヤバいことが起きているのは分かった。私に任せろ……！」

「ひひひ雛ちゃん？！　本当に、本当に違うんだよ？！　その、僕が怯えているのは――」

「ちょっきん……ちょっきん……ちょっきん……」

前橋さんがまた顔を出していた。

僕に恨みのこもった視線を送りながら、左手で自分の綺麗な長い銀色の髪の毛を少し掴み、右手に握られたハサミで毛先を少しずつ切っていた。

「うななななななな」

「優大。大丈夫だ、優大」

僕は勘違いしている雛ちゃんに優しく抱きしめられた。

前橋さんが毛先を切るのをやめ、左手に持っている髪の毛を剪断する勢いで噛みしめ泣きだした。当然、僕を呪い殺さんとばかりに睨みつけながら。

女の子に対してこんな感情を持ってしまうなんて失礼極まりないのだろうけれど、正直に言います。

ごめんなさい、とても恐ろしいです。関わりたくないです。
怖すぎます。
目から涙がこぼれてくるくらい怖い。

「大丈夫だ、泣くな優大。安心しろ」

頬で僕の涙を感じ取ったのか、雛ちゃんが僕を抱きしめながらあやすように後頭部をポンポンと叩いてくれた。
違うんです、違うんです。
僕は目の前で繰り広げられているホラーショーに恐怖して涙を流しているんです。でも声がうまく出ない情けない僕。

「私が、何とかしてやるからな……！」

ぐっと、僕を抱きしめる腕に力を込めた。
今更ながら、この状況に気づき僕はドキドキしてしまった。
前橋さんに対する恐怖と抱きしめてもらっている緊張で、僕の心臓が過労死してしまうのではないかと言うくらい胸の中で跳ね回っていた。
そのあと一緒に帰ることになった僕ら。
道中「勘違いだよ」と言うことを伝えると、雛ちゃんも「分かった。大丈夫だ。私を信じろ」と答えてくれたので多分誤解は解けたと思う。
多分……。
大丈夫だよね？

まりも：へえ。なるほど。色々あった金曜日だったね。

ユウ：うん。でも、なんだかこれから楽しい毎日が続きそうな予感がするよ。

まりも：いい予感だね。それが当たることを願っているよ

ユウ：僕もそうなったらいいと思うよ

まりも：ところで、最近お姉ちゃんの話を聞かないね。何かあったのかい？

日常のことばかり話していたまりもさんとのスカイペ。

以前の僕には、遊び相手と言える人がお姉ちゃんと弟しかいなかったので日常のことを話すとなれば自然とお姉ちゃんや弟のことが話題になってしまう。でもここ最近はお姉ちゃんと遊ぶことも少なくなっていたのでまりもさんにお姉ちゃん話をすることがほとんどなかった。

今まで毎日のようにしていた家族の話。突然それが無くなってしまったので、もしかしたら僕とお姉ちゃんの間に何かがあったのかもしれないと、まりもさんは心配してくれているのだろう。

ユウ：大丈夫だよ。何もないよ

まりも：本当かい？　毎日遊んでくれていたユウ君が構わなくなっ

てしまってお姉ちゃんは悲しんでいるんじゃないかな

ユウ：お姉ちゃんには友達いっぱいいるし、それはないよ。むしろ僕にかまわなくなった分自分の時間が取れるようになったから喜んでいるんじゃないかな

まりも：そうだといいんだけどね。なんだか後々厄介なことになりそうで心配だよ

厄介なことって、何だろう？
僕がお姉ちゃんと遊ばないことによって何かおもわしくない事が起きるのだろうか。
想像もつかないや。
とりあえず、まりもさんの不安を取り除かねば。

ユウ：大丈夫だよ。お姉ちゃんと僕はずっと仲良しだから

まりも：それは嬉しいことだね。まあ、そもそも。私なんかが口を出していいことではないのだろうけどね

うん。
無事に不安も取り除けたみたいだね。
何も心配することは無いよ。
家族内の関係も、僕の人生も。
僕はパソコンを切って伸びをした。少しめまいがして机に手をついた。ううん、伸びをした時のこの意識が遠のく感じってなんなんだろう。もしかして僕の伸びの仕方が間違っているのかもしれないね。

深呼吸をして、窓の上にかかった時計に目をやる。
十一時前。
明日は休み。まだ寝るには早い。
時計の下から覗く星空を見たら、なんだか少し散歩がしたくなった。
……うん。
少し散歩しよう。
心配をかけないために家族に一声かける。
そのときに、弟が「隣町で殺人があって、犯人は捕まっているけど物騒な世の中だから気を付けて」と言ってくれた。
……散歩、やめようかな。

結局僕は散歩に出かける。
こんなにきれいな星空が見えるんだ。散歩しない手はない。
なんの偶然か今日は新月。
新月と言えば真っ先に國人君を思い出すけれど、もう新月の災厄は起きないはずだから何も心配することは無いよね。
新月の夜は星がよく見える。
でも、月が見えた方が夜空は素敵だよね。
暗い夜道。もう人通りも車通りも少ない。明りが消えている家もある。
とっても静かな街並みだ。
虫の声が季節を感じさせる。
もう夏だね。
七月一日。
あと三週間もしないうちに夏休みになる。待ち遠しい。
この夏休みは何をしよう。宿題は早く終わらせよう。お姉ちゃんたちと海へ行こう。弟と山へ行こう。何か目標を立ててそれを達成しよう。文化祭の準備もある。一生懸命頑張ろう。できる事なら、

今年の夏は、友達と沢山過ごしたい。僕は人を誘うことを今までしてこなかったけれど、今年は僕から誘ってみよう。断られることを恐れずに、僕から声をかけよう。きっと、そのほうが、いつもの夏より楽しくなるから。

そんなことを考えながら、暗い夜道をひたすら歩く。

マンホール。

何となくその上で立ち止まってみる。

いつもは聞こえない水の音が、底の方から響いてきた。

音まで昼とは違う。

夜の散歩も悪くない。

楽しいな。

……弟から話を聞かなければ……。

正直怖いです。

何も気配を感じていないのに無意味に何度も後ろを振り返ったりして風景を楽しめていなかったりする。

……、もう、帰ろう。

何もないのだろうけれど、こんな気持ちじゃあ楽しめないよ……。

夜の散歩は十分ほどで折り返し。僕は来た道を引き返して家に向かった。

・　・　・

……。

……大変だ……。

家の前に、怪しい人がいる……。

夏なのにニット帽をかぶり、顔を隠している。背は僕と同じくらいで高くない。多分、女の子……。

泥棒……？

怖い……。

襲われちゃうかもしれない。

殺されちゃうかもしれない。
でも。
でも、あそこには僕の家族がいる……。お父さんお母さんお姉ちゃん弟……。
そうだ……。僕の人生に必要なのは勇気だって教えてもらったじゃないか。それに、今は僕だけしか気づいていないんだ……。
僕がやらなきゃ誰がやる！　強気に行けば相手だってびっくりして逃げるはずだ！　ガツンと言ってやる！

「あ、あのー……、す、すみません……」

僕は近づいて声をかけた。

「？！」

ニット帽の人は、僕の存在に気づき慌てて逃げて行った。
……。
……とりあえず、追い返すことができたね。僕の勇気の勝利だ。
でも本当に泥棒だったのかな？
郵便受けの中に手を突っ込んでいたから、もしかしたら夜の郵便配達だったのかな。だったら悪い事しちゃったなぁ。びっくりさせちゃって申し訳ないよ……。
僕は郵便受けの中を確認してみた。

「あ、何か入ってる」

やっぱり夜の郵便配達だったんだ。

「ごめんね」

僕は郵便受けに入っている手紙を取り出した。
ピンク色の封筒にハートのシール。これはどう見てもラブレターだね。きっと女の子が僕の弟にラブレターを持ってきてくれたんだね。ならやっぱり悪い事しちゃったなぁ……。責任を持ってこのラブレターを弟に渡そう。罪滅ぼしではないけれど、せめてそれくらいはやらなければ。
僕は家に入って弟の姿を探した。
あれ、いない。
お風呂かな。
なら、弟の部屋に置いておこうかな。
僕は二階への階段を上がりながら何気なくラブレターを眺めてみる。
……。
「あれ僕の名前が書いてある」
……。
……。
……。
あ、これ僕への手紙だ。
「えええええええええええ！」
僕の驚きの声にお姉ちゃんが部屋から飛び出して抱き付いてきたけれどなんとか引きはがして僕は自室へと逃げ込んだ。
「はぁ、はぁ、はぁ……」
僕は部屋に入ってすぐに扉に寄り掛かる。

「なんてことだ……！」

こんなのあり得ないよ！　僕なんかがラブレターをもらうなんて……！

「い、いや、まだラブレターと決まったわけじゃないよね……！　漫画とか、アニメとかなら、こういう手紙は大抵果たし状とか、脅迫状とか、ラブレター以外の内容なんだよ……！」

僕はゆっくりと開封した。

きっと、この手紙の中身は、果たし状か、脅迫状だよ。

どっちかなんだよ！

思い切って手紙を取り出し読んでみた！

『呪われろ呪われろ呪われろ呪われろ呪われろ呪われろ呪われろ呪われろ呪われろ呪われろ呪われろ呪われろ呪われろ呪われろ呪われろ呪われろ』

呪詛だった！

「ひぃぃぃぃぃぃ！」

なんだこれ！

さっきまでのドキドキとは別のドキドキが胸を襲う。

実はちょっとラブレターかな？　って期待していたのに！　がっかりだし怖いし、どうすればいいの僕は！　このもやもやをどう発散すればいいの？！

ってそんなこと考えている場合じゃない！　これはいったい何？！　怖いよ？！

「いい一体誰が？！」

がたがた震える僕の手から、と言うより手紙の間から何か白っぽい糸のようなものが落ちた。

なんだろうかと思い、しゃがんで拾い上げてみた。

「……」

ぐわー。

これは銀色の髪の毛だー。

「……前橋さん……」

どこからどう見てもクラスメイトからの呪詛ですね。

「なんで……」

手紙の本文は『呪われろ』だけではなかった。

続きを読んでみる。

「えーっと……」

いろいろと雛ちゃんへの思いが書かれていたが読み飛ばす。

……ざっと読んだところ、重要だと思うところはこの一行だけ。

『有野さんの邪魔になる人間は排除します。排除します。排除します』

三回言わないで。怖いよ。

やっぱり、どうにも、僕は、前橋さんに嫌われまくっているよう

だ。

わざわざ僕の家まで来てこんな手紙を入れていくなんて……。

……やっぱり、今日雛ちゃんに抱きしめてもらったことが原因だよね……。

……なんとか前橋さんと仲直りしたいよ……。こんな身近なホラー嫌すぎるよ……。

僕は手紙を封筒の中に戻し机の中にしまった。

……。うん。

とりあえず、今日のところは寝よう。

何もかも忘れよう……。

僕は眠った。

逃げるために、忘れるために、夢だと錯覚するために、眠った。

でもそれは間違っていた。僕はこの時点で前橋さんからの手紙の意味をよく考えてみるべきだった。

――この手紙は、僕だけに宛てられたものではなかったのだ。

委員長会議にて

七月四日。
今日からテスト週間だ。
部活が禁止になる一週間。勉強に打ち込むための一週間。
僕もこの一週間のうちに詰め込まなければ大変なことになってしまう。頑張らねば。
とりあえず、前橋さんの恐怖は忘れ去ろう。勉強の邪魔だからね。
頭の悪い僕は朝から勉強。これくらいしなくちゃ赤点取っちゃうよ。
僕はカリカリ勉強する。
カリカリカリカリ。

「……おい、佐藤」

僕のような人間に声をかけてくれる人間が。
誰だろうかと顔を上げる。

「え？　あ、小嶋君。おは、よう……」

え、殴られるの？
身構えたけれど、殴るモーションも連れ去るモーションも見せない。
どうやらなにもされないみたい。

「……その、なんだ。……佐藤から借りたＤＶＤ……。……見た」

「え！　本当？！　どうだった？！」

と、聞いてみたけれど、何やら表情が冴えませんね。これは、面白くなかったみたいだね……。

「あの、ごめんね……。面白くないものを貸してしまって……」

殴られちゃうのかな……。

「……なんだ、その、まあ、あれだ。なぁおい……」

「面白くなかったよね……。小嶋君にアニメとかは似合わないよね……。ごめんね……」

「まあ、俺には、アニメなんか似合わないけど？　……でも、まあ、勧められたら見るのが義理だし？」

「ありがとう……。僕の為に時間を割いてくれて……」

「これくらい、大した手間じゃねえから、いつでも、いいぜ」

「あ、ありがとう……」

酷いことされたけれど、小嶋君もいい人だなぁ。

「それで、このＤＶＤを有野に貸せばいいんだよな」

「あ、うん」

國人君からは借りたくないと言っていたから、これを貸した方がいいんだよね？

「うん。雛ちゃんに貸してあげて」

「……分かった……」

小嶋君がＤＶＤを持って雛ちゃんの方へ向かっていった。

でも、残念だな……。小嶋君的には面白くなかったかぁ。気に入ってくれればその話で盛り上がって仲良くなれると思ったのに。でも見てくれただけで嬉しいね。小嶋君が優しいってことが分かったし、作戦は成功したって言ってもいいよね。何となくだけど、もう殴られることも無い気がする。

目で小嶋君を追う。

雛ちゃんに話しかけている小嶋君。あ、言い合いが始まった。小嶋君がＤＶＤを押し付けて、雛ちゃんがそれを突き返した。小嶋君がもう一度押し付けて雛ちゃんがまた突き返す。……前橋さんが教室の隅で小嶋君を睨み付けている……。早く……！　早く逃げて小嶋君！　切り刻まれちゃうよ！

あ、帰ってきた。

「なんだよあいつ！　何が『てめえから受け取るわけねえだろクズ！』だ！　俺から受け取ろうが佐藤から受け取ろうが何も変わらねえだろうが！」

「ま、まぁ、まぁ。きっと、見る気が無くなっちゃったんだよ」

「だとしても言い方ってもんがあるだろう！　畜生！　あいつふざけやがって！」

お、怒ってるね……。

どうすれば仲良くしてくれるのかな。

「……これ、とりあえずお前に返す」

「あ、うん」

小嶋君からＤＶＤをもらった。

「……佐藤？　別に他の奴を借りてもいいけど？」

「へ？」

何を言っているのか分からない。

「お前のおすすめのＤＶＤがあればまだ見てやろうかなって言ってんだ」

「え？！　ほんとう？！」

もう一回チャンスが貰えるんだ！　ありがたいね！

「今度はきっと面白いものを持ってくるから！」

「え？　あ、そうだな。次はもっと面白いものを見せろよ」

「うん！」

小嶋君が難しい顔をして離れて行った。

その表情の意味は分からなかったけれど、次は笑顔を作れるように頑張ろう。

今度は失敗しないぞ。

「席につけー」

先生が教室に入ってきた。

みんなが座る。

「えーっと、今日からテスト週間だな。部活も無くなるし、放課後ダラダラ残ってないで勉強頑張れよ」

今日はあっさり終わった。次の授業まで少し勉強できるね。

と思ったのだけれども。

「先生」

楠さんが手を挙げて教室中の注目を集める。

「どうした、楠」

「文化祭のことで少しいいですか」

「ああ。なんだ？」

「放課後までに、みんなにどういう系統の催しをするのかを考えていてほしいんです」

「系統？」

「はい。飲食系、演劇系、展示系、研究発表系。とりあえず大まかにやりたいことを決めようと思うんです。もちろんこの四つ意外に何かやりたいことがあればどんどん行ってもらって構いません。放課後にもう一度聞こうと思うので――」

・・・

結果、クラスの大多数は飲食系がやりたいとのことだった。
結果が出たので放課後、早速委員長会議が開かれた。
今日も前橋さんがいるので四人。

「やっぱり飲食系か……」

アンケート結果を眺める楠さん。

「文化祭と言えば飲食系だもんね。他のクラスも喫茶店とか焼きそばとかやりたいだろうし他のクラスと差別化を図らなきゃね」

「……。そうだな……」

どこか元気のない雛ちゃん。どうしたんだろう？

「飲食系で他のクラスがやらないようなものって、何かあるかな？」

僕に視線をくれる楠さん。

「え、えーっと……。アイス屋とか……」

「十月なんだから寒くて客こないでしょ。そりゃどのクラスもやらないよ」

「じゃあ、焼肉屋とか……」

「衛生管理されていないこの教室で保存された肉誰も食べたくないよ」

「なら……綿菓子、とか」

「露天じゃないんだから」

「そ、そうだね……」

困った……。どうしよう……。

無い脳みそを絞って考えてみるけれど、くだらないものしか出てこない。

「えーっと……。雛ちゃんなら――」

と、僕が隣に座る雛ちゃんにへらへら笑いながら声をかけようとしたら、その隣にいる前橋さんにものすごい目で睨まれた。

「ひっ」

勝手に体が畏縮する。この前もらった手紙が効いているよ……。

「優大?!」

突然怯えだした僕に雛ちゃんが声をかけてくれる。

僕の肩に手を置き僕の目を見てくれる雛ちゃん。

「大丈夫だ。私がいるだろ」

「え、うん」

雛ちゃんがいれば前橋さんに襲われることは無いってことかな。

「……！」

何故だか分からないけれど雛ちゃんはものすごい勢いで楠さんを睨み付けていた。

楠さんは僕の正面で「有野さんどうしたの？」と言った笑顔で首をかしげている。

ちなみに前橋さんは雛ちゃんの横で「佐藤どうしてやろう？」と言った笑顔で首を不自然に曲げている。怖い。

雛ちゃん声は掛けられないみたいだし、僕が考えなくちゃ……。

「えっと、その、漫画喫茶とか、どうかな」

「入り浸る人が出て回転が悪くなっちゃうよ」

「なら、ダーツ喫茶とか……」

「ダーツバーみたいな？　どうかなそれ……」

「うーん……」

どうしよう。

他のクラスがやりそうになくて、教室でできそうなもの……。

「コンビニ……とか……」

「飲食店じゃないでしょ。ふざけてるの？」

「ご、ごめんなさい……」

確かに、今のはちょっとふざけた解答かも……。申し訳ないね……。

僕は落ち込み顔を伏せようとしたが、突然鳴った大きな音にびっくりして目を見張った。

雛ちゃんだ。雛ちゃんが机を思いっきり叩いた音だった。

「おい若菜……。てめえ自分から優大に聞いたくせになんだよその態度。ふざけてんのはお前じゃねえか」

僕と同じように驚いていた楠さん。

雛ちゃんの言葉に悲しそうな笑顔を作った。

「……ごめんね……。確かにちょっと言葉がきつかったかも。ごめんね佐藤君」

「え、う、うん……その、僕が悪いから、楠さんは悪くないし、あの、二人とも、喧嘩は……」

「そーです！　悪いのは佐藤君です！　即刻謝罪を要求します！」

何故前橋さんがここで話に入ってくるのかが分からないけど、謝ろう。

「ふたりとも、ごめんね……」

「だから、悪いのは私だって。謝らないで」

にっこりと無理な笑顔を作っている楠さん。顔が引きつっている。

「そーです！　悪いのは楠さんです！　即刻委員長の座を有野さんに明け渡してください！」

「えーっと、それは、ちょっと……。みんなが選んでくれたんだし、そう簡単に私の意志で明け渡すわけには……」

苦笑いで返す楠さん。

前橋さんは以前ぷりぷりしている。

「しかし有野さんを怒らせた楠さんは委員長にふさわしくないと思うんですが！　明日署名を集めようって今日の夜決心しますよ！」

……なんで今日の夜？　今じゃダメなの？

「まあ、クラスの総意なら仕方ないけど……」

「な？！　……今、私を馬鹿にしましたね？！　どうせ署名は集まらないからやっても無駄だって、そう思いましたね！？」

「……全然そんなこと思ってないよ？」

「くぅぅぅ……！　これが勝者の余裕と言う奴ですか……！　分かりました！　そこまで言うのであれば――」

「未穂」

と、雛ちゃんが前橋さんを睨み付ける。

「――ご、ごめんなしゃい……。静かにしましゅ……」

「……」

鋭い眼光のまま楠さんの方を向いた。

「……えっと、ごめんね？　有野さん」

「……」

ふん、と一度鼻を鳴らし面白くなさそうに腕を組んで目を閉じた。

……。

……。

……。

重たい沈黙。僕は耐えきれません。

「あの、何するのか、考えては、みませんか……？」

「……そうだね。せっかく集まったんだし、考えようか」

極力明るい調子で言う楠さん。

「えーっと、有野さんは、何かいいアイデア、あるかな？」

「……別に」

「別に無いですよ！　もちろん私もありません！」

「そ、そっか……」

二人の答えと困った笑顔の楠さん。
また沈黙が流れる。
……。なんでずっと雛ちゃんは機嫌が悪いのだろう。
聞きたいけど、怒られそうだし……。
みんなが黙り込んでいた。
どこに地雷があるのか分からないこの空間。
うかつに歩く人間誰もいなかった。
楠さんが、足元を確かめるようにゆっくりと声をだす。

「じゃあ、今日はもう、解散……しよっか。また明日の放課後集まろう？　それでいいかな、みんな」

あっという間に終わってしまった。何も話し合っていない。これじゃあ集まった意味ないよ。
でも、もう続けられる気配でもないし……。
やめた方が、いいのかな……。
あまりよくない気がするけど……。

「……あぁ……。分かった。優大もそれでいいよな？」

「え？！　う、うん」

突然問いかけられて思わずうなずいてしまった！　僕のバカ！

「ならもう帰ろうぜ」

雛ちゃんがカバンを持って立ち上がり僕らを促す。

「もうテスト週間だ。早く帰らねえと勉強する時間が無くなっちまうぞ」

じっと僕を見たままそう言った。
そうですよね。僕バカだから早く帰らなきゃ大変なことになるよね。

「……なら、明日までに、どんなものがあるのかを考えてきてね、みんな」

「……」

また楠さんを睨み付ける雛ちゃん。
それに対して、楠さんも少し強い視線で返す。

「……。……あのーなんで怒らせたのかを聞いてもいいかな」

「別に」

機嫌悪そうにそっぽを向いた。

「別になんでもありませんよ！　もともと敵同士なんですから、慣れ合うつもりは皆無です！」

イーッ！　と前橋さんが楠さんを威嚇した。

「……そう。分かった。私が気に入らないんだね。それはまあ、しょうがないことだよね、うん。それに関しては何も言わない。でも、文化祭の話し合いはちゃんとしよう？　ね？　みんな楽しみにしているんだから」

「……」

楠さんに攻撃的な目を向ける雛ちゃん。

「……ああ……」

不機嫌な顔のままだったけれど頷いた。

「優大、帰るぞ」

そう言って、僕を待たずに先に教室を出た雛ちゃん。前橋さんもそれに続く。

「えっと……。その、さようなら……？」

恐る恐る声をかけてみる。

「……さようなら。さっさと帰れば」

予想通り、楠さんの機嫌は最高に悪かった。

「あの、きっと、何かあったんだよ」

「うるさい」

「う……。ごめん……」

「これ以上機嫌を悪くしないために早く有野さんの元へ行ってよ」

「うん……」

楠さんは一度も僕を見ることは無かった。
前橋さんと校門で別れ、雛ちゃんと一緒に帰っている途中、色々聞いたのだけれども、何一つ教えてくれることは無かった。ただ「大丈夫だ」と、その言葉を繰り返していた。
なんだか、金曜日のことをまだ勘違いされているような気がする……。

僕の部屋のスタンドが机の上の教科書とノートを夜の暗い部屋に浮かび上がらせている。
うーん。困ったなぁ。
机に向かうけど勉強がはかどらないよ。
なんだか色々と考えることが多いなぁ。
シャーペンを放り投げて伸びをしてリラックス。
うーん……。小嶋君に何を貸せばいいんだろう……。多分ハーレムとかラブコメとかは苦手だと思うんだ。だからそうじゃないものを貸さなきゃなんだけど……なにがいいのかなぁ。
椅子から立ち部屋の電気をつける。そして本棚と向かい合った。
なにか、いいものは……。
スライド式の本棚を動かし本を探す。
上から下へ、眺めてる。
そしてある本へと惹きつけられた。
そうだ。これにしよう。
僕は本棚から一冊の本を抜き出した。黒い表紙に赤い文字。

「ブラクララグーン」

ブラクララグーンとはブラウザクラッシャーとは何一つ関係なくタイのとある町でのアウトローなお話。
きっとこれなら小嶋君も見てくれるよね。
さすがに学校にＤＶＤボックスを持っていくのは恥ずかしいし小嶋君も嫌がると思うので録画したやつを持って行こう。
よし、問題が一つ片付いた。
次は前橋さんからもらった手紙。
僕は手紙をしまった引き出しをあけ、ゆっくりとしめた。
うん。どうしようもないや。
次に行こう。
次は文化祭の催し物。
うーん。僕なんかじゃあいいアイデア思い浮かばないよ。
……。うーん。
……。うーん。
……。うーん。
……。あ、そうだ。
多分却下されるだろうけど、思いついたのでメモしておこう。
……。
よし。
一つ考えれば十分だよね。
さて。
最後の問題だ。
楠さんと雛ちゃんの喧嘩……。
きっと雛ちゃんは僕の為に怒っているんだ。僕と楠さんの間にある問題を大げさにとらえてしまっているんだ。誤解は解いたと思ったのに、まだ解けていなかったみたいだ。
うん。明日また誤解を解こう。
とりあえず、手紙以外の問題は片付いたし、勉強しよう。
僕は椅子に腰を下ろした。

頑張ろう。

とっても勘違い

火曜日。
今日も一日頑張ろうと、気合を入れて校舎内に入った僕だったけれど、下駄箱でその気合がへし折られた。

「手紙が……入ってる……」

この前もらった手紙と同じ封筒だ！
手紙を持って慌ててトイレへ。
ううう……。ラブレターじゃないのが悲しい……。
個室に入り手紙を開封。
まあ、当然呪詛でございます。
えっと、
『警告したはずです。有野さんに近づくなと』
そんなの、自分勝手だよ。
封筒の中身は手紙だけではなかった。

「……！」

粉々に切り裂かれた僕のライトノベルだ。その破片が封筒の中に入れられていた。
やっぱり前橋さんが切り裂いていたんだ……！

「……。どうしよう……」

どうすれば前橋さんに許してもらえるんだろう。
雛ちゃんに近づかなければ怒られないんだろうかれど、そんなのは嫌だ。雛ちゃんは高校初めての親友だもん。理不尽なお別れは絶

対にしたくない。
でも、どうしよう……。
なんだかこのままでは命が危ない気がするよ……。
いい考えが浮かばない僕は、とりあえず手紙をしまって教室へ行った。
教室にたどり着き、扉に手をかけたところで僕は引き止められた。

「佐藤、佐藤っ」

小声で僕を呼んでいる。誰だろう？
辺りを見渡してみると、柱の影から誰かが僕に手招きをしているのが見えた。
柱の影から覗いているというのはこの前の前橋さんを連想してしまうけれど、今度は男子みたいだから安心していいよね。
近づいてみる。

「あ、小嶋君。おはよう」

「お、おう」

「どうしたの？」

何か、秘密の話かな……。
え。もしかして僕殴られるの？

「その、ＤＶＤは……」

「あ、うん。僕小嶋君が気に入りそうなアニ――」

「しーずかにしろぉ～……」

「え？　うん……？」

アニメっていうのが恥ずかしいのかな。

「よし、今渡せ」

あたりをきょろきょろと見渡している小嶋君。そこまで警戒しなくてもいいと思うけど。

「うん。はい」

僕はカバンの中からＤＶＤを出して渡した。

「しょ、しょうがないから、見てやるんだからな。別に佐藤の為じゃねえんだからな」

「え、あ、うん」

ツンデレだ。

「明日返す」

「え、明日？」

「あ？　明日は都合悪いとでもいうのか？」

「う、ううん。そんなことは無いけど……」

結構長いから明日は無理だと思うけど……。まあ、いいや。

「うん。分かった。もしよければ、他のも持ってくるから」

「ん、ん？　そうだなぁ？　まあ、佐藤がどうしてもっていうんなら、見てやる」

「うん。どうしても」

「しょうがねえな。見てやる。見てやるから、持ってこいよ」

「うん」

やった。またチャンスをくれるんだ。いい人だなぁ。

「じゃ、じゃあ、そういうことで」

そそくさと教室に入って行った小嶋君。

なんだか様子がおかしいけれど、見てくれるのはいいことだから問題はないよね。

僕はいい気分で教室に入った。

が、前橋さんと目が合って背筋に冷汗が流れる。

目が合うだけで怖い……。

「よう、優大」

ドアの前に突っ立っているところ、後ろから肩を叩かれた。

「あ、雛ちゃんおはよう」

「おはよう。どうしたんだこんなところで突っ立って」

「え、あ、なにも無いよ」

「……また何かに怯えてんな……。若菜か……」

ほにゃんとした目を恐ろしい目に変えて教室を見渡す。

「あの、雛ちゃん」

「なに」

う、そのままの目で僕を見ないで……。ちょっと、怖いです。

「その、僕が楠さんに何かをされているっていうの、勘違いだからね？」

「ああ、分かってる。私には全部分かってるから。そうだな、お前は何もされていない」

「本当だよ？　僕何もされてないよ？」

「何もされてないな。うん。そうだな」

「……本当に、分かってくれた？」

「もちろんだ。何もかも分かってる。お前が心配するようなことは、何もない」

「う、うん。なら、いいんだけど……」

……本当かな？

「有野さん！　おはようございます！」

突然僕を押しのけ前橋さんが雛ちゃんの前に立った。

「おはよう未穂。今日も楽しそうだな」

「はい！　とっても楽しいです！　……ある人間がいなければ……」

きらりと光を反射しているレンズ。きっとその下では僕を睨み付けているんだろう。

「ぼ、僕、自分の席に戻るね」

「え、ああ、私も行くわ」

「……佐藤……優大……」

名前を呼ばれるだけで怖い！

「ななななんだか今日は眠たいからちょっと僕寝ようと思うんだ！？　その、前橋さんも雛ちゃんと一緒にいたいみたいだし今日のところは僕一人にしてくれないかな？！」

「なんだ？　夜遅くまで勉強してたのか？」

「うん！　そうなんだ！　僕バカだから、毎日たくさん勉強しないと大変なことになるからね！」

「ならしょうがねえな」

雛ちゃんが前橋さんを引きつれて自分の席へ。

「……佐藤……優大……」

もうやめてください……。

なんだか最近学校で落ち着けないなぁ……。

僕の平和な日々はどこへ行ったのだろう……。

あっという間に時間が過ぎて、放課後になった。

今日も委員長会議が開かれる。

当然、前橋さんもいらっしゃる。

「……」

「……」

空気が重い。

雛ちゃんは怒っているし楠さんはムッとしているし前橋さんは雛ちゃんを見てうっとりしているし……。

……よし、ここは、僕が一つ、ガツンと気合を入れよう！　委員長会議はクラス皆の為に開かれているものなんだから、僕らの個人的な事情は置いておかなきゃね！　それに勇気が必要だって教えてもらったんだし、ここでそれを実践しなくちゃ僕はダメになる！

ビシッと言って、みんなを引き締めよう！

「あ、あ、あの……、みんな、その……話し合い、しよう？」

「……」

「……」

「はぁ、はぁ」

う……、誰も答えてくれない……。

強引にでも進めた方がいい気がする。

「昨日、楠さんが言っていたこと、その、僕、考えてきたよ」

「……ふーん。そう」

「ふーんそうって……。お前せっかく優大が考えてきたんだから、褒めるなりなんなりしろよ！」

「それはごめんなさい。代わりに有野さんが褒めてあげて」

「はぁ、はぁ、あ、鼻血……」

前橋さん、自重して……。

楠さんと雛ちゃんの関係、明らかに昨日よりもギスギスしている。

……はぁ……。

実は、放課後にいたるまでに、この二人は何度も衝突しているのです……。

雛ちゃんはずっと楠さんのことを睨んでいたし、楠さんも最初は我慢していたようだけど、さすがに限界が来たみたいで本当の楠さ

んがちらちらと顔を覗かせている。
一触即発だよ。

「優大、よく考えてきたな」

楠さんに言われたのでかどうかは分からないがにっこり笑顔で僕を褒めてくれた。

「考えることは小学生にもできるけどね。その内容が重要なのにそれも聞かずに褒めるなんて……」

「うるせえな。考えてきたことは偉いだろうが！」

「そうですね。偉い偉い」

「てめぇ……」

「そんなに怖い顔で睨まないでよ。私は女の子なんだから」

「私『は』ってなんだよ……。まるで私が女じゃねえみたいな言い方だな」

「そう捉えるということは自覚があるんじゃない？」

「……あはは。若菜は面白い奴だなぁ……！」

雛ちゃんのこめかみに青筋が浮かんだ。
こ、ここれはたた大変だぁぁぁぁ……！
二人で会話をさせていたらとんでもないことになる！　間違いないよ！

前橋さんは雛ちゃんを眺めることで精いっぱいだし、僕が何とかせねば……。

「あの、みんなは、何か、考えてきた、かな？」

とりあえず会議を進めれば……！

「私は何も考えてないかな。ちょっとイライラしててね」

「奇遇だな。私もイライラして何も考えられなかったんだ」

「へぇ、そう。でも一緒にしないでほしいな。私は理由があるけど有野さんには理由がないでしょ？」

「あるに決まってんだろ。大切な友達に酷い事している人間がいるんだ。ムカつくだろう」

「それが私だって言いたいの？　言いがかりはやめてもらいたいね。私が何したっていうの？」

「……それは、何も聞いてねえけど……」

「へー。もしかして、私がその人に何かをしているっていうのも、有野さんの妄想なんじゃないの？」

「く……！　でも、確かに若菜を見て怯えているんだ！　何もしてないっていうんなら、その理由はなんなんだよ！」

「さぁ？　怯えているのも気のせいじゃない？　妄想力豊かだねホント。全然羨ましくないけど」

「ぐぐぐ……！　て、てんめぇ……！」

くやしそうだ！　大変だよ！　机をひっくり返しそうな勢いで握りしめているよ！

「あ、あの、今は、会議だし、その、ね。喧嘩は、やめようよ！」

僕が止めなきゃ……。

だって、前橋さん雛ちゃんの横でトリップしているんだもの……。

僕以外にいないよ……。

「……優大？　お前、若菜に何かされてるよな？　何されてる？」

雛ちゃんの優しい笑顔。

でも内心穏やかじゃないね……。

「僕、何もされてないよ？」

楠さんの目の前でばらせないよ。

「優大。安心しろ。お前は私が守る……！」

「雛ちゃん……」

「佐藤佐藤佐藤……！」

前橋さんが雛ちゃんの後ろで修羅っていた。

「ひっ」

怯えた僕を見て雛ちゃんが叫ぶ。

「あ！　ほら見ろ！　優大が怯えてるじゃねえか！」

「それは有野さんに対して怯えているんでしょ。怖いもの」

「怖くねーよ！　なぁ？　優大……？」

とても怖い顔で同意を求められた。

「は、はい……怖くないです……」

「ほら見ろっ、怖くないってよ！」

「いやどう見ても脅していたでしょ」

ううん……ごめん雛ちゃん。少し怯えてしまいました……。

今度は楠さんがにっこり笑顔で僕に聞いてきた。

当然内心穏やかではない。

「私何もしてないよね、佐藤君？　……レイプ……」

「ななな何もされていませんよー？！　まったく、何もされていませんよ！？」

「どう見ても怯えてるじゃねえか！　あと若菜最後になんて言った？　レイク？　湖？」

「え？　ううん？　プって言ったの。レイ――」

「そんなことよりもぉ！　会議をぉ！　しようよー！」

無駄にがたがた机を鳴らす僕。

「ちょっと佐藤君。暴れないでよ。うるさい」

「うるさくもなりますよ！　その、ね！　僕考えてきたんだ！」

「それは凄い。ほら、褒めてあげてよ有野さん」

「褒めるよ！　偉いなー優大」

「ぐるるるるる……」

前橋さん！　お願いだから僕を威嚇しないで！
とにかく、発表しないことには始まらない！

「僕が考えてきたのは、和菓子喫茶？　と言えばいいのかな……。喫茶店じゃなくて、茶店（ちゃみせ）、って言った方がいい気がする」

「茶店？　和菓子出すのか？」

雛ちゃんが話に食い付いてくれた。

「うん。普通文化祭の喫茶店って言ったらケーキとか、ドーナツとか、洋菓子を振舞うと思うんだ。でも和菓子ならちょっと珍しいかもって思って」

「へぇ……。結構いいんじゃねえか？　未穂もそう思うよな？」

「え？！」

突然振られて驚く前橋さん。
ものすごく葛藤している。
雛ちゃんと仲のいい僕を褒めることは死んでも嫌だけれど雛ちゃんを批判することも死んでも嫌だ、と。
その結果。

「い、いいんじゃぁ、ない、でしょう、か……と、思い、ます……」

苦悶の表情で雛ちゃんに同意した。地獄の苦しみを味わうことになったみたいだ。

「ふーん。佐藤君の割にはまともな意見だね」

「てめえ優大の割にってのはどういう意味だ！　優大は凄いだろうが！」

「具体的にどんなところが？」

「……そりゃ、優しいところとか……」

「他には？」

「……可愛いところとか……」

「他には？」

「……」

「え？　他には？」

「……」

「なになに？　他には？」

「……っ」

「まさか、もう打ち止め？　有野さんの言う優大（笑）のすごいところってそれだけなんだ。それは凄いねー」

ちょっと待って？　なんで今僕の名前に（笑）がついたの？

「う、うるさい！　優大は言葉じゃ言い表せないくらいすごいんだ！」

とっても恥ずかしいけど、嬉しいね。でも、嬉しいんだけど、前橋さんのいないところで褒めてほしかったかな！　多分僕無事に家に帰れないんじゃないかな！？

「まあ、冗談は置いといて、（笑）君の意見いいと思うよ」

（笑）をとるんじゃなくて僕の名前をとるんだ。

「あ、ありがとう。でも、これを思いついたのは楠さんのおかげなんだ」

「私のおかげ？」

「……なんでだよ優大……。てめえ、どういうことだよ……！」

ななななんでこんなに睨まれているの？！

「はぁ、はぁ……。あ……貧血気味……」

前橋さん……。お願いだから、床の掃除は自分でしてね……。

「あのときに食べさせてもらったおはぎがとってもおいしかったから、みんなも食べたらいいのになぁーって思って」

「ああ、あの時の手作りおはぎ……。……なるほどね……」

納得の表情の楠さんと驚きにあふれている表情の雛ちゃん。

「ゆ、ゆうた？！　なんで、若菜の手作りおはぎなんて食べたんだ？！　いつ？！」

「え？　えーっと、この前楠さんが僕の部屋に来た時に……」

あれ？　これって言ってもいいのかな？　僕が連れ込んだってことになってたんだっけ？

「な、なな、な……！」

愕然としている雛ちゃん。まあ、確かに僕の部屋なんかに楠さんが来るなんて考えられないよね。衝撃受けても仕方ないよ。

「どーしてわかながゆーたのへやにいってるの？！」

「え、えっと、その……」

窓の外に立っていたからなんて言えないよ……。信じてくれないし……。

ここで楠さんの助け舟。

「そう言う仲だから、ね？　佐藤君？」

「え？」

そう言う関係って、主従関係の事かな？　それなら僕の部屋に来てもおかしくないよね。頷いても問題ないよね？

「う、うん。そうなんだ」

頷いてみた。

失敗だったのかもしれない。

「……あ、ががががががが……」

雛ちゃんが壊れた。

「ごめんね、有野さん。黙ってようと思ってたんだけど……。ばれたら仕方ないね。私たち、そういう関係なの。くふ」

なんで最後に笑ったの？

「……う、う……」

「え？！　ひ、雛ちゃん？！　なんで泣くの？！」

「ぐす……」

「間違いなく絶対に百パーセント雛ちゃん勘違いしていると思うよ？！」

「か、勘違い……。そ、そう……。……私、勘違いしてたみたいだ……。優大も私の事気になってるのかと思ってた……」

「え？！　雛ちゃんのことは好きだよ？！」

「ううう……もう、いい……。嘘はいいよ……優大……」

「う、嘘じゃないよ！」

どこからどう見ても勘違いされているよねこれ！　どういう勘違いかわからないけど！

「うるせぇ！」

突然怒られた！　泣いている雛ちゃんに怒られた！

「てめえら……！　覚えてやがれ！？」

カバンを掴んで涙を散らしながら教室を飛び出した。

「ま、待ってください……有野さん……私、貧血で……」

前橋さんもよろよろとその後を追って教室を出て言った。

残された僕と楠さん。

今日も、楽しくない会議の終わり方だった……。
後で謝ろう……。

「……。怒らせちゃったね佐藤君」

「う、うん。でもなんで怒ったのか僕には分からない……」

「……ぷっ」

「わ、笑わないで……」

「これは、面白い。有野さん、いい気味だね」

「そんな……。なんで雛ちゃんをそんなに目の敵にするの」

「それは有野さんに言ってあげて。私は敵対心なんて持ってなかったんだから」

「……そういえば、雛ちゃんは前から楠さんに突っかかってた、ね……」

僕の言葉に楠さんが微妙な顔をする。

「……なんだかその勘違いは有野さんが可哀そうだから訂正しておいてあげよう」

「え？」

「有野さんが私に文句を言いに来ていたのは、周りの人が有野さんにそれを期待するからなんだよ。しょうがなく、有野さんは私に文

句を言っていたんだよ」

「え？　どういうこと？」

「有野さんは、私に嫉妬している人のガス抜きの役割を担ってくれていたの。嫉妬している人の代わりに有野さんが私に言うことで、その人のストレスを定期的に発散させていたっていうこと。溜まって溜まって大変なことにならないように、私の為を想ってやってくれていたことなの。それを知っていたから私は別に有野さんのことを嫌っていなかったし、うるさいとか思っていなかった。昨日まではね」

「そうだったんだ……」

「でも昨日からなんだか普通に突っかかってくるようになってね。しかもどうやらそれは君が私のことをばらしたからみたいだね……。どういうつもり？」

「え、ぼ、僕ばらしてないよ？！」

まだ。

「……まあ、さっき有野さんもそう言っていたし、そうなんだろうけど。でもだとしたらなんでばれたの？　私は完璧だったはず……。君もいつも通りに見えた。原因は何？」

「えっと、その、多分勘違い……」

「勘違い？」

昨日あったことを話す。

雛ちゃんが楠さんと僕の関係がおかしいと違和感を持ったこと。そしてその時にたまたまいた前橋さんを見て僕が怯えたこと。それを雛ちゃんが、僕が楠さんに対して怯えているだと勘違いしたこと。僕が言いそうになったこともちゃんと言ったよ。

「……ふーん。なるほどね……。でもそれが間違いじゃないっていうのが勘違いだと一概に言えないところだね……。まあ、もはやどうでもいいけど。また明日から睨み付けられる生活が始まる。いえ、もっとすごいことになりそうだけど」

「勘違いだよって、教えてあげれば解決するよね」

「無理だね。私たちの脅し脅されの関係を言わない限り納得しないと思うよ。思い込み強いでしょ、有野さん」

「え、う、うーん？　そういうところも、あるかな……？」

あるね。

「そう言うわけで、有野さんはさらに勘違いしてしまっているのでした」

「さらに勘違いって、いったいどういう勘違い？」

「本当に鈍いね。でもどうしようもないからそのままで生きていくしかないと思うけど。じゃあ私は帰る。あ、明日君の和菓子喫茶、みんなの前で発表するから。佐藤君が考えましたって。いいでしょ？」

「え、う、ん。もちろんだよ」

却下されなかった。よかった。

「それじゃあね。ばいばい。優大（笑）くん」

「それやめてよ……」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8722x/

キョーハク少女

2011年11月24日02時47分発行